
とある姉の原作破壊

食器野さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある姉の原作破壊

【Nコード】

N8172L

【作者名】

食器野さら

【あらすじ】

死んだと思っただら目の前に見知らぬおっさんが！？え、何？原作ブレイクしてくれ？行先は・・・『魔法少女リリカルなのは』あ！？

チート能力を手にしたオタクっ娘、同じ境遇を持った二人と共に原作ブレイクをすべく西へ東へ奔走する！！

タイトル一部変更です。

はじめに

砂原さばくと申します。

これから書く小説は、ブーム(?)にのっとり転生物を書いていきます。

原作ブレイク、残虐な描写、多数ではありませんが含まれます。

上記の二つが苦手、あるいは嫌いだ、という方は読まないことをおススメします。

なお、下記の二名様からオリキャラの設定をいくつか提供していただきました、この場を借りて、お礼を述べさせていただきます、本当にありがとうございます！

桃桜様

サワノ様

新参者ゆえ未熟な部分が多いですが、長い目で見てくれるとありがたいです。

よろしく願いします！

ブログ（前書き）

ブログです。

あと、登録し忘れていたタグがいくつかあったので、追加しました。

プロローグ

よし、状況整理だ。

あたしは秋葉原にいった。

そりやもう初めてだったし、楽しかったよ？リリカルの同人誌を買ったり、劇場版のポスターを拝んだりして、充実の一言につきたねん？何？あたしの性別？残念ながら女よ。

……いいじゃん、リリカルかつこかわいいじゃん、魔法少女ってのは女の子の夢なんだよ。

っていけねえいけねえ、話が反れたね、ごめん。

でだ、結構満喫した後、喫茶店メイテジャナイで昼ご飯を食べてたんだ。

そしたら、（多分居眠りとか、ハンドル操作しくじったとかの）トラックが突っ込んできたんだ。

しかもあたしに向かって一直線に。

うん、意識途切れた、多分、や、絶対死んだよ。

……死んだはず……なんだけどなあ？

「とりあえず、おっさんだれよ？」

「……おっさんとは失礼だな？」

いやいやいや、だって死んだと思ったら真っ白な空間に浮いてて、目の前にはかのFATEに出てくる……なんだっけ？麻婆豆腐が好きな神父さん……だったと思うけど、とにかく！そいつっぱいのが目の前にいるのさ！！

「ふう……まあいいだろう、わたしは……そうだな、クリイ
とも呼んでくれ」

「……クリイ？」

「ああ」

うーん……ま、いいか。

「おっけ、クリイさんね」

「本当は名無しなんだがな」

「ふーん、そんで？死んだはずのあたしに何か用？」

「ああ、とりあえず率直に言おう、今からお前にはそちらで言う『魔法少女リリカルなのは』と呼ばれる世界に転生してもらう、そこで起こる悲劇を、最善の結果で終わらせて欲しい」

「……はい？」

つまり……。

「それ遠まわしに原作ブレイクしろって言ってるようなもんだよね？」

「そうだな」

この野郎、否定しなかったな。

「お前達の世界で通っているこの世界で起きた悲劇……プレシア・テストロツサの暴走、死亡や夜天の書の管製人格の消滅……わたしはお前達の世界でそれを見て、止めなければならなかった」「ということとは？その残された人……フェイトやはやて達に同情したってこと？」

「それもあるが、実は理由はもう一つある」

もう一つ？何だろ……。

「同じ世界で、何箇所かの歴史が歪んだのだ」
「……というところ？」

「具体例を述べれば、死ぬべきでない人が死んだり、敗北すべき悪が勝利したり・・・だな」

「・・・何となく分かった、つまりあたしがそこにいってその歪みをとめて来いってことね？」

あたしがそういうとクリイは「理解が早くて助かる」といった。んーでも、疑問が・・・。

「『何故自分が行かなければならないか？』・・・だろう？」

ちよ、この人読心術でも備えてんの！？

「顔がそう語っていたからな、結論から言つと無理だ・・・実を言つとわたしは『記憶図書館

《ライブラリ》』と言う能力の管製人格だからだ、この次元の狭間以外で実体化が出来ん、だから適合者を見つけては故意に死亡させ、わたしの能力を与えて転生させていた・・・今回はお前を含めて三人適合者がいた」

・・・をい、ちよつとマテや。

「あたしが死んだのは故意？しかもあと二人いるだつて！？」

「そうだ、おまえ達にはいい迷惑かもしれない、だがわたしとてこれだけは譲れん、侘びといつては何だが、お前と後の二人にはわたしの能力以外に、あと二つ能力をくれてやろう」

「・・・それはいいけどさ、一つ聞いていい？」

腹は立つたけど、この人は本気だ、そして、心から救いを願っている。

でもあたしだってどうしても気になることが一つあった。

「あたしが死んだとこの喫茶店……あたしと後の二人以外での死亡者はいる？」

「おらん、さすがに怪我人は出てしまったが、わたしは適合者以外犠牲者を出さん主義でな」

「そう、よかった」

ま、とりあえずは一安心？

「んじゃ、後二つの能力をくれるんだっけ？」

「そうだ」

「だったら……」

かくかくしかじか

「ふうむ……いや、くれてやると言っておいてなんだが、原則ではないか？」

「大丈夫、あんたほどじゃないから」

ああ、そうそう、実はさっきの『かくかくしかじか』の間に記憶図書館《ライブラリ》の能力を教えてもらった。

つつても、結構簡単なもので『アニメや漫画、ゲームの術技、アイテムを実際に使える』っていうけっこうチートなものだった。

さらにデバイス無しでそれを発動できるってんだから驚きだけど、詳しく聞いてみるとデバイスが不要な代わりに、デバイスのAIにあたるやつ（管理者^{オーナー}って言うらしい）を、第二人格として埋め込まれるみたい。

つと、その前に……。

「後の二人は？」

「まだ目覚めておらん、当たり所が悪かったようだな、もうしばらくは眠り続けるだろう」

「そっか」

クリイが、あたしのほうに向き直る。

「そろそろ時間だ、準備は？」

「おっけ、いつでもいらっしやーい！」

「そうか、では」

あたしの足元に真っ黒い穴が開い……………ん？穴？

「健闘を祈る」

クリイは何事もないようにあたしにサムズアップしてきた。
ん……………とりあえず。

「おっさん……………」

一瞬の浮遊と、怒りを感じながら。

「せめてこういうことはもっと早く言ってほしかったなああああ
あああああ！？」

あたしは落ちていった。

ブログ（後書き）

ブログ終了ですが・・・。
長い

なげもつと短くまとめ切れなかった自分orz

ごめんなさい、いきなり未熟っぷりの披露です；

次回からいよいよ本編です。

ユーザー登録していなくても感想かけるようにしましたので、ご意見、ご感想いつでもお待ちしております！

それでは！

第一話現地到着！（前書き）

一話です。

第一話現地到着！

（穴に落ちたときはさすがにびびったけど、無事に転生できたみたいだし、まあ、いいのかな？）

でも・・・ね。

「おぎゃあああああああ！！？」（なんですかこれはあああああああ！！！？）

あーはい、皆さんお察しの通り、今のあたし赤ちゃんです。感情に任せて叫んじゃったせいか、看護婦さんの視線がいたいよう。

（・・・お・・・き・・・け・・・）

やっぱり冷静が一番よね、うん、でなきゃこれから先やっていけないさぞ。

（マス・・・は・・・きづ・・・）

つーかこっちでのあたしの名前はなんだろうーな？

どれどれ・・・って、プレート外側についてんじゃん。よめねー。

（いいかげんに気付けや！！アホマスター！！）

「ぎゃん！？」

なんだなんだ！？いきなり頭の中で男の声が！？

（つつく……やつと気付いたか、マスター）

「あぶ……？」（ます……？）」

あ、そーいやクリイおっさんに管理者オーナーをもらったんだっけ？

「ぶぶ……。――（やーごめんごめん、短時間――？）で色々――（？）あつてちよつと混乱してたわ」

（まあ、話自体が急だったから……しかたないか、改めて初めましてだマスター、お前の管理者オーナーだ）

「あぶい――（よろしく）」

……って

（名前無いの？）

（ああ、クリイからお前からもらつうように言われた）

（ふーん、じゃあ……暗羅！『暗い阿修羅』で暗羅ってのはどーよ！？）

（暗羅か……うん、悪くないな文字的に）

（でしよでしよ、じゃよろしくね暗羅）

その後、今の状況とか、これからのことを話し合った。
とりあえず現時点で分かっていたり、決まったりしたことは。

1・あたしの名前は『一条飛鳥』という。

1・ここは海鳴市の隣の市の産婦人科である――（しかし両親の住所は海鳴）

1・あの時クリイにもらった能力は、今は使えない――（ただし、世間で言う『物心ついたとき』には発動可）

1・原作開始の数年前、なお現時点では、なのは、フェイト、はやては誕生していない。

ここまでが分かったこと、で、ここからが決まったこと。

1・いつ原作が始まるか、終わるかが不明なので、介入は原作第一期三話の『巨木騒動』―（飛鳥命名）か、よく戦闘の舞台になっている臨海公園周辺をうろつくことに。

1・クリイの言うとおり、テストロッサー家、リインフォースは絶対助ける。

1・同じ能力を持たされて転生してくるであろう、後の二人を探索、発見次第協力要請―（ただし、必ず二人とも味方としてでてくる訳ではないので必要であれば・・・）

（ま、こんなもん？）

（だな、最後の二人に関しては賭けといってもいいかもしれないが・・・赤ん坊の今じやなんともいえん）

（ですよね〜）

あ、そーいやさつきから眠いわ。

「くあ・・・」

（眠気か？）

（うん、赤ちゃんだからかな？眠くて眠くて・・・おやすみなさい）

（あ、おい！）

zzzzzzzz・・・。

（・・・本当に寝やがった、この野郎）

次の日、あたしが目を開けると、こっちでのお母さんがあたしを抱き上げていた。

本当に嬉しそうで、何度も何度も頬ずりをしてきてちよっとくすぐったかった。

何となく、前世のお母さんを思い出した。

今考えると親にとって子供が先に死ぬってのは相当な精神ダメージよね。

・・・・・・・・元気にしてるといいけど。

第一話現地到着！（後書き）

はい、終了です。

長いんだか短いんだか・・・（

次回かそのまた次回、多分主人公無双です。

第二話日常（前書き）

何とか病氣も治り、復活です！
遅くなつてすみませんでした；

第二話日常

さ、時はすぎあれから十年……ってこらそこ、話がすっ飛びすぎだっていわない。

こーいうのではよくある展開でしょー？気にしちゃ駄目なのよ？つげんげん、続けるよ？

といっても、まあ色々あつて、今あたしはとある剣道場でバイト中です。

労働基準法？大丈夫大丈夫、バイトっていつでも、最初と最後の掃除を道場のみんなとやったり、お客さんにお茶出したりする程度だから、労働に入らないわ。

ま、それは『今』問題にすべきことじゃない。

今更だけど、あたしが置かれている状況を確認しようと思う。

「どうした？こないのか！？」

「いや、こんな無茶振りに近いでしょう？」

「っ黙れ！！」

ひゅっとなんかあたしがいた場所に竹刀が振り下ろされた。

うん、お察し（？）の通りただいま戦闘中です。

ただ相手（辻つて名前の男子）の竹刀はあたしにかすりもしないけどw

まあ、そういうあたしの竹刀も辻にかすってないけど。

ええー、だつてめんどくさいもーんww

だつてこいつ負かしたら負かしたで『まだだ！』とかいいながら文字通り飛び掛ってくるのよ！？

おねーさんもういやー！！

「っとお！」

「よけるな!!」

「無茶振りやめてよゝあたし痛いのやーよ?」

「ほざけ!」

あーもうほんと諦めてくんないかな? 言つてないとは言え、あたしには『能力』がある限り勝てないんだけどな。

つかいい加減疲れてきたあ!

今日はもうこの辺でいいかなあ? 師範雇い主さんの視線が痛くなってきたし(泣

じゃあ、カタつけるか。

「幻狼斬!」

最近『見て』覚えた技だから、足運びに注意しつつ前方に辻に面をくらわせて瞬時に背後にまわり、後ろから切り払いをくらわせる。

結構な力で竹刀を叩き付けたから、辻の姿勢が崩れた。

もちろんあたしはそれを見逃さない! だってSだもん!!

あと、テイルズいいじゃないテイルズ!!

「つどお

ッ!」

胴に一闪! うーん我ながら綺麗に入っ たわゝw

お、師範雇い主さんが来た。

「辻、今日はもうこれでいいだろう、いつも通り練習に励むといい」
「うう・・・はい」

「一条もだ、お前はもともとこの門下ではないし、あまり大暴れされても困る」

「はい」

とりあえず一礼して返事しておく。

そりゃまあ、雇い主さんだし、何よりここは武芸の場だからね、礼儀を大切にしないと。

さ、今日の稽古が本格的に始まったようだし、あたしも働きますかね。

さてと、ただいまみんなで掃除中……なんだけど。

「飛鳥！そのそれを……」

「わーってる！あっちの棚でしょ？」

「ありがと！」

「飛鳥ちゃん！こっちの竹刀を倉庫に！」

「ほいほーい！了解！」

「一条！この鎧動かすの手伝ってくれ！」

「らじゃ！まかせろ！」

稽古が終わった後はこんな感じで毎日大騒ぎ。

あたしがバイトにくるようになってからはいくらかましになったら

しいけど、今でも十分ドタバタだと思うな。
つと、帰る時間だ。

「すみません！そろそろ上がります！」

「分かった、帰り道には気をつける」

「はい！」

「あー飛鳥待った待った！ほいこれ！妹ちゃんによろしく！」

「おお！翠屋のケーキ！ありがとー！また明日ー！！」

とまあ、最後が最後だけに毎日ドタバタのまま帰宅しているわけで、実は始めたばかりのころ事故にあいかけて、ちよつと大変だったのよね。

今？もちろん大丈夫よ！だいぶ慣れてきたしね。

そんなへませんわ！とか、某猫先生風にいつてみたり（笑

ああ、ちなみにあたしの両親はあたしがちつさい頃に他界したの。
で、親戚に引き取られたわけけども、うん、ちよつと、いやかなり、引き取られた先について驚いたな。

お、そろそろ家につく。

玄関を開けて、『妹』の名前を叫ぶ。

「たっだいまー！『はーやてー』！」

「おかえりー！」

そう、あの『八神はやて』の両親だったのよ！

苗字は一条のままだけど、戸籍上八神家の子供。

だからあたしのあとに生まれたはやては自然と妹になるわけで・・・

しかし皆さんご存知の通り、はやての両親もはやてに顔を覚えられ
る前に他界。

その所為か、はやてはあたしにかなり懐いている。

うん、ぶつちやけるよ？

可愛いなこの野郎！！テレビで見たときも十分可愛かったけど、生で見るとまた違った魅力があるぞこの子！！

車椅子での突進とびつきもなんのその！！こんなの慣れっこだい！横によけて抱きとめれば完璧さ！！

「そーりや！」

「きゃー！くすぐったーい！！」

「さ、今日の晩御飯は？」

ちよつと暴走しちゃったかな？

たつぷりはやてを満喫したあと、さりげなく今日の晩御飯を聞く。あたしがバイトをやり始めてから、はやてが料理当番になることが多くなった。

今じゃその辺の主婦に負けなくらいの腕前だよ。

「今日はカレーやで！はようせんと冷めてまう」

「おっしや！お腹すいたし、早く食べようぜ！ケーキももらったし！」

「おー！」

はやてにそう言って、一緒にばたばたとリビングに駆け込んだ。とりあえず、今の現状をまとめると。

- ・ 現在原作の二年前。
 - ・ あたしははやてとともに休学中。
 - ・ 遺産の管理をしてくれているのは原作通りグレアムさん。
 - ・ 『闇の書』もとい『夜天の書』ははやての部屋に健在。
 - ・ 後二人の転生者はまだ来ていない模様。
ライブラリ
 - ・ 記憶図書館、その他二つの能力使用可。
- つてところかな？

ん？勉強？大丈夫大丈夫、テレビで『見て』るからだいたい学力はついてるわよ？

にしてもこの世界にもあったのねN K、おかげで大助かりだわw
さて、あたしもはやてもとつとご飯を食べ終えて、風呂入って、
寝ようかしているところ。

そこでよく目に留まるのが……………。

「……………闇の書……………じゃなくて夜天の書か」

そう、『夜天の書』。

あと二年したら、シグナムたちがこう……………ばーん！と出てくるあれよ。

そしたらうちにもぎやかになるわな、そう思うと今から楽しみだわ……………。

「おねーちゃんどうしたん？何かにやにやしよるよ？」

「ん？ああ、ごめんごめん、はやての足が治ったらどうしようかな……………って妄想してた」

「そうか……………、なんや嬉しいな」

そうやってにこつと笑うはやて。

あ……………もう、可愛いなあv

……………今の内からこんな顔見せられたら、そりゃ護ってあげたくなるよ。

いつの間にかはやてはあたしの腕の中で眠っていて、規則正しい呼吸を繰り返している。

あたしは黙って抱きしめて、そつと囁いた。

「おねーちゃんはいつでもはやての味方だよ」

第二話日常（後書き）

長い上にまとまっていない！（

自分の未熟さが悲しいです；

一応戦闘シーンもありましたが、長く続かないという・・・。
だいじょうぶかな？；

第三話まさかの・・・（前書き）

お待たせしました、三話です。
今回はあの人達が・・・。

第三話まさかの・・・

わたしは今、おねえちゃんと一緒に図書館に行っています。
これはもう病院に行った後とかの日課になっていたりして・・・。
わたしもおねえちゃんも本が好きなので、結構楽しんでいます。

「はやて、今日はどんな本読む？」

お姉ちゃんが車椅子を押しながらうちに聞いてくる。

「うん、ギリシャ神話あたりをよみたいなー思うとるんよ」

笑いながら答えておいた。

物心ついたときにはもうおとうさんもおかあさんもおらんで、代わりにおねえちゃんがいた。

おねえちゃんはよくわたしのことを気にかけてくれて、何かあったら一生懸命になってまもってくれる。

後で知ったことなんやけど、おねえちゃんは本当のおねえちゃんじゃないらしい。

なんでも、わたしが生まれる前にうちのおとうさんとおかあさんに引き取られたらしいんよ。

だから苗字も『八神』じゃなくて『一条』なんやけど、わたしのおとうさんとおねえちゃんのおかあさんは姉弟らしいし、親戚さんだから、おねえちゃんでもいいと思うとる。

「ギリシャ神話か、あの辺の話読んだことあるけど、けっこう面白いよ」

「そうなん？」

「そうそう！とくにヘラクレスの冒険は必見だね、あんなにわくわ

くしたのは初めてかも」

「ほんま！？わぁくはよう読みたいわく！」

両親がいないのは、寂しくないっていったら嘘になる。

でもおねえちゃんがいるし、心配かけたくないから、弱音は吐かないようにしているんよ。

大好きなおねえちゃんやもん、最近バイトも始めたし、忙しいやろうから……困らせたあかん。

って、ああ、もうこの角曲がったら図書館までもうすぐやね。

「はやて、そろそろつくよ？」

「はい！」

そんなやり取りの後、わたしらは角を曲がって、

かたまった。

S i d e 飛鳥

えーはい、皆さんどうも、一条飛鳥です。
突然ですが困ったことになりました。

角を曲がった途端、あたしの目の前に、

「グルル・・・ハグツ・・・ハグツ・・・」

リアルに『もの』を食ってるバケモンがいたのさ!!

口元から手が見えてるし!!グロいよ!!

白い仮面のバケモノはあたし達に気付いていないらしく、夢中で食ってる。

・・・ん? 白い仮面? まさか・・・。

あたりを見渡してみる。

嫌な予感はあるらしく、『通行人の誰もがバケモノなどいないかのように通り過ぎている』。

つまりあれは・・・。

ホロウ
(虚だな)

「(よく冷静に分析できるな、暗羅・・・) はやて・・・」

相手に気付かれないように、小さくはやてに声を掛ける。

どうもはやても『あれ』がみえているらしい、震えながら頷いた。

最大限の注意をはらって、ゆっくりゆっくり、今曲がった角を戻っていく。

つてか、何でここに虚がいるのさ!? 虚が出るのはBLE CHじや無かったつけ!!?

順調に進んでいたそのときだった。

バカン!!

「っだ!!?」

っしまった!! 声が!!

虚はこつちに気がついて、さっきまでのあたしと同じくらいゆつくりと振り向く。

「すみませ〜ん！大丈夫ですか！？」

あたしの足元にはサッカーボールが転がっている。

頭の後ろの鈍痛からして、多分あたしにあたったのだろう。

ボールの持ち主と思しき高校生くらいのお兄さんが、あたしをはやてを見て『大丈夫か』と聞いてきた。

この人も虚がみえていないようで、あたし達の顔色が悪いのは、自分の所為だと思っているのだろう。

「ごめんね、大丈夫？」

「は、はい！なんとか！」

「大丈夫です！」

虚が見えている所為で、あたしとはやては声が裏返ってしまった。お兄さんは申し訳なさそうにもう一度謝罪して頭を下げると、サッカーボールを持って、来た道を引き返していった。この道にはあたし達と虚だけになる。

「・・・・・・・・はやて・・・・・・・・」

再びはやてに声を掛けた。

虚はこつちを凝視している。

はやてはまた小さく頷いた。

「「っわああああああああ

！！！！！！！」

「！！！！！！」

あたしとはやてが大声を上げると、虚が咆哮を上げるのはほぼ同時だった。

はやての車椅子に片足を引っ掛けキックボードの容量で地面を蹴り続け、加速する。

向こうも負けていないらしく、始めは二本足で追いかけていたのが、次第に両腕（この場合前足かな？）もついて四本足で追ってきた。

S i d e は や て

「

！！！！」

どれくらいあのバケモノと追いかけてっこをしていたんやろうか。

またバケモノが叫び声をあげて、わたしらに追いついてきた。

おねえちゃんはつかまったらおしまい、ってことをわかってるんやと思う。

気がついたら、知らん景色の中を走った。

けど今は気にしたらあかん。

・・・怖い・・・死にたくない・・・！！

ふと目の前に意識を集中させると、分かれ道が見えてきた。
まっすぐ行く道と、ひだりにまがる道。

まっすぐの方は道の先が見えないけど、へんなところから看板がでてるから、たぶん坂道なんやと思う。

予想はあたってたみたいで、今わたしら目の前には坂道とひだりにまがる道があった。

おねえちゃんはどうちにくいか、ちょっと迷ってるらしい。

「あゝもう・・・」って眩きながら、足をどんどんふnderのがわかる。

でも後からはあのバケモノが近づいてきてる。

「・・・いいはやて？スピードが上がってきたらゆっくりブレーキをかけるんだよ？いきなりにしちゃうと、かえって転びやすくなるからね？」

いきなり耳元で、おねえちゃんがそう言ってきた。

何がなんだかわからないまま、わたしは坂道を、すべりだした。

「うやああああああ　　ッ!!!？」

今日で二回目の大声をあげながら、すごいスピードで坂道を下りていく。

風が目にあたって、なみだがぼろぼろ出てきた。

車椅子ゆうのは後ろが見えにくい。

やからと思う、坂道の終わりのところに人が見えた。

このままいくと、ぶつかってまう・・・!!!!

「あぶない!!!」

思いつきり声をはりあげたら、わたしは宙に浮いとした。

S i d e ? ? ?

「あゝ重で……………」

「だらしのないのう……………商店まであと少しじゃ、ほれ、頑張らんかい」

「そうだよ、頑張ろう?」

わしは今、買い物の帰りじゃ。

生活必需品が少なくなってきたので、家主に頼まれたんじゃが……………。

あやつめ……………明らかに必要でないものも頼みおつて……………。

おかげでわしら三人とも両手に山のような荷物を抱える羽目になったわい。

……………む?

「二人とも、気付いたか?」

「……………ああ」

「はい……………ホロウ虚ですね」

かなり霊圧が弱い奴なんじゃろうが、こんなに近くなるまで気付かんとは……………。

さて、どんな奴か……………面を拝んでやるとするかろう?

つれの一人の赤髪が、坂道の下の方に向かって走っていく。
確かにあの先に、虚の霊圧を感じる。

「あぶない！！！」

その大声がした途端、つれに何かがぶつかっていた。

「大丈夫！？」

もう一人のつれが赤髪に駆け寄り、無事を確認する。
赤髪にぶつかったのは、まだ十歳にも満たないと思われる女の子。
苦しそうに唸った後、弾かれるように起き上がり、坂の上を不安そうに見た。

「おねえちゃん・・・おねえちゃん！！」

どうやら坂の上に戻ろうとしておるようじゃが・・・。

「おねえちゃ・・・ああっ！」

立つことは叶わず、そのまま倒れこんだ。

・・・やっぱりか、車椅子も一緒に落ちてきたからまさかとは思ったが・・・。

それに、あの子が見ておる先をつられて見たお陰か、虚の姿も確認できた。

多分、その『おねえちゃん』が、この子を逃がす筈になった・・・
というところじゃろう。

「お嬢ちゃん足が悪いんじやろう？だったら無茶はせんほうがいい。
・・・あのバケモノに関してはまかせろ、わし等はその専門家じゃ

「からな」

『バケモノ』と『専門家』という単語に反応したのか、お嬢ちゃん
ははっとしてこっちを見てきた。

まったく、こんな可愛い妹を不安にさせるなんて……『おねえ
ちゃん』にはちと説教が必要なようじゃな？

「ジン太、雨、^{ウルル}この子を浦原商店につれてってやってくれ、虚に追
われている子はわしが何とかする」

「おう」

「分かりました」

「あ……あの！お名前は……？」

行こうかした時に、お嬢ちゃんが口を開いた。

別に名乗っても問題なさそうじゃし……かまわんか。

「わしか？四楓院夜一じゃ」

「っだあああもう！！しっこい！！」

ども、再び一条です（キラッ

・・・ごめんなさい、調子に乗りましたorz

まあ！それはおいといてだ！！

はやてを逃がしたあと、あたしは一人で虚と鬼ごっこをやったけど、うん、しっこい！しっこすぎる！！

なんなのさこの執念深さ！！何！？『狙った獲物は逃がさないぜ！』
つて奴！？

勘弁してよ！！

・・・って！

「！！」

「どはあ！？」

危な！！めっちゃ危な！！つか強お！！

右ストレートだけで地面割れるとかどんだけですか！！？

（マスター、反撃はしないのか！？）

（出来るワケないでしょーが！！虚がいるってことは、大方魂の調整者である死神もいる可能性があるってこと！！下手に攻撃して、撃破なんてやったら何されるか！！）

（なるほどな、しかしこのままではギリ貧しいとこだ！！）

（ですよねーっとお！！）

暗羅と話し合いをしながら、再び飛んできた虚の右ストレートを文字通り飛んでよける。

「っだーもう！！こーなったら開けた場所に移動する！！」

結構いっぱいだった所為か、オープンで暗羅に話しかけた。

（そこにいつてどうするんだ!？）

「下級の魔術つかって、反撃する!!今更思いついたけど、よーは倒さなきゃいつてことよ!!」

（なるほど!）

「つーわけで!サーチ頼んだ!!」

（アイアイ!!）

虚が今度は尻尾でなぎ払ってきた為、それをガードレールを伝って、道路標識の上に飛び乗ることで回避。

さっきからわざと細い路地などに入り込んで、少しでも虚との距離を開こうと努めてるけど……。

臭いかなんかで探ってるのかねえ?ある程度離れてもすぐに追いついてくるのよね。

（マスター見つけたぞ!先の曲がり角を右!そこから二つ目の角を左!）

「りょーかい!!流石あたしの^{オーナー}管理者!!」

指示どおりに右左と曲がつていくと、確かにあった。

ブロック塀かた敷地の中心に降り立ち、虚を真正面から睨んで、詠唱を始める。

「揺らめく焰、猛追!!『ファイヤーボール』!!」

いくつかの火の玉が虚に向かっていく。

獲物が反撃してくるなんて思ってもいなかったんだろーね。

モロに喰らってるし……はっ!ざまあwww。

さ、これだけじゃまだ足りないねえ？

うちのはやてにさんざん怖い思いさせた拳句、あたしにあの子が不安がるようなことをさせたんだ……。

反撃はまだ……終わらないよお！！！！

「聖なる槍よ、敵を貫け『ホーリーランス』！！」

虚の足元から光の短槍が現れて、容赦無しに突き刺さる。

「まだまだあ！！正義の意志、雷撃の剣となり咎ある者に降り落ちる！『サンダーブレード』！！」

稲妻を帯びた剣が、虚に突き刺さった。

「……んー、まだ三回しかやってないけど、これ以上は流石にまずいかな？」

「つてか、弱いなこの虚！！」

「こんなんなら、問答無用で最初から魔術使ったほうが良かった気が……」

（まあ、この世界では魔法も認知されていないし、何より妹への説明という面倒な課題が出来るだけだ、俺はこれでいいと思うが？）

「んー……まあそういう考え方もあるわね」

虚に背を向けて、暗羅と会話するあたし。

「……はたから見たら、危ない子ね；」

「ヴ……ヴヴヴ……」

「……ん？」

振り返ると虚が立ち上がってあたしに腕を振り下ろそうとしてた。

・・・・・・・・・・は!?

「やばっ・・・・・・・・!!」

詠唱も防御も間に合わない・・・・・・・・!!

こりゃ・・・・・・・・流石に詰んだかなあ・・・・?

「月牙・・・・・・・・」

・・・・・・・・ん?

「天衝っ!!!!」

ズドオオオオオッ!!

・・・・・・・・目の前に降り立ったのは、背中に『五』と書かれた
白い羽織と、オレンジ色の頭。

嗚呼、前世のお父さんお母さん。

「大丈夫か? 怪我、ないか?」

どうやら私、とんでもないところに転生したようです。

第三話まさかの・・・（後書き）

はい、という訳でBLEACHの皆さんの登場でした。

・・・うん、ぶっちゃけ、夜一さんの口調が分からなかったのはここだけの話（

あと二話ぐらい、飛鳥の話が続いてから、後の二人のストーリーに入りたいと思います。

感想、アドバイス、いつでもお待ちしておりますので、これからも読んでいただけると嬉しいです！

それではこの辺で^^

第四話死神さんとミスと（前書き）

展開をつめこみすぎた感たっぷりです；
とりあえず、どうぞ！！

第四話死神さんとミスと

side???

「せんせー、ありがとうございました!」

「おう!お大事にな!」

医院の前で午前最後の患者を見送って、中に戻る。
受付では妻が書類をまとめていた。

「お見送りは終わった?」

「ああ、さ、飯くって午後だ!」

「うん」

ふつと笑いあってから、奥にある居住スペースに行きかけた時だった。

「・・・・・・・・!」

「あ・・・・・・・・」

やれやれ、昼飯はあとになりそうだな。

「悪い、いつてくるよ織姫」

「わかった、お昼用意しておくね?」

また「ああ」と短く返してから、懷から取り出した板を胸に押し当てた。

そうだ、俺の素性まだ言ってなかったな?

黒崎一護、クロサキ医院院長兼護廷十三隊五番隊長だ。

医院を飛び出して、屋根伝いに虚が出た場所へと急ぐ。

霊圧自体は弱いから大したことないんだろうけど、その近くに一般人がいる。

霊力も普通と比べて高いし、何より虚の突進やらなんやらを意図的に避けてるところから、見えているんだろう。

手遅れになる前にいかなーとな、結構おいつめられてるようだし。

．．．．．ん？追われてる奴が急に角を曲がった？どうして？虚の霊圧もそれを追って曲がる。

丁度虚と追われてる奴がいると思われる空き地が見えてきたが．．

．．もろ袋小路じゃねえか！大丈夫か？

あ？そっういや空が曇ってんな？今日は快晴だって予報で．．．．．。

ゴロゴロ．．．．．ズドオオオオオツ！！！！

っ！？何だ！？今雷が剣の形になって、虚に落ちたぞ！！？

空き地の上空に立って見下ろしてみたが．．．．．まだ子供じやねえか！！それに何でこんな真昼間に．．．．．今日は平日のはずだぞ？

．．．．．ってやべえ！！あの虚まだ動けるのか！！

俺は背中に納めていた『相棒』を抜き放ち、大きく振り上げて、

「月牙・・・・・・・・」

斬撃を撃った。

「天衝っ！！！」

同時にあの子をかばうように前に立って、警戒する。

さつき落ちた剣型の雷もすげーけど、それを受けてまだ動ける虚もとんでもねえ。

土煙が晴れると、何も居なくなっていた。

周辺の霊圧を探ってみたが、あの虚のものは感じられない。どうやら終わったようだな。

「大丈夫か？怪我、ないか？」

子供一（多分女の子だろう）に視線を合わせて、声を掛ける。

一方の子供はぽかんとこっちを見たまま、顔を引きつらせていた。

見たところ結構驚いてるみたいだし・・・・・・・・月牙はちよつとやりすぎだったかな？

の間に夜一さんとフラグ立てたっけ!?

「そうじゃ、お前さん妹を逃がしたじゃろ?」

妹・・・・・・・・・・って!

「はやて!!」

「うむ、人違いではないでしょうじゃな、では・・・・・・・・」

言うなり夜一さんに頭を叩かれた、それもげんこつで思いつきり。
流石格闘の達人! 半端無い威力だわwそこに痺れる憧れるう!!
・・・・・・・・・・いかん、ちつと壊れてもうた。

「えと・・・・・・・・何故にげんこつ?」

「阿呆、坂を使って逃がす判断は誉めるが、当の妹はむしろ泣いて
おったぞ」

「・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

うーむ・・・・・・・・やっぱあたしも一緒に逃げたほうがよかった?
でも虚振^{あいつ}り切るには、あれしか無かったし、つか、そこまです考え
る暇がなかったし。

・・・・・・・・・・いかん、言い訳だな。

「今、わしの知り合いのところにおるから、謝っておくんじゃぞ?」

「はい・・・・・・・・」

「うし、じゃあ一件落着だな!」

あたしのことを気遣ってくれたのか、一死神(黒崎)さんが手を叩
いてまとめた。

「そうじゃな、この子はわしに任せて、お前は早く病院に戻れ、まだ勤務中じゃろ？」

「ああ、分かったよ………っと、おい」

戻ろうとした死神^{黒崎}さんが、あたしを見る。

「まだ名乗ってなかったな？黒崎一護だ、普段は町医者やってる、機会があればまた会えるといいな」

「あ、はい、どうも……一条飛鳥です」

あたしはそう返して、差し出された手を握った。

「おねーちゃん!!」

「ぐほっ!？」

夜一さんにつれてこられた浦原商店。

引き戸を開ける、と同時にはやてが飛びついてきた。

・・・って、あちゃー；やっぱ泣いてたか；
慰めようにも原因作つたの自分だし・・・。。
どーしょ；

「いやー、お姉サン無事でよかったすね」

奥の方からそんな呑気な声がしたんで顔を上げると、前世で見覚えのある人がそこにいた。

「どうも飛鳥サン、お話は妹さんから伺ってます、アタシはこの商店の店長やってます、浦原喜助です」

「ご丁寧にどうも・・・一条飛鳥です」

はやての頭をなでつつ、本日二度目の握手を交わす。

「ところで飛鳥サン、あなたがさっき発動させた術・・・・・・・・あれはなんですか？」

・・・・・・・・・・ヲイコラ。
それをここで言うなよ（怒）

「ふえ？じゅつ？おねえちゃんが？」

あああああほらあ！はやてが食いついたあ！
とりあえず。

「せつかく巻き込まないようにって黙ってたのに、何あつさりばらしてくれやがったんですかこのヤロー」
「え？あ？そうなんですか？」

まあ、数日前に浦原商店の皆さんとの顔合わせと、はやてに魔法ばれるっていうイベントがあつて、大変だったわ。

それでも、色々ありはしたけど一応はやても浦原さん達も理解してくれたし、結果オーライなのかな？

ちなみに今は高台で訓練中、さらに補足すると原作でなのはがよく訓練してたあの場所だったりするw

「・・・・・・武装・・・・・・!!」

左肩に引き寄せた右腕を横に振った。

同時に、T O Vの主人公の服を長袖にした全体的に黒い服に皮のブーツ、左手には鞘に収めた刀を、正確にはそれにくくられた紐を握っている。

「……前にもいったけど、テイルズいいじゃないテイルズ、術技とか秘奥義とかかっこいいじゃない！」

（今日は何をするんだ？）

「まあ、武器までだしちゃったけど、ね、転移系でも練習しようかなーって」

(ほう……)

「とりあえず、ここから……」

足で地面に印をつけて、ある程度歩く。

「ここまで！いきなり長距離は危ないだろうーしね」

(ふうむ、まあ正論ではあるな)

「つーわけで座標とかのサポート頼んだ！」

（承知！）

暗羅のサポートを受けつつ、二箇所の座標を割り出していく。

「……固定……轉移！」

(っ！？おいマスター！！座標が一桁違う！！！)

「……はあっ！？ちよ、ストップ」

（もう間に合わん！！）

「ええええええええええええ！？」

……何でも頻繁にイベントがおこるかなあ？

第四話死神さんとミスと（後書き）

一応BLEACHは、藍染の反乱から数年後という設定。
だから一護はお医者さんやってるんです（）

さて、次回は飛鳥のプロローグ的なものの最終回。

そして加わる新たな仲間！？

それではこの辺で^^ノシ

第五話狩人の世界で（前書き）

いつのまにか2万ヒットしてて、腰抜かしたしたさばくです。

こんな駄文を読んでもくれる人がいるなんて……！書いてる本人がびつくりです。

読んでくれている方々に感謝感謝！！

さ、今回は予告通り飛鳥のプロローグ最終回！だがいつも以上に長い上にグダグダだ！！

それでもよければ見てやってください^^；

第五話狩人の世界で

「っだあ!!」

ちよいと高いところから落ちたみたいで、冗談抜きで痛い；
つか、ここどこだ？

（少なくとも異世界であることに違いないな、幸い地球の座標はあるが……どうする？）

「ん……すぐに帰れなくもないのよね？じゃ、ちよつと見て回ろうか？何かすぐ帰るってのもつまんないし」

（それでいいのかマスターよ……）

暗羅の突っ込みは軽く無視して、足を動かす。

見たところ雪とかちよこ残ってるから北の辺にある森の中……
・みたいだけど、人里が離れてるってワケでもなさそうだし。

てか、こっから見えるしww

歩いていけないわけでもなさそうだし、まずはあっこに行くか。

（っ!!マスター!!）

「!!……っと!!」

暗羅のお陰で気付けたわ……後ろからなんか来たし；

とりあえず容赦無しに一閃。

ちようど頭に当たったみたいで、ふと見たら、上あごから上を斬り落とされていた。

……って

「これってギアノス？じゃあ、ここはモンハンの世界？」

（そういうことになるだろうな、それよりもだマスター、周り・・・）

「あーもうわーってるわーってる！・・・さーて、いっちょ行き
ますか！！」

いつの間にか周囲を囲まれていた。

「・・・おい、頼むからその狩る者の目はやめてちょ
ーよ。」

地味に怖いんですけど。

内の一匹が飛び掛ってきたので、今度は首から上を斬る。

二匹も仲間を殺られたのが腹立たしいのか、それとも獲物風情が抵抗するなどとも言いたいのか。

どっちにしろ、やつ等が一斉に来たと言う事実は変わらない。

「丁度いいや、一匹ずつじゃ詰まんなかったしね！・・・CO
ME ON!!」

来る奴等を、両断し、刺し殺し、腸をぶちまけさせ、頭ごと脳髓を
さばく。

おおかた片付いたころには、何体か逃げて、終わっていた。

「あちゃー、ちと派手にやりすぎた？」

（ああ、正直ここまで容赦ない十歳児はいない）

「ですよね」

幸い返り血はそんなに浴びてないし、手と刀に付いた血はその辺の
小川とかで流せばいいしね。

さ、早く人里に

「披験体が逃げたぞ！！」

「あつちだ！追えー！」

・・・・・・・・・・。

「ねえ暗羅」

（何だ主）

「あたし何か憑いてるのかなあ？一度お寺で見てもらったほうが……」

（安心しろ、すべて作者の所為だ）

「うん、とりあえずメタ発言は自重しよ？」

まあこんな山奥でしかも披験体言ってるあたり、絶対黒だな。

「例え白だったとしても見る価値はありそうよね？」

（だな、何にしろ何があったのかの確認はしたほうがいいだろう）
「うし、じゃーしゅっぱーっ！」

先日『見て』覚えた瞬歩をつかつて、声の方に行ってみる。

「しっかし……木い多いな？ここ」

（山だから当たり前だ）

「むー……まあそうだろうけど、枝とか枝とか枝とか、鬱陶しい」

（つまり枝が邪魔だと）

「そう！」

そんな阿呆な会話をしたら、声の元についてた。

どうもここは湖の近らしい、少し離れた場所に水面が見える。

うーん、このままだと見つきりそうだし……お、あの木、葉っぱとかいい感じに茂ってるし、隠れやすそう。

文字通り木の上に飛び乗って、有様を傍観、事と次第によっちゃ乱入ってことで。

湖の岸（つーよりは崖？土地と水面の境目が不自然だし）の方に、追い詰めたおっさん達（九分九厘で魔導師と思われる）と追い詰められた『披験体達』がいた。

「リオレイア亜種にリオレウス希少種、ナルガクルガにティガレックスか……まだ子供とは言え、火力は一人前ってところかな？」

炎や轟音、動きで必死に抵抗する披験体達を見て、分析。

「……あちゃー、やっぱり成熟してないのが仇になったか……みんなバインドで固定されちゃった。」

「つくそが！！披験体風情が調子に乗りやがって！」

「全くだ、モンスターの分際で絶対正義の管理局に抗おうなどと、虫唾が走るわ！」

「披験体は披験体らしく！黙って我々に尽力すればいいものを……」

「……こいつら今なんつった？」

「それもこれも、この……なんだっけ？ナルガクルガ？……ああもう！とにかくだ！！こいつの親が施設で暴れるからこんなことに……」

「……フザケンナ。」

F r e e s i d e

管理局の魔導師の一人が、黒い、哺乳類の一種を思わせる龍を何度も何度も蹴り飛ばす。
何度も何度も愚かしく。
それが己の命を散らすことの原因になることなど考えもせずに。

「・・・・・・・・・・あ?」

最後の仕上げと、思い切り振った片足の感覚が無くなった。

W h y ?

頭に浮かんだ疑問を解消する為に下半身に目をやる。

上半身と繋がっているはずの片足は、立派な切り株となっていた。

a n s w e r !

「あああああああああつ!!?」

「何だ!??」

「いつの間に!??」

魔導師達は大混乱に陥った。

片足の切り株から大量の血を流しながら、魔導師はあえぐ。ふと別の場所に視線が移った。

その先で自分の片足が見つかった。

魔導師は絶望と恐怖でさらに喘ぎだす。

「畜生！！」

「てめえやりやがったな！！」

片足を切り株にする、なんて所業が出来る可能性があるのは、一番近くにいたもの。

故に仲間達は一斉に、さきほどまで蹴られていた龍を攻撃しようとした。

すると目の前に子供が現れる。

見た目十一、二歳の、女の子だ。

その手に持っている血のついた刀を見て理解した。

足を斬ったのはこいつだ。

「・・・・・・・・オーバー・・・・・・・・」

空気の流れが止まる。

だが魔導師達はお構いなく個々のデバイスを構え攻撃を当て

「リミッツ！！」

られなかった。

突然女の子から吹き出た衝撃波に全員吹き飛ばされた。強く地面に叩きつけられ、さらに混乱は激しくなる。

「・・・・・・・・一撃・・・・・・・・!!」

女の子はお構い無しに、拳を振り上げ地面に叩きつける。
さきほどとは比べ物にならない衝撃波が全員を襲い、再び宙を舞う。

「一殺!!」

一人は胴体を斬られ。

「二殺!!」

一人は首と胴体を強制的にさようなら。

「三殺!!」

一人は頭から股までを両断。

「四殺!!」

一人は四肢、首、胴体という三つのパーツに別けられた。

「五殺!!」

最後の仕上げに、片足を切り株にされた奴の喉を貫き、切り裂いた。

side 飛鳥

刀に付いた血を振り払って、鞘に収めたけど………んー、
やっぱ殺りすぎた？

ああ違う違う、こんなクズ共より披験体扱いされてた子達だ。

………あちゃー、やっぱりやばいなあ；

そろいにそろって死に掛けてる。

治癒術も間に合わな………あ。

「『あれ』なら大丈夫かな？」

えーっと、

「あーんらー契約つてどーするっけ？」

（契約………ってまさかマスターこいつら全員とするきじや）

「あたりまえじゃん」

（………マスターどうやら俺は時々あんたが分からなくなるようだ）

「誉め言葉として受け取っとくよーw？」

（勝手にしろ………手をかざしてくれ）

「あいあいww」

暗羅の指示通り手をかざした。

少女契約中・・・・・・・・。

「うし、かんりよーww」

今あたしの目の前に、子供が四人、気持ちよさそうに寝そべってる。さつきまで死に掛けてたんだ、叩き起こすのも何かな。

・・・・・・・・ああ、そういや、あのクズどもが言ってたっけ？
「ナルガクルガの親が施設を襲撃した」って。

見に行く価値・・・・・・・・ありすぎるよなあ；？

子供に結界はって、あたりを見渡すけど・・・・・・・・やっぱり木々が邪魔して鬱陶しいので、空へ飛びます飛びます。

あー、煙はっけーん！ちよっと細くなってるけど、狼煙にしちゃ太いし、ビンゴでしょ。

っーわけで・・・・・・・・。

「暗羅！飛行魔法フルバースト！」

（はあ・・・・・・・・あいさ！）

風を切って煙の出所に急ぐ。

しばらくいくと・・・・・・・・あったあった！！

入口とかが派手に壊された施設が、森の中にぽつんとあった！

んで、その入口に黒い生き物が結構な傷を負って倒れているし、ジヤックポット!!

そいつのところに降りて、怪我の具合を調べる為に近づいたら。

「っ ツ!!」

危ねえーっ!!?急にシツポビターンはないでしょナルガっち!!え、何?敵と見てるの!?そりゃそーかあ、今まで魔導師と戦ってたんだもんねーそりゃ近づいてくる人間敵だと認識するもんねー。じゃなくて!!

ちよ、これ真面目な話!!どう敵じゃないことを証明するよ!?相手はモンスターだから人の言葉が通じるわけないし。

「えと、えと!?ボールハトモダチコワクナイ!!」

つて!!ヲイあたしいいい!!ボールって何なんだボールって!!

(.....敵ではないのですか?)

「いえーすーあーいあーむ!!」

.....ん?ちよつと待て、こいつ。

「しゃべれんの?」

(ええ、生まれた時から何故か)

声は平然としてっけど、やっぱりつらいんだろうな、視線が定まっ
てないし。

「大丈夫?」

(.....正直、もう長くは無いでしょうね)

「・・・・・・・・そっすか」

黙ってる理由もないので、さっきの出来事を話す。

やっぱり驚いてたよ、そうだよなー自分の子供が『この世界』じゃ得体の知れないものになったんだから。

それと、ナルガクルガさんにも色々聞いた。

何でも自分が人間と意思疎通が出来る所為で、息子さんを連れて行かれたんだそうだ。

まあそうだよな、十分に抵抗力を持っている大人より、まだ未熟な子供を狙うのは自然なことだ。

(・・・・・・・・お願いがあります・・・・・・・・聞いていただけますか?)

「んーあたしの出来る範囲でなら、何でもやるけど?」

(あなた方人間は、狩りで倒した我々の体の一部を使って、武器を作ると聞きます・・・・・・・・先ほど申し上げたように、私も長くありません・・・・・・・・ですがあの子を置いては逝けないならばせめて・・・・・・・・)

「わーってるわーってる!そのお願い、叶えちゃうよ?幸いあんたらナルガクルガからはかなり上質の武器が出来る・・・・・・・・大丈夫、息子さんにちゃんと持たせるよ」

ナルガクルガは弱弱しく、くーうんと喉を鳴らした。

多分お礼を言っているんだろう、ゆつくり体を傾けて、そのまま動かなくなった。

あの後、起きた使い魔たちに事情と状況を説明した。

ナルガクルガの子はやっぱりショックだったみたいで、大泣きしてたなあ……。

つか今冷静に考えたら、この子らの住居とかの問題があるな。

……ん？あたしんち？残念ながら部屋が足りないわ。いや、ないこともないけど、今こいつらをいれちゃうと守護騎士の分の部屋が無くなっちゃう。

……まあ、それは後々でも考えられるか、まずはあの村で腹ごしらえね。

第五話狩人の世界で（後書き）

はい！長い！！

もうちょつと要点をまとめようぜ自分orz

さて、ここで飛鳥の設定をだそうかと思います。

ちなみに五話時点でのものw

ではどうぞ！

一条飛鳥（10・女）

身長：女の子にしては高いほう、下手したら小6でも通じるかも。

体重：秘密

管理者：オーナー暗羅

能力：ライフフアリ記憶図書館、???、???、???

詳細：ライフフアリ記憶図書館の管製人格により故意に死亡させられた転生者の一人。

常に飄々とした態度でニコニコと笑い、時たま周囲を驚かせる策で逆境を覆すある意味アイデアマン。

転生先での両親は幼少の頃に亡くなり、親戚である八神夫婦の養女となったが、その二人もはやて誕生後に死亡。

以来二人きりで過ごすことになり、その所為か少々シスコンに目覚めている。

主にテイルズ系の術技を、好んで使い、その中で特にヴェスペリア辺りを気に入っている。

ライフフアリ記憶図書館の機能を使い武装する、格好は前述のヴェスペリアの主人公の服を長袖にしたようなもの。

実はS、怒るとさらに酷くなる。

使い魔が四人、現在別居中。

こんな感じです。

次回からはお待ちかね（？）
『後の二人』の内一人が登場です！
それではこの辺で^^ノシ

第六話目覚め（前書き）

さて、今回は予告どおり後の二人のうち一人が出てきます。
追記：タイトル入れ忘れてました：すみません；

第六話目覚め

なんだか体が重い……………。

木の葉が……………かすれる音?……………森の中?

私……………何してたんだっけ?何でここに
いるんだっけ?

いつもどおりバイトして……………今日は早く上が
つていいよって店長さんに言われて……………喫茶店でご飯を
食べて……………。

それで……………それで……………っ!

!!?

「……………っ!?あづう……………!!」

side???

え……………なんで?ここ何処?

私、さっきまで喫茶店にいて……………トラックにはねられたは
ずなのに。

確かに死んだと思ったのに、片腕と足首と脇腹に怪我をしているく

らいだし、場所もあの喫茶店じゃなくて森の中……。
何が起こったの？

（やっとお目覚めですか、主）

「ふえっ!？」

どういうこと!？頭の中で声が……!!

（どう落ち着いてください主、私は藍桜、あなたの能力記憶図書館
オーナーの管理者を勤めさせていただく者です）

「え、あ、はい!!よろしくお願いします!!」

思わず敬語になっちゃったけど一応味方みたいだし、多分私の部下・
……てことに多分なるんだろうし、要らなかつたかな？

「えと、藍桜……でいいのかな？今私はどういう状況なの？な
んでここに？」

（ええその呼び方で構いません、ついでに敬語も不要です、あと
いっぺんに質問なされないよう）

「あ、ごめんね？」

（まあ、どうせお伝えしなければなりませんので……よく聞い
て下さい）

あの後藍桜から聞いたことを纏めると。

・私は記憶図書館という能力の適合者に選ばれた。
ライブラリ

・記憶図書館の能力は、アニメ・ゲームの術技を使用可能にするこ
と、他にあと二つ能力がある、現在二つとも使用可能。

・この『魔法少女リリカルなのは』の世界で起きる悲劇と、歴史の
改変を止めなければならない。

・適合者は後二人いる、なお内の一人はすでに転生済み。

・現在原作の4年前。
と言う感じ。

（ちなみですが、主と他一名が中々起きないのと、原作まで時間が無いというのが重なったので、管製人格が強制的にここに転送しました、体の傷は．．．．．多分すっかり消し損ねたんでしよう）

「え」

（ですがかえって好都合だと思いませんか？これを理由に記憶喪失．．．．とか言えば．．．．）

確かに．．．．嘘をつくのはちょっと気が引けるけど、まさか『転生してきました』、なんて言えるわけないし．．．．。とりあえず、

「まず人里に出たほうがいいのかな？あわよくば住むところも見つかるかもしれないし．．．．」

（そうしたほうがいいでしょうね、丁度まっすぐ行った所に街があります．．．．．ちなみに原作の舞台です）

「へ．．．．へえ？」

そういえば私、原作知らないけど．．．．大丈夫かなあ？

（そうそう．．．．主、名前はどうします？）

「え、名前なら前のを使えば．．．．あれ？」

前の名前を言おうとして口を動かしたけど、何故か口が文字通り固まった。

何度も何度も名前を言おうとするけど、やっぱり駄目だ。

「どうなっているの……?」

（おそらく転生の影響でしょう、前世の記憶は持っているようですが、名前などは口には出来なくなっているようです）

そんなあ………じゃあ、

「あなづか亜桜桃香かって言うのはどうかな？今からの私の名前」

（ええ、いい名前ですよ）

「よし、じゃあ………っ!？」

っ………痛あゝ………!!

「怪我しているの忘れてた………」

（はあ………まあ、幸い記憶図書館に治療術も入っていますし、応急処置あたりやったほうがいいのでは？）

「そうだね、えっと………聖なる活力、ここへ………『ファーストエイド』」

私の体に魔方陣が出て、光が周りを回って私の中に入る。

一瞬体が輝いたと思ったら、血が止まっていた。

よし、それじゃあ………。

「そこにいるのは誰だ？」

side???

やっと空いた時間を使って山での走り込みをしていた時、草むらの向こうから人の声が聞こえた。

俺は一気にそれがおかしいことに気がつく。

ここは普通の人が入ってこないような深い場所だ、こう言うのも何だが、俺や父さん、上の妹以外がこれるわけが無い。だから、草むらに近づいて声を上げた。

「そこにいるのは誰だ？」

草をかき分け奥に行くと、うちの末っ子よりいくらか年上らしい女の子がいた。

怪我をしているのか、服の所々が赤くなっている。

「君、名前は？何でこんなところに？」

質問をぶつけるが、女の子はおどするだけだ。

「……少し攻撃的すぎたか？」

「あの……名前は亜桜桃香……です、何でここにいますか……分かりません」

「……何だって？」

あんな態度で質問されたのに、きちんと答えてくれたことに感謝したが、彼女の二言目でまた疑問が生まれる。

「分からないって……本当なのか？」

「は、はい、名前以外何も覚えてなくて……気がついたらここに倒れてました……」

これは……悪いことを聞いたかも知れないな。

「えと・・・・・・・・ここは何処ですか？あなたの名前は・・・・・・・・？」

おどおどしながら、女の子が俺に質問をぶつけてきた。

「俺は高町恭也、ここは海鳴市にある山の中だ」

あっちも答えたんだ、こちらもきちんと言えなきゃな。

「海鳴市・・・・・・・・ですか」

「ああ、桃香・・・・・・・・だったか？よければうちに来るか？」

こんな山奥で倒れていた拳句記憶喪失ときた、今は忙しいかも知れないが、一晩くらいなら泊められるだろう。

何にしるこんな所に子供を一人に出来ない。

「えっと・・・・・・・・じゃあ、お世話になります」

桃香は遠慮がちにお辞儀をした。

side 桃香

さてと、さつき会った恭也さんに、家に案内してもらったのはいいけど……。

何だか慌しいみたい、どうも末の娘さんが帰ってきていないらしい。日はほとんど落ちているし、一応まだ明るいけど、家族として心配するのは当たり前だと思う。

もちろん私も探すことにした。

これからお世話になるって言うのもあるけど、私自身がこういうことを放っておけないこともある。

という訳で、今その末っ子さんがよく遊ぶっていう臨海公園を探しているけど……。

「広いなあ……」

そう、かなり広いんです。

あまり動くと怪我に響くし、けど末っ子さん……たしかなのはちゃんだったっけ？その子も心配だし……困ったなあ；

（主、前）

「へ？……あ!」

いた！目の前のベンチにいた！栗色のツインテールに緑のリボン……間違いない！

「なのはちゃん？」

目線を合わせながら声を掛けると、びくつと肩を震わせてこっちに反応した。

今まで泣いていたのかな？ほっぺたが濡れてるし、目も真っ赤だ。

「……………だあれ？」

「あ、ごめんね、私は亜桜桃香って言うの、お母さん達に頼まれて、あなたを探してたんだよ」

「とうか……………さん？」

「うん」

するとなのはちゃんは濡れたほっぺたと目じりを拭くと、にこっと笑う。

でも、無茶してるのがバレバレだよ。

「何でここにいたの？もう暗くなっちゃったよ？」

なのはちゃんの手をそつと握って、返事を待つ。

「……………あのね、おとーさんがおしごとしてたときに、けがしちゃったの」

「……………うん」

「それでね、おうちのみんなががいそがしくなって……………おかーさんははじめたみどりやでおしごととして、おにーちゃんとおねーちゃんはがっこうとおかーさんのおてつだいとしゅぎょうでね……………」

「……………」

「……………うん」

「でもね、わがままいったらみんながこまるから、わたしがまんしているの、きょうもね、じゃまにならないようにずっとここにいたの……………えらい？」

「……………そうだね」

気付いたら、なのはちゃんを抱きしめていた。

こんなちっちゃい子がこんなことを思わなきゃいけないの？恭也さん達の心情も分からなくはないけど、こんなのって……！！
……でも、今の私に出来ることは少なすぎる。
だからなのはちゃんから離れて、

「ごめんね……お母さん達が心配してるよ？帰ろう？」
「……うん！！」

偽った笑顔で返事したのはちゃんの手を握って、高町家へ向かう。
……このくらいの子は、我がまま言ってなんぼだ。
私がなんとかしなきゃ……！！

side 桃子

恭也が連れてきた桃香という子がなのはを見つけてくれた。
一通りなのはを叱ってから、しっかりと抱きしめる。

最近かまってやれないから……今入院しているあの人の為にも、この子達の為にも、私がしっかりしないと……。

「桃香ちゃんありがとう、娘がお世話になったわ」

「いえ、そんな……！」

お礼を言つと、慌てた様子で謙遜する。

「……聞いた話では記憶喪失らしいし、それだと、行くところも無いでしょうに……。」
よおし！

「桃香ちゃん、話は恭也から聞いたわ……好きなだけいていいわよ」

「……え？ええ！？いいんですかそんなあつさり！！？」

「いいのよ！どうせ行く所ないでしょう？それに怪我した恩人を放つておく訳にはいかないわ」

「え、あの……ありがとうございます！」

ふふつ……お礼は言ったもののやっぱり驚いてるわね。

「さ、こっちにいらつしゃい、怪我に包帯巻かなきゃ」

「あ、はい！」

視線で娘の美由紀になのはをここから連れ出すよう合図する。

血はほとんど止まっているけど、わりと酷いのに変わりはないし。

というかこの子、怪我したままなのは探し出してくれたの？しかもあんなに広い臨海公園から……。

「まったく……無茶するわね……」

「へっ？」

「ん？・・・ああ、いいえ、こつちの話よ」
「は、はあ？」

side 桃香

私の服をはだけさせた桃子さんは、傷口に消毒液を吹き付けて、包帯を巻いていく。

消毒液が沁みたけど・・・桃子さん、手際いいなあ。

「息子に夫、さらに娘がよく怪我するもんだから・・・おかげで応急処置はばっちりよ」

「え、なんで・・・！？」

「口に出ていたわよ？」

「あうう・・・」

なんか・・・恥ずかしいなあ。

「・・・っと、よし！これでいいわ、しばらく激しい運動は控えるように」

「はい、ありがとうございます」

すると、治療が終わるのを待つてくれたのかな？なのはちゃんが部屋に入ってきた。

心配そうに私を見ている。

とことこと歩いてきて、申し訳なさそうに目を伏せると、

「ごめんなさい．．．．．けがしてたのに．．．．．わたしをさがしてくれて．．．．．ありがとう」

「いいよ、みんな心配してたんだから、私はそのお手伝いをしただけ．．．．．無事でよかった」

しゃがんでからなのはちゃんの頭を撫でたら、気持ちよさそうに目を閉じた。

何だか．．．．．可愛いなあ．．．．．うん、癒されるよ。

「とりあえず、今日は居間で寝てもらえるかしら？部屋はあるにはあるけど、ちよっと散らかっているから．．．．．」

「わかりました」

指示された場所にいくと、もう布団がしいてあった。

得体の知れない私をおいてくれるといった上に、お布団まで．．．．．
．．．。

思わず布団にむけて一礼です。

ちなみに今着ているのは美由紀さんから借りたパジャマ．．．．．
の上着。

．．．．．特定の人たちが見たら暴走しそうだなあ。
なんて、ちよっとアホなことを考えながら目を閉じた。

第六話目覚め（後書き）

はい、という訳で桃桜様より設定を提供してもらったキャラ、桃香の登場でした！

そして美由紀さん台詞なくてごめんなさい；

次回、桃香の能力（の一部）が明らかに・・・！？

それではこの辺でww^^ノシ

第七話少しの恐れと湧き上がった黒いモノ（前書き）

ヒット記念の小説を書くべきか、本編を進めるべきか考えているさばくです。

今回は桃香の力（の一部）が登場！
それではどうぞ。

第七話少しの恐れと湧き上がった黒いモノ

「むう……………うん？」

何だか眩しいのと圧迫感を感じたのとで目が覚めました。

……………はい？圧迫感？

体を起こそうとしたけど起きられなくて。

ほら、朝って起きたばかりだから頭がまだ十分に動いていないわけじゃないですか。

だから、ちよつと混乱しちゃって……………。

首だけは動いたから、乗ってるものを確認したら、

「……………なのはちゃん？」

すごく気持ちよさそうに寝てて……………どうも起こす気になれないなあ；

というか、何で乗ってるのなのはちゃん？

「桃香ちゃん起きてる？」

ああ、桃子さん！

「起きてますけど……………その……………助けてください」

「ん？……………あ……………」

苦笑いしないで助けてください桃子さん；

「にしても、さっきは災難だったわね？」
「もう！いつまでひっぱるんですか！」

あれから何日かたって、こっちの生活にもだいぶなれてきました。
現在桃子さんと朝ごはんの片づけ中ですが・・・。

さつきから寝起きのことについてからかわれっ放しorz
ストレス溜まっているのかなあ桃子さん。

ちなみになのはちゃんに乗っていた理由なんだけど、本人曰く「なんとなく！」だって。

・・・うーん；上に乗られるのは困るけど、あんな純粹な目で見られたらどうも注意する気が失せるなあ；

とりあえず、食器を片付けながらこれからのことを考える。

現時点でやらなきゃいけないのは、

・すでに来ている一人を探し出して協力要請をすること。

・原作の介入をどうするか考えること。

・改変や悲劇を防ぐためにも、町の地理を把握すること。

まだまだあるけど、一番優先しなきゃいけないのはこの三つだね。

で、今すぐに出来ることは三番目の地理の把握なわけで・・・。

幸い今日は休日、なのはちゃんも幼稚園は休みだから、一緒に遊ぶ

がてらで出来ると思うから一応解決かな？

「・・・・・・・・・・か・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

ここに来ている人とこれからくる人は・・・・・・・・・・味方になってくれるといいな。

「・・・・・・・・・・と・・・・・・・・・・か・・・・・・・・・・ちゃ・・・・・・・・・・」

最終目的は同じなんだから、出来れば争いたくないけど、そうも言
ってられないことが起きるかもしれないし・・・・・・・・・・。
だったら戦わなきゃいけないのかな？・・・・・・・・・・下手したら・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・少し・・・・・・・・・・怖いな。

「とうかちゃん！」

「うえ！？ふぁい！」

sideなのは

「とうかちゃん」

こんにちは！たかまちなのです！

きょうはようちえんもおやすみなので、このあいだおうちにきたとうかちゃんとあそぼうとおもってるの！

だからさつきからなんかいもよんでいるんだけど……。

「……………」

とうかちゃんぜんぜんきいていないの！！

せつかくおもしろいところとか、おしえてあげようとおもってるのに！

もう！これでとうかちゃんがなにもいわなかったらひとりであそびにいくもん！

「とうかちゃん！」

「うえ！？ふあい！」

やっときづいてくれたの！

「もう！しらんぷりしないでよー！」

「え、あ！？ご、ごめんね！？」

あたふたしながらとうかちゃんがあやまってきた。

んー、ほんとうにわるいってかんがえてるみたいだし、

「よし！じゃあなのはとあそぼ！」

「え、でも手伝いが……………」

「大丈夫よ？桃香ちゃんのお陰でほとんど片付いたし、なのはの相手はむしろこっちからお願いしたいくらい」

おかあさんが、とうかちゃんにそういつてわらった。
とうかちゃんはちよっとかんがえてから、

「うん、じゃあ、お外行こうか？」

「わあい！！」

side 桃香

何だかあつさり『地理の把握』を遂行している桃香です；
ちなみに今、なのはちゃんを見つけた臨海公園で、かくれんぼをし
ています。

わたしが探す側になったから、あちこち探し回っているんだけど・
・・・・・。

「やっぱり広い・・・・・そしてなのはちゃんどこ？」

広さとなのはちゃんの隠れ方の上手さに惨敗中ですorz
そりゃそうだね、よくここで遊んでるなのはちゃんと違ってわたしは海鳴市にきたばかりのペーペーだし、経験の差がありすぎる；
でもここはほら、年上のプライドっていうか……まあ、そういうもんがあるわけで！
だから、諦めずに延々と探し回っているけど……あ、何かが折れそう。

「それ！」

「わひゃあっ!？」

え、あ、なにになになにに!？後ろから衝撃があ!？

「もう!とうかちゃんさがすのへた〜!」

「あ、なーんだーもう……なのはちゃんかあ」

……今日はこの子に驚かされっぱなしな気がするなあ……
……。

「えへへ、じゃあつぎはまたとうかちゃんがかくれるばんね!」

「うん、分かった」

でもすぐに見つかるのがオチなんだけどね……。

「じゃあ、かぞえるよ〜?」

「はい」

あんまり離れるとなのはちゃんを一人にさせちゃうし、けどあんまり近すぎると簡単に見つかるし。
つかず離れず、ってこのことを言うのかな?でも難しいねえ；

あ、あのすべり台隠れるのに丁度よさそう。

下の方にもぐりこんで……。あ、これなのはちゃんがよく見えるし、けど向こうからは見えにくそうだし、いざとなったら飛び出しやすそう……。

もしかして当たりくじひいた？

なのはちゃんが数え終わるのを待ちながら、頭の中でトレーニングを始める。

確かマルチタスクだったけ？同時に二つのことを考えるっていう。

何が起こるか分からないし、訓練を怠っちゃだめだもんね。

ちなみに相手は藍桜で武器は槍。

……。え？剣じゃないのかって？あれはちよつと重くて……。それに一回一回振り上げて振り下ろすって言う動作がどうも隙を作っているように思うんだ。

その点槍は引いて突き出すだけ、戦国時代の農民だって戦の時に愛用していたって実話があるぐらいなんだから。

「はーち……。きゅーう……。……。」

……。あれ？なのはちゃんの声が止んだ……。？

嫌な予感がして、はつと顔を上げると。

「つしや、ターゲット確保だ！」

「やったな！早く戻るぞ！」

……。っ！！！？

「藍桜！！」

（補足でしょう？もうやっています！）

「ありがとうございます！」

どういうこと！？何でなのはちゃんが誘拐されなきゃいけないの！？
それにあの人たちの服！『RPGに出てきそうな見たことが無い』
感じのものだった！！

（十中八九魔導師ですね、なのはさんは元々高い魔力の持ち主でしたし・・・）

「そういうのは後で！！今はとにかく追うよ！！」

（承知しました主）

なのはちゃんを抱えた二人組は、空のかなり高いところを飛んでいる。

肉眼じゃ確認しづらいけど、わたしは違うし、何より追っているのは一人だけじゃない。

（・・・・・・！主！二人が高度を下げ始めま・・・・・・続けて転移？まさか・・・・・・この程度で振り切れたとでも？）

「転移先は！？」

（ここから数百メートル先の倉庫が集中しています、そのうちの一つに反応があります）

「分かった！」

進んでいくと、確かに倉庫がたくさん並んでいるのが見えてきた。ここまで近くなればわたしでも魔力を辿っていける。

魔導師達がいる倉庫を見つけると、壁伝いに屋根に上った。

（主、何故屋根に？）

「いきなり突入して玉砕、って笑えないでしょ？ちよっと様子を見る」

（分かりました）

ちょうど天窓があつたので、そこから覗き込んでみた。
覗き込んで、やつらの会話を聞いて、

どす黒い感情が湧き上がった。

F r e e s i d e

魔導師二人は、タバコをふかしながらいやらしい目で、ついさっき
捕まえてきた少女を見ていた。

「しつかし管理^{こうり}外第97号は宝の山かあ？某提督^{ていとく}といい、このガキといい、高魔力の魔導師が二人も出るなんてな」

「ああ、それに……………」

内の一人の目が怪しく光る、それを見たもう一人はげんなりとした表情で呟いた。

「このロリコンが」

「いいだろ、好きなんだから」

「つか、担当の人遅いな？」

「そついえばそうだな……………まあ、こいつをとつと渡したら、俺達は報酬をもらえて、こいつは管理局の『正義』の象徴である人造魔導師研究の礎になれて、幸せ幸せ万々歳！つてな！」

「ぎやははは！全くだ！！」

そついつてにやりと笑った時だ。

上の方から派手に割れる音がして、ガラス片とともに何かが落ちてきた。

それは起きた土煙を『一振り』でかき消し、獲物を構える。

二人は、呆然とした。

目の前に現れたのは、自分達が確保した少女より年上と思われるが、それでもまだ幼い少女だった。

……………姿形だけは、だが。

槍を構えている上、纏っている魔力とオーラが子供のそれではない。何より、大の大人である自分達を怯ませるほどの怒りと殺意を放っていた。

さきほどの音で目を覚ましたのだろうか、確保した幼女が自力で猿轡を解き、叫んだ。

「とうかちゃん！」

少女は幼女に向けて、黙って笑う。

「は、ははっ！ずいぶんと派手な登場だなお嬢ちゃん？けどおじさんたち今仕事なんだよね、いい子だからお家に帰りな」

「そうだったんですか？わたしにはいい年してコスプレしてる痛いおじさん二人がちっちゃい女の子にこれまた痛いことしようとしているように見えたんですが……」

少女は底からの笑顔でそう返し、二人の男は額に青筋を浮かべた。

「自分たちの身の潔白を証明したかったらその子を返してもらえませんか？恩人のお子さんというのもありますが、あなた方のB級映画並にくだらない正義の為に犠牲を出すわけにもいけないので」

少女は笑顔のまま早口ではっきりと言い、男達の青筋がさらに濃くなる。

「ちなみにですが、これより30秒後に返してくれなかったら強制排除いたしますので、決断はお早めに」

突然男達はだまって獲物を構え、魔力弾と斬撃を撃ち出す。

少女は槍を振り斬撃と魔力弾をいなすと歩法を使って接近、大きく薙ぎ払い、男二人を飛ばした。

槍を構えたままいくらか後ろに下がり、幼女の側に駆け寄った。両手足を拘束していた縄を切り、自分の後ろに下がらせる。

「っち！やるなお嬢ちゃん」

「まったくだ、それに魔力は後ろにいる娘以上、今日は大収穫だな」

「それはよかったですね、でも『大収穫』の三文字はわたしを倒してから言ってください」

笑顔を変えないまま、少女は槍の切っ先を男達に向けた。
男のうち一人が剣を構え、少女の後ろ側に回りこむ。

「二方向からの同時攻撃なら、流石によけないよなあ？」

「それにそっちは二人だが、ともに魔法を使えるのはお嬢ちゃん一人だけ、実質2対1ってところだ!!」

少女は急に無表情になりしばらく黙っていたが、また急に笑顔になった。

「ええ確かに『今は』一人ですね」

そう言うと、槍の柄尻で地面を突き、未完成の魔方陣を展開させた。男二人はかまわず剣を振り上げ少女に切りかかるが、見えない壁に邪魔をされ、叶わない。

そうこうしている内に魔方陣は組みあがり、少女は詠唱を始める。

「其は同胞に慈悲深く、仇に容赦なし、来よ、大海に眠りし水統べる姫君『ウンディーネ』」

魔方陣が、清流を思わせる色に輝き、周囲の者の目を眩ませる。

光が収まると、少女と幼女を護るようにして脇にたたずんでいる女性がいた。

さらに、耳の形や肌の色が人間のそれではない。

女性が静かに目を開き、少女に視線を移した。

初めまして桃香、あなたが今後のわたしの主になるのです

ね？

「うん、よろしくねウンディーネ、早速だけど………いくよ」

御意。

女性がそう返して槍に触れると、水となって槍の中に入っていく。槍に、変化が起きた。

柄尻に水晶玉が、刃に凍土が、そして槍全体が蒼天の色に変わる。

「………はあっ！！」

次の瞬間、素早く、大きく弧を描き、二つの地点を絶対零度の一閃が通過した。

二人の男は両足を固定されただけだったが、痛みは足だけでなく全身に走ったため、二人仲良く倒れて夢の中へ入る。

少女は、流石に殺すことをしなかったらしい。

残されたのは、目の前で起こったことに呆然とする少女と、冷たい目で倒れた二人を見つめる少女だけだった。

第七話少しの恐れと湧き上がった黒いモノ（後書き）

さて、今回出た桃香の能力。

名称および詳細は待て次回ということで！！

べつ、別にこの回で書ききれなかったんじゃないんだからねっ！？

こんな小説ですが、見てくださる方の為に頑張ろうと思います。

それではまた次回お会いしましょう！

第八話不安（前書き）

今回ちょっと短いです；

第八話不安

side なのは

・・・・・・・・・・すごい。

すごいすごいすごい！！

とうかちゃんかふしぎなちからをつかって、へんなおじさんたちをやっつけたの！

「お疲れ様、もう戻っていいよ？」

御意、また御用があればなんなりとお申し付け下さい
「ん」

さつきとうかちゃんによばれたおんなのひとが、きえちゃった！
どうなっているの？

「とうかちゃん！いまのふしぎなちからなあに？まほう？」

「んー・・・・・・・・とりあえず説明はあとでね？」

「え、なんで？」

そしたら、パトカーのおとがきこえたの。

side 桃香

遠くの方からサイレンが聞こえてきたんだけど……。。。。
気のせいかこっちに近づいて来ている気が。

（あのパトカーの無線を盗聴しました、どうやら予感的中しているようですね）

うん、報告ありがとう藍桜あー！（泣

「とうかちゃん！いまのふしぎなちからなあに？まほう？」

そうとは知らないのはちゃんは目をキラキラさせて、さっきの出来事についての質問をしてくる。

あうう……。こういうのが一番厄介なんだよね。何の悪気も疑念もなくただ好奇心で聞いてくるっていうの；

「んー……。とりあえず説明はあとでね？」

「え？なんで？」

「警察がきているから、早くここからでないと」

「おまわりさんがくるんでしょ？なんでにげなきゃいけないの？」

「魔法なんて言っても誰も信じないでしょ？ね？だから早く帰る？」

ああああサイレンが近づいてきたあああああ；
なのはちゃん早く決めてええええええええええ；

「うん分かった！帰ろ！」

よし！

「ごめんなさいっ！でも逃げろおーっ！！」

なのはちゃんを抱えて脱出です！

「はあーっ……………はあーっ……………はあーっ……………はあーっ……………」

「とうかちゃん、だいじょうぶ？」

「正直……………もーへとへと……………！」

身体強化してもきついものはきついんだね；

体のあちこちが痛い……。明日は絶対筋肉痛だ、うん。

家を出る時美由紀さんに貸してもらった時計で時間をチェックする。
現在12時前……。そろそろ帰らなきゃだね。

高町家からはそんなに離れてないのが不幸中の幸いかなあ。

「ごめんねとうかちゃん、なのはがぼんやりしてたせいで、あのおじさんたちとたたかうことになっちゃて……」

「いいんだよ、なのはちゃんも無事でよかった……。さ、今度こそ帰ろっか？桃子さんがまつてるよ」

「うん！」

なのはちゃんの手をとって歩き出す。

帰りながら、自分は魔法を使えること、無闇やたらに人に話してはいけないことをなのはちゃんに言い聞かせた。

「ねえねえ！じゃあさつき出てきた人も魔法？」

「さつきの……。ああ、ウンディーネ？」

「うん！」

「そうだよ、でもあの子は人間じゃなくて『精霊』、いつもは見えないけど、ずっと側にいて見守ってくれる存在なんだよ」

そう、それがわたしの能力の一つ『精霊召喚』。

今のところ召喚可能なのは、ウンディーネを含めた4体だけ。

でも『これが有るか無いかで、わたしの戦略の幅は大いに広がる』とは藍桜談。

これから頑張りたいです。

ああ、そろそろ高町家につくね。

「ただいまー！」

「すみません！今帰りました！」

「なのは！桃香ちゃん！」

美由紀さんが血相を変えてわたしたちに駆け寄ってきた。

「………なんだろう、さっきの出来事が脳内で再生されているんだけど。」

「二人とも大丈夫だった？さっきテレビの速報で港の倉庫で謎の光と爆発音がしたって………」

「だ、だいじょうぶだった〜！」

「え、ええ、臨海公園ですつとかくれんぼしてましたから」

それを聞いて、ほっとした顔になる美由紀さん。

「………本当はもう当事者なんだけどね；

「そうなの？」

「うん！とうかちゃんくれるのもさがすのもへたなんだよ！」

「うぐっ……」

魔法のこととか隠さなきゃいけないとはいえそこまではつきり言われると傷つくなあ………。

あれ？目から水が………。

「とにかく二人とも無事でよかった、お昼ごはんできてるよ」

「わーい！」

「ありがとうございます」

とりあえずお腹もすいたし、まずはご飯だね。

お昼を食べ終わった後、縁側でなのはちゃんと和んでいる。

午前中、騒いであの二人に連れ去られるっていう事件があったせいかな？

わたしの膝を枕にして寝ている。

・・・・・・・・・・・・・・・・あ、また戦いが脳内に・・・・・・・・。。

さつきからずっとこう。

あの魔導師二人組みと戦ったときの映像が、繰り返し替えし再生されている。

思えば結構容赦なくやったよねわたし。

・・・・・・・・・・・・・・・・戦うことを怖がってた今朝のわたしはどこにいったのやら。

そういえば、一人がなのはちゃんに近寄ってズボンに手をかけたのを見たときに思ったんだっけ？

『殺してやる』って……………」

前世ではそういうの無かったはずんだけどなあ；

……………」あとの二人に会ったときも、似たようなことがあったら……………」

わたし、自分をコントロールできるのかな？

もし本当に殺しちゃったら……………」どうしよう。

……………」高町家の人たちに嫌われるのは必須だろうな……………」

「桃香ちゃん？」

「あ……………」桃子さん」

「大丈夫？顔色が悪いみたいだけど……………」

あーあ……………」桃子さんに心配させちゃった。
今度から気をつけなきゃ。

「ええ、大丈夫です……………」ごめんなさい、ちょっと考え事して……………」

「……………」ならいいわ……………」となり、いいかしら？」

「はい、どうぞ」

桃子さんが隣に座ったのを確認してから、お茶を飲む。
その後はわりと他愛の無い話をした。

夕方、わたしはあの臨海公園にいる。

槍を実際に構えて振り回して、どうしてもできてしまう隙を埋める
為の、動作確認をしていた。

．．．．．つ。

「あー、もうっ!!」

思わず槍を地面に叩きつける。

また頭の中で、戦いが描かれたからだ。

もう．．．．．いい加減にして!!

第九話 潜入と治療（前書き）

今回ちょっとぐだぐだしています；

第九話潜入と治療

side 桃香

「じゃあ桃香ちゃん、いつてくるね」

「はい、いつてらっしゃい」

どうも、桃香です。

今日は桃子さんが入院している旦那さんのお見舞いに行くということで、留守を任せました。

なのはちゃんも行くということで、家には私一人です。

「……ん、じゃあ藍桜」

（はい、術の訓練……ですね）

「うん」

あれから、槍はちょっとお休みして、魔術に専念している。

自分の頭の中に意識を集中させて、詠唱や魔方陣の展開のシュミレーションを重ねる。

……戦うのが怖いって言うのかな？ なんだか不安要素が多すぎて、藍桜にドクターストップならぬオーナーストップをかけられちゃって……。

それにわたしのもう一つの能力もあるから、慣れておいたほうがいいだろうってことで……。

次々現れるターゲットに、使える術を片っ端から打ち込んでいく。風、水、火、土、光、闇、それぞれの属性を帯びた術が、ターゲットを面白いくらいにつぶしていった。

いつから始めて、いくら時間がたったのか、分からなくなってきた頃に玄関の扉が開いた。

桃子さんが帰ってきたのだろう。

思考をマルチタスクに切り替えて、出迎えにいったけど……。なんかみんな……出かける前より暗くなってる気が。

旦那さんの怪我、そんなに酷いのかな？

「おかえりなさい皆さん」

「ええ……ただいま、お留守番ありがとうね」

「はい」

気になりつつもあえて聞かないのは、わたしなりの気配り。

あまり人に触れてほしくないことがあるのは、わたしも同じだからね。

いくらか桃子さん達と話した後、自分の部屋に戻って考える。

「……やっぱり旦那さんの怪我が原因なのかな？」

（でしょーね、初めてあったときのことでもそうでしたが……）

あれは周りのことを考えすぎて、逆に自分の殻に閉じこもってしま
う、というパターンです」

「……ふう……どうしたもんかなあ」

話しているのは、なのはちゃんのこと。

初めて会ってから、今までずっと、わたしや桃子さん達に我がまま
らしい我がままを言っていない。

本当に……五歳児でこれはちょっと危険だと思う。

「土郎さんの怪我……治せないかな？」

（程度によるでしょうね、何にしろ見てみないことには……）

「んー……そっかあ」

……あ。

「病院に潜入……とかは？いきなり完治したら怪しまれるから、
完治寸前とか容態の改善とか、治療術使ってなんとかならないかな
？」

（潜入って……忍者じゃないんですから……でも、
現時点ではそれが最善でしょうね）

「でしょ？」

（しかし土郎氏の病室は？潜入に成功したとしても場所が分からな
ければ……）

「問題があるとすればそこかあ……んー……」

どうしよう？

（……いつそ病院のシステムにハッキングします？）

「それは最終手段にすることを提案するよ藍桜」

やむを得ない場合もあるんだろうけど、犯罪はよくないしね；
最終手段以外で士郎さんの病室を知る方法は・・・・・・・・。。

「桃子さんに聞くとか」

（目的を聞かれるという面倒が生まれますね）

「あう・・・・・・・・じゃあ恭也さんが美由紀さんに聞く？」

（前述と同じ面倒が生まれます）

「ああああ・・・・・・・・」

ほ、他に方法は・・・・・・・・。。

「病院の人に聞く！」

（潜入するという観念から大幅にずれていませんか？）

「うう・・・・・・・・」

やっぱり最終手段を使うしかないかなあ・・・・・・・・。。

（考えてみてください主、なのは嬢以外に魔法の存在を教えない状態で正当な方法を使うのはほぼ不可能と思われます）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

うん、止めありがとう藍桜あゝ！！orz

同日PM23:00

カタンツ・・・。

「・・・！？」

（物音には十分ご注意を、主）

（わ、分かってるよぉ・・・）

お察しの通りただいま病院に潜入しています。

病室の場所？ええ、ハッキングで探しあてましたが、何か？
つとけないいけない、通り過ぎるところだった；

（ここが士郎さんの？）

（ええ、間違いありません・・・主、九時の方向より反応、
巡回の看護婦と思われます）

（っ！分かった！）

なるべく音をたてないように扉を開けて、中に入る。

続けてそのままの状態を保ってベッドの下にもぐりこんだ。

思ったとおり看護婦さんが病室の扉を開けて、懐中電灯で一通り部屋を照らす。

わたしは限界まで息を殺して、看護婦さんが去るのをじっと待つ。

「……………気のせいかしら？」

看護婦さんの独り言が聞こえた後、扉が閉まる音がした。
足音が、遠くに消えていく。

「……………ふうーっ」

ベッドから出ると、自然に大きなため息が出た。

（去りましたね、当分は巡回もこないでしょう……………主、今の内に）

「うん」

槍と魔方陣を出現させて、構える。

「思ったより軽いけど……………ひどい事に変わりはない……………か……………うん」

柄尻を床につけて、唱える。

「彼の者を死の淵より呼び戻せ『レイズデッド』」

一瞬の光、それが士郎さんの体の中に入り込んで、傷を消していく。

・・・よし、これなら大丈夫かな？

「さてと、用事も済んだし、帰ろつか？」

（ええ、今の光に気付いた者がここにきたら、面倒なことになりますからね）

巡回の看護婦さんに注意しながら、高町家へ帰還です。

F r e e s i d e

翌朝。

桃香は騒がしさを耳で感じ取り、まだ眠気が残る脳を無理矢理覚醒させてリビングに下りると、突然美由紀に抱きつかれた。

何となく予想はしていたが、病院の連絡網と高町家の喜びように圧

倒されてしまう。

本当は知っているが、そ知らぬふりをして騒ぎの原因を聞いてみた。

「おとうさんがめをさましたの!」

桃香の質問に答えたのはなのはだった。

「そうなの?よかったね!」

ちなみにこの言葉は、芝居半分本心半分である。

術を使用したとはいえ、本当に治ったのか正直不安だった。

それに、意識を取り戻すという予想以上の結果を生み出すことができたのだ。

喜ぶなど言うほうが難しい。

「今から病院に行くけど、桃香ちゃんも来る?」

「え、いいんですか?」

「もちろん!あなたのことを紹介するいい機会だわ」

「あ……はい!」

桃香が着替える為に部屋に戻ろうとすると、なのはに服を引っ張られる。

耳を貸せというジェスチャーをしたため、身をかがめた。

「おとうさんをなおしたのって、とうかちゃん?」

「………なんでそう思ったの?」

「だってとうかちゃんまほうつかえるでしょ?」

純粹にそう聞かれ、桃香は苦笑いして頷く。

なのはは顔を明るくすると、桃香に抱きついた。

side 桃香

あれから数日、土郎さんの退院も決まって高町家はお祝いモードに入っている。

内緒でやったとはいえいくらか恩を返せた感じがして、凄く清清しいです！

今は一人で散歩をしている。

臨海公園に立ち寄って、持参したお茶を飲んで一息。

んゝ・・・何ていうのかな？こっいうのんびりする瞬間っていうの？すごく落ち着くしほっとするから好きだなあゝ。

「ふう………」

はたから見たらすつごく幸せそうなんだろうなあ、今のわたし。
さてと、日もだいぶ傾いてきたし、そろそろ帰らな

（主！後ろ！）

「え？」

フォンッ

ドスンッ

ドサッ

第九話潜入と治療（後書き）

さて、次回はちょっと早いですが、桃香編プロローグの最終回！
桃香はどうなったのか？

期待してくれると嬉しいです（笑
それでは^^ノシ

第十話異能VS異能（前書き）

夏バテにやられて、更新が遅くなってしまい申し訳ありません；さばくです。

桃香のプロローグ最終回ですが……。

いつも以上にグダグダでございます！！（ヤケ

よろしければ生暖かい目で見守ってやってください；

それではどうぞ！

第十話異能VS異能

side なのは

「変ねえ・・・・・・・・」

おかあさんが、ためいきをついた。

いまは・・・・・・・・えーと・・・・・・・・しちじ？だっ たっ け？

とにかく！よるになつてもとうかちゃんがかえつてきてないの！

きょうはせつかくおとうさんがかえってきたのに・・・・・・・・どう
いうこと？

「夕方に散歩に行つたつきり帰つてこないし・・・・・・・・」

「ああ、いつたいどうしたんだ？」

おにいちゃんもおねえちゃんもしんぱいしてるの。

「母さん、ちよつと探してくるよ」

「じゃあ俺も」

「ええ、気をつけて」

おとうさんとおにいちゃんがさがしにいきました。

・・・・・・・・・・とうかちゃんだいじょうぶかなあ？

side 桃香

・・・・・・・・・・っ!?

(お目覚めですね、主)

「藍ざくっ~~~~!!」

何ここ?・・・・・・・・・・廃屋?どうしてここに?

というか、頭の後ろが痛い・・・・・・・・それに手足が拘束されてる・
・・・・・・・・。

「っそうだ!散歩してて、そろそろ帰ろうかなってときに誰かに殴
られて・・・・・・・・。」

思い出してたときに、ドアが乱暴に開けられた。

「こいつが例の?」

「ええ、黒い長髪に深緑の目・・・・・・・・間違いありません」

・・・・・・・・あれ?

「もしかしてわたし、あなた方に拉致されたんですか?」

「ほう、察しがいいな?その通りだ」

.....or z

「はぁ.....で、何が目的なんですか？」

「おまえが居候している高町家.....正確にはその大黒柱.....といったところか」

相手を睨みながら、思考と観察を始める。

一人は藍色のスーツに黒いサングラス、金色に染められた髪。

もう一人は黒いジャケットに右手に鉄パイプ（鈍器を持っているから、多分この人がつれてきたんだろう）、白いシャツにジーンズを履いている。

そしてこの人たちの狙い.....『高町家の大黒柱』は.....

「土郎さん.....ですか」

「そうだ」

まったく、退院したばかりの病み上がりを狙うなんて.....。

（ですが作戦的には有効ですね、主が目覚めるまでの間、失礼とは思いましたが土郎氏を調べてみました.....『裏』の世界では有名人のようですね）

（.....『裏』？）

（要人の警護.....俗に言う用心棒ですよ、今回の入院も警護中に傷を負ったから、だそうです）

なるほど.....。

「それで？土郎さんが狙いなら何故わたしを？」

「人質だ」

・・・・・・。

（漢字三文字ひらがな五文字で返しやがりましたねこの野郎）

「（まったくだよ）そうですか、でもあの人なら意味が無いでしょうね」

「・・・・・・何？」

丁度二人の肩越しに窓が見えた。

外はもう真っ暗だ。

現時刻は分からないけど、高町家のみんなが探しているのは間違いないだろう。

人質といふかなり足手まといのポジションになってしまったわたしに出来ることは何か？

簡単だ。

「あまりお会いしたこと無いわたしでも分かります・・・・・・土郎さんは強い、それこそ、人質が意味を成さないくらいに」

『現実を混ぜた虚実』で行動の無意味さをすり込み、すこしでも相手の戦意を奪うこと。

自力で脱出は二の次にしておこうかな？

「そんなこと重々承知だ、だが本当にそうかな？こちらには数えるのも億劫なくらいの人手がいるんだぞ」

「・・・・・・それはつまり『一人ではわたしを救出できない』・・・・・・と？」

「そうだ」

・・・・・・。

「はあ」

「……何故ため息を？」

「考えてみてください、彼はまだ成人していないとはいえ十分に実力を持ったお子さんを二人ももっているんですよ？それに……」

今の自分に込められるだけの敵意を相手に向ける。

「もしそれでも足りなければ、わたしが加勢しますよ？拘束をされたままでも……ね」

「……くっ」

あ、今笑ったな。

「くっくく……ああ、いや……これは失礼……」

・ただ、あまりにも滑稽だったからな……」

「……そうですか、ですがその余裕もいつまで続くでしょうね？今頃表の方々は全滅……」

「何……！？ちくしょう！！」

「おい待て！！」

黒服のおにさんが部屋を飛び出していった。

・……こんな嘘に簡単に引かかるなんて、馬鹿だね。

嗚呼、でもそろそろ虚実のネタが無くなってきた……

「さて、もういいだろう？出てきたらどうだ？」

……はい？

「・・・さすがに気付いていたか」

「当たり前だ・・・ほう、息子も一緒か」

おじさんと会話しながら部屋に入ってきたのは、士郎さんと恭也さんだった。

f r e e s i d e

廃屋にて、士郎と男が睨みあう。

士郎の後ろには息子の恭也が控えており、敵に隙あらばすぐに飛び出し桃香を助け出そうと、機会をうかがっていた。

「こちらの期待を裏切るなんて酷いじゃないか、邪魔者が死ぬと思っ
つて大喜びしていたのに」

「それは失礼したな？だが、運はいつも私に味方したようだ」

「残念だ、しかし不思議だな？ついこの間まで意識不明だったお前が今日になって退院と来た・・・魔法でもない限り不可能な回復力だ」

「そうだな、実際私は意識不明から一気に回復できた・・・・・・・・・・本当に誰かが魔法をかけたとしか言いようがない」

「ふん、まあ味方がいてくれてよかったな？お陰でこっちは最悪だが」

桃香は『売り言葉に買い言葉とはこのことをいうのだろうか』と思いながら士郎の完治を『魔法』や『最悪』、『死ぬと思って大喜び』の単語に、冷や汗をかいたり、敵意を向けたりしていた。その時

「このガキヤア！！よくも騙しやがったな！！！」

血相を変えた黒服の男が、恭也を押しつけ桃香の胸倉を掴んだ。

「何をそんなに怒っているんですか？相手が流した情報を疑いもせず信じ込んだあなたの自業自得でしょう？」

桃香はなるべく顔色を変えないように勤めながら、黒服の男に言い放つ。

「つくそがあ！！舐めんなあ！！！」

黒服は感情に任せて桃香を床に叩き付けると、パイプを振りかぶる。だが、パイプがおろされた先に桃香はいなかった。

「桃香のいうことはもつともだ、自分を正当化するために暴力を振るうなんて姿、弱く見えるぞ」

いつのまにか桃香を抱えた恭也が、黒服の後ろにいた。黒服は悔しそうに下唇を噛み、地団太を踏む。

恭也は桃香の拘束を解くと、自分の後ろにやった。

「……………人質も無くなったか……………さて士郎、突然だが死んでもらおうか？」

「本当に突然だな？まあわたしにその気はないが……………っ！」

始まりは一瞬だった。

男がどこから取り出した刀で士郎の顔に一閃を打ち出す。

士郎は仰け反って避けると恭也と桃香を下がらせ、咄嗟に拾い上げた鉄棒で刀を薙ぎ払う。

「恭也！桃香ちゃんを……………」

「はい！」

答えるなり、恭也は桃香を脇に抱え後方に飛び退いた。

男は突然にやりと笑い、刀を空振りする。

士郎と恭也は何のことだか分からなかったが、桃香は違った。

「二人とも頭を下げてください！！」

音が脳に到達する前に、ほぼ反射的に身をかめた。

直後に後ろの方でバスンと何かが切れる音。

振り向くと、壁に綺麗な斜線が刻まれていた。

「よく気付いたな、だが次は無いぞ」

男が再び刀を振り上げ、縦一閃を繰り出す。

士郎は横に飛び退いてそれを回避した。

足手まといになってしまおうと思ったのか、恭也は桃香を手を引き外へ出ようとする。

実際部屋はそれほど広くも無い上、敵味方合わせて5人もいるのだ。このままでは、いるだけで士郎の動きを妨げてしまふのは目に見えていた。

しかし、

「そう簡単にお家に帰らせるとでも？ ばあーか！ させるわけねーだろー！！」

黒服がパイプを恭也に打ち付けた。

幸い急所には当たらなかつたが、相当のダメージを負つたようだ。

恭也は肩を押さえ、その場にうずくまる。

それを確認した黒服は、士郎を羽交い絞めにした。

「息子もしくはらくは動けまい……それにわたしにはこの『断空』の能力がある、勝負ありだな？ 高町士郎」

笑う男や黒服とは対照的に、士郎は顔をしかめた。

男の刀が振られる。

もし男が、口の中で言葉を紡ぐ桃香を視界に入れていたなら、確実に勝っていただろう。

「ノームー！！」

断空の一閃は、突如現れた岩に阻まれた。

side 桃香

士郎さんも恭也さんも窮地に追い込まれてる。
あのおじさんの『断空』はかなり厄介だけど、防げないわけじゃない。

（だよね？藍桜）

（ええ、『彼』の力なら可能です）

（ん、じゃあ……）

おじさんとおにいさんに気付かれないように、言葉を紡ぐ。

「其は大地に根を張る堅き盾、来たれ山吹の太子……………」
「！」

おじさんの刀が振り切られると同時に、わたしはその子の名前を呼んだ。

「ノーム……！」

士郎さんの目の前に、岩が突き出てくる。

それは『断空』を上手く防いでくれた。

それと同じくして、士郎さんを抑えていたおにいさんに山吹色の何かが体当たりして、無理矢理離した。

初めまして主！呼び声に応じてノーム参上だよっ！

「うん、ありがとう」

そんな元気な声とともに、山吹色の体毛をもった、四速歩行の動物が、わたしの隣に浮いていた。

おじさんやおにいさんじゃなくて、士郎さんや恭也さんも驚いた様子でこっちを見ている。

とはいえ、ボク状況がよく読めてないんだ、さっきの主が望んでたからやったことだし……。

「大丈夫、簡単だよ」

わたしはおじさんとおにいさんを指差して。

「この人とこの人は敵、ただそれだけ」

槍を出して、構えた。

「桃香ちゃん？」

士郎さんが戸惑っているようすで、わたしを見る。

……ちよつと、いきなりすぎたかな？

「大丈夫です」

今いえることは少ない、だからそれだけ伝えた。

そしたら、分かってくれたのかな？ 士郎さんはさっき落とした鉄棒を拾い上げて、わたしの後ろに立った。

恭也さんも鉄棒を構えて士郎さんの隣に立つ。

わたしはこの場を任せてくれた二人に感謝しながら、おじさんおにいさんと向き合った。

「君も私と同じか」

「異能を持っている点ではそうでしょうけど、あえて言います、同じにしないで下さい」

「それは失礼した、だが私と戦えるかな？ エモノが違うとはいえ、仮にも武人だ、相手の構えに迷いがあることぐらい、見抜けるぞ？」

おじさんはあの『断空』でたくさんの人を殺してきたんだろう。

それこそ、老若男女関係なく。

おじさんの言う『迷い』があるのは当たっている。

これからのこととか、わたしが背負っている『やるべきこと』とか、正直、わたしで大丈夫なのかと不安でいっぱいだ。

だけど、

「『迷いがあるから』『怖いから』って言い逃れして、戦うべきときに戦わないで背を向けるなんて真似やるほど、臆病者でもありません」

ちよっと到達するのが早すぎたかもしれないけど、これがわたしの結論。

文句も何も、言わせない。

「流派なし無所属、亜桜桃香、推して参ります」

よーし！ 絶対勝とうね主！

それを合図に、ノームが槍に憑依する。
槍は山吹色を主としたカラーリングへと変化し、鍔は広がり盾に変形した。

真っ先におにいさんが突っ込んできて、パイプをわたしに振り下ろす。

わたしは槍の盾で受け止めてそれを弾き返し、飛び上がって顔面に回し蹴りを叩き込んであげた。

「少しはやるようだな……だが、これはどうだ？」

おにいさんがやられたのを別に気にしてなさそうな感じで見ると、刀を振ってきた。

「効きませんよ」

案の定断空を撃ってきたので、盾で防ぐ。

直後、後ろに気配。

振り向きざまに、わたしも向こうも一閃を繰り出す。

おにいさんが、パイプで殴りかかっていたらしい。

さっきわたしが蹴ったところは、赤く腫れ上がっていた。

また後ろで動き有り。

咄嗟に頭を下げると、おにいさんの顔に紅いラインが入り、真ん中から上を切り落とされた。

「……………どうしてくれる？」

おじさんがドスの聞いた声を、口から解放放つ。

「貴重な駒が減ったではないか」

「とかいいつつ、それほど残念そうでもありませんね?」

おじさんの文句を流しつつ、撃ちあいを始めた。

窓の外にちらつと視線を移すと、さっきは見えなかったビルの時計が見えた。

（もう九時回ってる・・・ちょっと早いけど、いい加減決着つけないきゃだね）

おじさんの刀を弾き飛ばして、バインドで四肢を拘束する。

「エクセリオン・・・」

ノームの憑依を解除して投降の姿勢をとって、構える。

「ストライク!!」

おじさんの胸部目掛けて、槍を投げた。

避ける術が無かったおじさんは、槍をもろに受けて倒れる。

もちろん非殺傷設定だから死にはしないけど、しばらく起きないだろう。

・・・なんだか呆気なかったかな?なんて考えながら苦笑いをした。

そうしているうちに士郎さんたちが、わたしに近づいてくる。

「・・・帰ろうか」

「・・・はい」

拒む理由も無いので、そう返した。

s i d e 士郎

帰り道、桃香ちゃんは教えてくれた。

恭也に発見された時に覚えていたのは、名前と生活の知識と魔法の使い方だったこと、港の騒ぎの当事者は自分となのはだということ。そして、俺の傷を治したのも、自分だということ。

何故？と聞くと、彼女は笑って、

「わたし、なのはちゃんの気持ちは何でかよく分かったんです、それになのはちゃんまだ５歳でしょう？我がまま言ってなんぼの年頃で、あれはちよつと危険かなって思っで、勝手にやったんです」

最後に「結果、皆さんに迷惑かけることになりましたけど」と言っで、苦笑いをした。

だがすぐ後にその笑顔を消して、寂しそうに俺と恭也を見て、聞いてきた。

「わたしが怖いですか？」

俺がさきほど、相手の異能の力で死に掛けただからだろうか？

内容は違うとはいえ、同じ異能を持つ桃香ちゃんだからこそその問いかもしれない。

軽く恭也とアイコンタクトで相談して、決める。

「怖くないさ」

「……………本当ですか？」

かなり意外そうな表情でこちらを見ている桃香ちゃんの間を見ながら、言葉を紡ぐ。

「ああ、君はなのはを守って、俺を二度も助けてくれた、そんな子を怖がる理由なんて無いよ」

目先の彼女は、放心した状態で俯き、小さく呟く。

「……………ありがとうございます」

俺は黙って桃香ちゃんの頭を撫でた。

第十話異能VS異能（後書き）

というわけで、桃香のプロローグ終了ですが・・・反省点多いです。士郎さんの口調と一人称が分からなかったり、恭也さんとともに若干空気になっていたり、戦闘がそんなに続いてなかったりetc etc・・・。

ツゲフンゲフン、さ、気合を入れなおして、今回は桃香も設定一（十話後時点）いきまーす！

亜桜桃香（8・女）

身長：女子の平均よりちょっと下くらい。

体重：「女性の体重を聞くとかどういいう神経していらっしやるんですか？（黒笑）」

能力：ライブラリ記憶図書館、精霊召喚、???

オーナー管理者：藍桜

詳細：ライブラリ記憶図書館の管製人格により故意に死亡させられた転生者の一人。

基本おっとりとしており、常に癒しオーラを醸し出している少女。だがひ弱な見た目とは裏腹に、しっかりとした芯の持ち主でもある。中々目覚めないのと、原作開始までの時間がなくなったことを理由に、管製人格に強制転送させられた。

主に槍技や、精霊との連携、後方支援を得意としている。

ちなみに戦闘の際に武装をするかしないかは検討中とのこと。

実は隠れ腹黒であり、その黒さは彼女が怒った時に合い間見えることができる。

普通「目が笑っていない笑顔で怒る」というが、彼女の場合「目も笑っている笑顔で怒る」である。

最近居候先の高町夫妻の進めにより、聖祥小に入るため勉強中（といってもすでに小学校の知識はあるため復習くらいだ）。

能力の一つ『精霊召喚』は、現在ウンディーネ、ノーム含めた四体を召喚可能。

後々召喚可能数が増える予定……。

さて、今回は三人目の転生者の話が始まります。

期待していただけると幸いです（苦笑

それではこの辺で^^ノシ

予告？（前書き）

すみません；あれから色々考えた結果、三人目のプロローグは書かないことにしました。

いや、三人目はちゃんと出ますよ？ただ、そっちの方がキャラを生かせそうだったので……ご迷惑をお掛けします。

一応今回から本編ですが、タイトルの通り予告っぽくなっていますので、ちょっと短いです。
それではどうぞ。

予告？

side ???

妙^{たえ}なる響き、光となれ！

．．．．．ううわあ、周り紅いな。

赦されざる者を、封印の輪に！

．．．．．どこだここ？

ジュエルシード！封印！！

じゅえる．．．？どこかで聞いたような．．．？

逃がし．．．．．ちゃった．．．。

何だあ．．．？これ？

追いかけ．．．．．なくちゃ．．．。

．．．．．男の子？

誰か．．．．．誰かぼくの声聞いて。

．．．．．ああ、なるほど。

力を貸して．．．．．！

原作の始まりかあ。

魔法の力を……！！

side ????

妙^{たえ}なる響き、光となれ！

………何？これ？

赦されざる者を、封印の輪に！

………ここは、どこ？

ジュエルシード！封印！！

じゅえる………？しーど………？

逃がし………ちゃった………。

．．．．．あ、怪我してる．．．．！？

追いかける．．．．なくちゃ．．．．。

その怪我じゃ無理だよ！どこにいるの！？

誰か．．．．誰かぼくの声聞いて。

聞こえるよ！！だから答えて、どこにいるの！？

力を貸して．．．．！

光．．．？．．．．イタチ．．．．うっん、フェレット？

魔法の力を．．．．！！

待ってて！すぐに助けるから！！

side ????

何故俺は生きている？

・・・

確か劇場版を見た後、喫茶店で昼食を取っていて・

それで、暴走したトラックが突っ込んできて、確かに絶命したはずだが・・・？

それに・・・

「なんで『男』になつてんのかな？」

ああ、言つてなかったな？俺の元々の性別は『女』だ。

まあそれはいいとして。

先ほど述べたように、俺はあの喫茶店で確かに死んだはずだが・・・。

・・・ん？何で女なのに男みたいな喋り方してるかって？別にいいじゃないか。

誰がどういう口調で喋ろうが、個人の勝手だ。

・・・というのは建前で、実家が武家だからというのが一番の要因だが。

さて、本題に戻つて続けるぞ？

死んだと確信した直後に真っ暗になって、気が付いたら知らない部屋で寝ていた。

一体何がどうなっているというんだ？

（お目覚めですか？）

（一生目を開けなかったらどうしようかと思つたよw）

.....

「.....寝よう」

（残念、ここ夢じゃなくて現実）

（突然申し訳ありません、ですが現実逃避はなさらないよう）

.....はあーっ。

「分かった、でだ、俺は今どういう状況になっている？」

（おーらい、とりあえず話すからよく聞いてね？）

脳内で響いた男女の声に思わず逃避しそうになったが、現実であることを半ば無理矢理受け止めて、声に耳を傾ける。

曰く、確かに俺は死んだが、記憶図書館の適合者だったため、異世界に転生させられた。

曰く、この『魔法少女リリカルなのは』の世界で起きる悲劇や歴史の改変を阻止しなければならない。

曰く、俺の死因であるトラックの事故は、記憶図書館の管製人格による人為的なものである、なお、適合者は俺を含め三人いるらしいが、それ以外の死者は出ていないとのこと。

曰く、記憶図書館の他にも、あと二つ能力がある。

曰く、自分達はデバイスの人格にあたるもので、管理者と呼称される、なお、前述の能力の影響で、普通は一人のところを二人になっている。

曰く、現在原作の約1ヶ月前。

.....って、

「もうすぐ始まるじゃないか」

（相棒含めた二人が事故のダメージ大きかったみたいでさ、間に合わないってことで、ランダムに転生させられたんだよね）

「何だそりゃ……」

というか、

「肝心な疑問が解決出来てないぞ、『何で俺は男になっているんだ？』」

（え、女だったんですか？）

（ありゃ？じゃあ管製人格が間違えたのかな？）

「………どういうことだ？」

（その前にちよつとかくにーん、君、生前もそんなしゃべり方だった？）

「あ……ああ」

（失礼と思うけど……胸は？）

「………ああ、ああそうだったさ！！見事なまでに壁だったさ！！」

武の心をもっているとはいえ、女としてそこだけは欠点だと感じていたんだ！！

（あーじゃあ簡単だ、男に間違えられたんだよ）

………orz

（ええと……ご愁傷様です）

「いや、お前達は悪くないから……大丈夫だ」

（ありがとうございます）

「そういえば、名前を聞いてなかったな？」

（はい、私は暗^{くら}サワと申します）

（俺は闇^{やみ}サワ、よろしく、ところで相棒の名前は？）

ああ、そうだったな、先ほどの話を聞く限り、前世の記憶は口に出
来ないようだから……。

さてと……どんな名前にするか……。
……ん？ドアの開く音？

「あ……目が覚めたんですね？」

『始』まるのは、『破壊』の物語。

『続』くのは、悲しみか、喜びか。

何にしろ、『終』わりに待つものは何なのか、誰にも
分からない。

武器を『創造り』、『言の葉』を紡ぎ、護るために『
狂い』。

現状を『見て』、仲間を『使役』して、『砕けない』
刃で切り開く物語。

これから語られるのは、そんな話だ。

とある姉の原作破壊（仮

始まります。

予告？（後書き）

というわけで、予告？終わりです（

前書きで述べたように一応今回から本編です。

さて・・・・・・上手く書けるかどうか・・・。。

それではこの辺で^^ノシ

もうお気づきかも知れませんが、最後の予告のところの、**囲まれた**
部分は、割と重要事項だったりします（苦笑

第十一話 始動（前書き）

うまくまとめきれず反省・・・。

第十一話 始動

「・・・・・・・・何か・・・・・・・・変な夢を見た気が・・・・・・・・」

どうも、亜桜桃香です。

突然ですが、言葉の通りついさっきまで変な夢を見ていました。

何だか・・・・・・・・雑木林みたいな場所で、マントを羽織った男の子と、黒い・・・・・・・・生物って言うていいのかな？

とにかく、その両者が戦って、両者とも傷を負って、男の子が助けを呼んで倒れる・・・・・・・・っていう内容だったんだけど・・・・・・・・。

「夢にしちゃ妙にリアルだったし・・・・・・・・だとしたらどこにいるのかな？」

着替えながら、夢について考察です。

ちなみにだけど、あれから4年経ってます。

あの後、高町家の皆さんに魔法のことを打ち明けました。

もちろん拒絶されたら黙って出ていくつもりだったんだけど、全然そんなこと無くて。

普通に受け入れてくれて・・・・・・・・すごく嬉しかったなあ・・・・・・・・。

それから学校にも通わせてもらって、現在小学6年生です。

ちなみになのはちゃんは3年生・・・・・・・・。

藍桜によると、そろそろ原作が始まるらしいけど・・・・・・・・。。
ちよつと緊張します；

（おはようございます、主）

「え、あ、うん！おはよ、藍桜」

（思考が終わったようなので声を掛けました、あと、時間・・・）
「時間・・・・・・・・？」

藍桜に促されて、時計に目をやると・・・・・・・・。

「あ、ほんとだ、藍桜ありがとう」
（当然です）

ジャージの上着を着込んで階段をおり、道場へ向かう。

「すみません、お待たせしました！」
「大丈夫だ、さ、始めよう」
「はい！」

待っていた恭也さんと向き合って、木の槍を構える。

「・・・・・・・・・・むう・・・・・・・・・・なんか変な夢見ちゃった・・・・・・・・」

多分同じ年くらいの男の子が、助けを呼ぶ夢・・・・・・・・・・。
何か意味があるのかなあ？後で桃香ちゃんに聞いてみようっと。
さてと、着替えて朝ごはんだ！

「おはよー」

「あ、なのはおはよう」

「おはよう、なのは」

お父さんとお母さんに朝の挨拶をして、お母さんのところにいきます。

「はい、これお願いね」

「はい」

渡されたのは、人数分のコップが載ったおぼん。
わたしはそれをテーブルまで運んで、新聞を読んでいたお父さんに一つ渡します。

「今日はちゃんと起きられたな、えらいぞ」

「朝ごはん、もうすぐ出来るからね」

二人に笑って返してから、お父さんに聞きました。

「お兄ちゃん達は？」

「ああ、道場にいるんじゃないか？」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、桃香ちゃんおはよー！朝ごはんだよ」

お庭に出て、道場の扉を開けて、中にいるみんなに声をかけます。
中では、四年前から家に居候している小学六年生の桃香ちゃんと、
大学一年生のお兄ちゃん、高校二年生のお姉ちゃんが、日課の組み
手をしていました。
ちょうど終わったみたいで、桃香ちゃんの技が綺麗にお姉ちゃんに
決まっていました。

「うあー・・・桃香、前より強くなってる？」
「そんな！私なんてまだまだ・・・」

お姉ちゃんに誉められて、慌てる桃香ちゃん。
わたしは二人にタオルを渡しました。

「ありがとう」
「ありがとうなのはちゃん」

二人とも嬉しそうに笑って、汗を拭きます。

「じゃあ二人とも、今朝はここまで」

「はい」

「じゃあ続きは学校から帰ってからね」

みんな一緒に、リビングに行きます。

side 桃香

「んー、今朝もおいしいなあ、このスクランブルエッグが！」

「ほんとう？トッピングがトマトとチーズと、それからバジルが隠し味なの！」

士郎さんは、今日も桃子さんの料理をべた褒めしてる。

「みんなあれだぞ？こんな料理上手のお母さんを持って幸せなんだから、分かってんのか？」

「分かってるよ、ね、なのは、桃香」

「うん！」

「もちろんです」

美由紀さんが、苦笑いしながらわたしとなのはちゃんに振ってきたので正直に答えた。

「あん、もうやだあなただったら」

（…………今朝もかなりの新婚っぷりですね…………ここまできると尊敬の域に入ります）

（あはは…………分からなくもないかも）

…………慣れってすごいなあ。

流石に四年もいるとこの目の前で繰り広げられる新婚オーラがなんともなくなつたよ。

嗚呼、赤面してた頃が懐かしい…………。

「美由紀、リボンが曲がつてる」

「え？ほんと？」

つと、こつちでも。

士郎さんと桃子さんほどじゃありませんが、恭也さんと美由紀さんもかなり仲良し。

高町家三人兄弟含め、愛されてる自覚はあるにはあるのですが、わたしはもしかすると微妙に浮いているかも…………。

「あ、なのはちゃん、ここはねてる」

「ほんとう!？」

「うん、でもこれくらいならブラシかければいいと思うよ」

「そっかあ、よかったあ」

…………訂正、わたしとなのはちゃんも仲良しです。

「あ、そうだ、桃香ちゃん」

「うん？」

バス停へ向かう途中、なのはちゃんが何かを思い出したみたい。

「昨日、変な夢を見たの」

「どんな？」

「あのね……」と語りだすなのはちゃん。
どうもわたしと同じ夢を見ていた様だった。

「わたしも同じ夢を見たよ」

「そうなの！？」

「うん、多分、誰か助けを呼んでいるんじゃないかな？そのために送った信号が、たまたまわたしとなのはちゃんに届いたんだと思うよ」

「じゃあ、速く助けなきゃ！」

確かに、夢を見る限り相当なダメージを負っているみたいだし、救出は早いに越したことは無い。
だけど……。

「焦っちゃ駄目、助けなきゃいけないのは確かだけど、今から行ったらみんなが心配して探すでしょ？」

「あ……」

「こんな言い方なんだけど、あの様子だと一日くらいほっといても別に死ぬような感じじゃなかった、だから放課後でも遅くないと思

う」

「……………うん、そうだね」

丁度バス停が見えてきたので、結論をなのはちゃんに伝える。

「さつきもいったけど、放課後になつてからでも遅くないと思うよ？だから絶対助けようね」

「……………うん!!」

やってきたバスに乗り込み、運転手さんに挨拶。
と、

「なのはちゃん！桃香さん！」

「二人ともこつちこつち！」

バスの一番後ろのほう。

二人の女の子が手を振っていた。

「すずかちゃん、アリサちゃん！」

「おはよ」

「おはよう、なのは、桃香」

わたしたちが座ると同時に、バスが発車した。

ちよつと勝気な感じのアリサ・バニングスちゃんと、おっとりだけど芯は強い子月村すずかちゃんはなのはちゃんの友達。

一年の時から同じクラスで、今年からは同じ塾に通い始めた。

……嗚呼、この三人のやりとりは見てて微笑ましいなあ。

「この前みんなに調べてもらったように、この街にはたくさんの仕事があったな、この街のお店の働く人たちの様子や工夫を実際に見て聞いて、大変勉強になったと思う」

担任が黒板に書き込みながら、この間の三年生との合同で行われたお店調べのまとめをしている。

「このように、色々な場所で色々な仕事があるわけだが、みんなは将来どんな仕事に就きたいか？」

将来……か、そういえば考えたことがなかったなあ。

「今から考えてみるのもいいかもしれないな」

そのとき丁度チャイムが鳴った。

「将来かぁ・・・・・・・・」

なのはちゃんがそうぼやきながら、タコさんウィンナーをほおばる。どうやらこちらのほうでも似たような話がされていたみたいだ。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もうけっこう決まっているんだよね？」

「うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強してちゃんと後継がなきゃ・・・・・・・・くらいだけど？」

「わたしは機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなあ、と思ってるけど・・・・・・・・」

「確かに」

アリサちゃんとすずかちゃんの二人はほとんど決まっているみたい。

「二人ともすごいよね・・・・・・・・」

「でもなのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？桃香も」

「うーん・・・・・・・・それも将来の一つのビジョンではあるんだけど・・・・やりたいことは何かある気がするんだけど、まだ、それがなんなのかはつきりしないんだ」

なのはちゃんは最後に「わたし、特技も取り柄も何もないし・・・・」と付け加えた。

「……って、なのはちゃん？それを言ったら…….
うか、もう我慢の限界みたいですよ？」

「ばかちゃん！」

「うにやつ!？」

「あーあ、アリスちゃんご立腹；

投げたレモンがなのはちゃんのほっぺたに命中です。

「自分からそういうことゆうもんじゃないの！」

「そうだよ、なのはちゃんにしか出来ないこと、きつとあるよ」

まあ、二人の意見には賛成だけどね。

自分に自身を持たなきゃ。

逆にあんまり持ちすぎてもいけないけどね。

「だいたい！理数の成績はこのあたしよりも上なのにそれで取り柄がないというのはどの口よ!？」

アリスちゃんがなのはちゃんの両頬を掴んで引き伸ばす。

「……おお、面白いくらいにのびるなあ。」

「あわわわ……だって、文型苦手だし体育も苦手だし……」

なのはちゃんの言ってることは間違ってなくも無い。

「……でも理数が得意な時点で凄いと思うけどなあ。」

（主はすべて中の上ですものね）

（藍桜……今言わなくてもいいでしょ？気にしてるんだから…….）

言葉の通り、気にしていることを指されたのでどーんと落ち込むわ
たし。

「ふ、二人ともやめようよ！見つとも無いよお、ねえ？ねえ？たら
！……って桃香さんも何落ち込んでいるんですか！？戻っ
てきてくださあーい！」

s i d e なのは

自分に出来ること……自分にしか出来ないこと……かあ。

「ねえ、今日のすずかドッジボールすごかったよね？」

「うん、かつこよかったよねー」

「そんなことないよ……」

塾に行く道。

今アリサちゃんすずかちゃんと話しているのは今日の体育のこと。

ドッジボールですずかちゃんが大活躍だったの！

桃香ちゃんは塾にいつてないから途中で分かれました。

話している途中にすれ違った犬が、わたし達にむかって吠えてきた

からのかな？

アリサちゃんが振り返って、

「Be quiet黙ってなさい！」

それからちよつと歩くと、また急にアリサちゃんが走り出して、

「こつちこつち！ここを通ると塾にいく近道なんだ」

たくさんの木に囲まれた道を指差して、嬉しそうに言った。

「そうなの？」

「ちよつと道悪いけどね。」

聞いてきたすずかちゃんに、アリサちゃんは苦笑いしながら答えました。

三人でその道に入って、そんなにたつてない頃。

あの夢がわたしの頭の中で再生された。

（ここ・・・夢でみた場所・・・）

「どうしたの？」

「なのは？」

急に立ち止まっちゃった所為か、二人が心配そうにこつちを見ている。

「あ・・・ううん、なんでもない！ごめんごめん・・・」

「大丈夫？」

「うん！」

すずかちゃんが心配そうな顔のまま聞いてきたので、首を縦に振る。

「じゃあ、行こう」

そう言ったアリサちゃんについていこうとして、一旦振り返って、

「まさかね・・・」

「なのはちゃん！」

「あ、うん！」

すずかちゃんにせかされた時でした。

助けて！！

そんな声が聞こえて、思わず立ち止まってしまふ。

「なのは？」

アリサちゃんが気付いたのか、声を掛けてくる。

「今、何か聞こえなかった？」

「何かって……何が？」

「何か……声……みたいな」

「何か聞こえた？」と聞くアリサちゃんに、すずかちゃんは「何も・
・」と答える。

助けて！

また声が聞こえた。

しかもさっきよりはつきりしている。

わたしは、二人の制止も聞かないで走り出していた。

第十一話始動（後書き）

桃香の担任は男性、故にそれっぽく書いてみたのはいいですが・・・。

どうも教師らしくねえ；

・・・まあ、いつか！

さて、次回はついになのはちゃん覚醒！桃香は？あいつは？最後の一人は？一体どうするのか！？

乞うご期待！！ハハノシ

第十二話なのはちゃん、初の魔法使用（前書き）

原作しってるから楽勝だって？とんでもねえ！！

見返さなきゃ分からないような部分がいくつもあって、逆に大変だったよ！

ッゲフンゲフン、さて、今回はタイトルどおりなのはちゃん覚醒です。

それではどうぞ。

第十二話なのはちゃん、初の魔法使用

side 桃香

「あの・・・みんな、ちょっといい？」

夕飯のちよつと前、なのはちゃんが切り出した。
なんでも大事な話があるらしい。
わたし含め、みんなその話に耳を傾けた。

少女説明中・・・

なのはちゃんの話が終わった。

まとめるところだ。

・アリサちゃんが勧めた塾への近道を通っていた時、助けを求める
声が聞こえた。

・その声は昨夜夢で聞いた声だった故、音源に向かうと傷ついたフ
エレットが倒れていた。

・もちろんすぐに獣医さんへ連れて行った、が、そのフェレットを
誰が面倒を見るかという課題が発生しているらしい。

・食べ物商売ゆえ、家に動物を入れるのは気が引けるが、アリサは犬を、すずかは猫を家にたくさん飼っている為、うちしか引き取るところが無いという……。

「ふうむ……。」

腕を組み考え込む士郎さん。

口からでた言葉は、

「ところでなんだ？フェレットって？」

ずっこける一同。

士郎さん……フェレットくらい知っておきましょうよ；

「イタチの仲間だよ、父さん」

「だいぶ前からペットとして人気の動物なんだよ」

すかさず恭也さんと美由紀さんがフェレットについての情報を、士郎さんに教えた。

「フェレットって、ちっちゃいのよね？」

「えーと……これくらい」

桃子さんが料理をテーブルに置きながら問いかけに、なのはちゃんは両手でサイズをあらわした。

「しばらく預かるだけなら、かごにいれておいて、なのはがきちんとお世話できるならいいかも、恭也、美由紀、桃香ちゃん、どう？」

「俺は特に依存は無いけど」

「わたしも」

「わたしもありません、ただ、なのはちゃんが聞いた声と関係がありそうな気がして……杞憂だといいですけど」

まあ、話を聞く限り害はなさそうだけど……ね？

「ふうむ……だ、そうだよ？」

「よかったわね」

なのはちゃんは嬉しそうに、頷いて「ありがとう」と言った。

f r e e s d i e

なのはは、アリサとすずかに、フェレットを家で引き取れるようになったことを、メールで報告していた。
文章を打ち終え、送信のボタンを押した時。

聞こえますか？ぼくの声が聞こえますか！？

「・・・・・・・・・・っ！」

一瞬で、なのはは気付いた。

「夕べの夢と昼間の声と、同じ声・・・・・・・・！」

すぐになのはは『声』に聞き入る。

聞いて下さい、ぼくの声が聞こえるあなた！お願いです！ぼくに少しか、力を貸してください！

「・・・・・・・・あの子が・・・・・・・・しゃべっているの？」

力を貸して！時間が・・・・・・・・危険が・・・・・・・・も

う・・・・・・・・！！

バリン、とガラスが砕けるような音がして、声は途絶え、なのはは現実に戻った。

そのままふらつき、ベッドへ倒れこむ。

一方、例のフェレットが預けられている動物病院では、黒い影が近づいていた。

side 桃香

お風呂もすんで、部屋に戻っている時だった。

さっきパジャマに着替えたはずなのはちゃんが、普段着に着がえて、廊下を走ってきたのだ。

しかも血相を変えて。

ちょうど隣にいた恭也さんが、不思議そうに聞いた。

なのはちゃんがどこかに行こうとしているのは確かなようだ。

「なのは？どうしたんだ？」

「そうだよ、どこにいくの？」

よつばど慌てていたのか、なのはちゃんは早口で言った。

「あの子が・・・あのフェレットさんが呼んでいるの！！」

「・・・・・・本当？」

思わず確認をとってしまおうわたし。
なのはちゃんは力強くうなづいた。

「そういう訳で恭也さん、ちょっと行ってきます」

「・・・・・・正直気が引けるが、任せるしかないようだな、父さん達には俺から言っておくよ」

「ありがとございます」

小さく頭を下げて、わたしはなのはちゃんと外に飛び出した。

・・・・・・風呂に入った後なんだからパジャマ姿で出たのかって？

大丈夫、今着ているのはジャージですから。

なのはちゃんの案内で、フェレットが預けられているという病院に
来た。

一見何も起こっていないように見えたけど…………。

なのはちゃんが突然頭を抱えた。

「っとうしたの？なのはちゃん!!」

「くうっ…………また…………この音…………っ」

苦し紛れになのはちゃんの口から出たのは『音』という単語。

気がつくのと、金属音のような音が確かに聞こえる。

直後に、空気が変わった。

全体的に赤っぽくなる周囲。

「結界…………でも誰が……………」

（っ、主!!）

藍桜の声が響いて、獣の唸り声と、何かが崩れる音が聞こえた。

「桃香ちゃん！あれ！！」

なのはちゃんが指差した先にそいつらはいた。

一つは、なのはちゃんが言ってたであろうフェレット。
もう一つは以上だった。

全体的に黒く、触手のようなものが二本生えている。

体の表面は、毛なのかスライムのようにすべすべなのか、見当が付かない感じのおそらく生き物だ。

黒いモノが触手でフェレットを薙ぎ払う。

フェレットは間一髪で避けて、飛ばされて、丁度なのはちゃんの腕の中に納まった。

なのはちゃんは小さく悲鳴を上げて、尻餅をついてしまう。

わたしは槍を出して一歩前に出て、黒いモノを睨んだ。

「な……なにに！？一体なに！？」

『魔法』の存在を知っているなのはちゃんでも、『アレ』は初体験らしい。

まあ、当たり前といえば当たり前だけど……………。

「来て……………くれたの？」

そのとき、フェレットが恐る恐るしゃべ……………って！！？

「しゃべった！！」

なのはちゃんも考えは同じだったみたいで、声が重なった。

（主は魔法を知っているんだから、別に驚くことは無いと思います
が……）

「しっ……仕方ないでしょ！？魔法を知ってても驚くことは驚
くの！！」

（さいですか……）

背後でグオオツと黒いモノが吠えた。

無視するなどでも言いたいの？

ただで残念、そんなひ弱な触手程度で……。

わたしに傷つけられると思わないで！！

槍を横一闪、向かってきていた触手を両断する。

「なのはちゃん、逃げるよ！！」

「あ、うん！」

魔力を圧縮して、黒いモノの目の前に発射した。

着弾を確認しなくてもいいので、なのはちゃんの手を引いて、病院
から脱出する。

背後から、強烈な光が溢れた。

side なのは

「えっと、一応魔法は知ってるけど、一体なんなの！？何が起きているの！？」

桃香ちゃんに手を引かれて、町の中を逃げ回るわたし達。

その間わたしはフェレットさんにお話を聞いてみることにしたの。

「あなた達には資質がある、お願いばくに少しだけ、力を貸して！」

「し、資質？」

「説明を要求します」

そういえば、桃香ちゃん言ってたっけ？『なのはちゃんは魔力が高い方だ』って。

「ぼくはある探し物のために、こことは違う世界から来ました、でもぼく一人の力では思いを遂げられないかもしれない」

だから、とフェレットさんが続けます。

「迷惑だとは分かっているのですが、資質を持った人に協力をして欲しくて・・・」

フェレットさんがもがいて、わたしから降りると

「お礼はします！必ずします！ぼくの持っている力を、あなたに使って欲しいんです！ぼくの・・・魔法の力を！」

「お礼とか、そういう問題ではないと思うのですが・・・」

そういってお辞儀するフェレットさんと、苦笑いをする桃香ちゃんでも・・・

「わたし、魔法使ったことないし、あんなのと戦うっていうのなら、桃香ちゃんにお願いした方が……」

「なのはちゃん、フェレットさん、下がって!!」

桃香ちゃんの声で上を見ると、さっきの黒いお化けが上にいた。わたしは夢中でフェレットさんを抱き上げて電柱の裏に隠れた。桃香ちゃんもいっしょだ。

「お礼は必ずしますから!」

「だから、お礼とかそういう問題じゃ……」

あの黒いお化けを見る、あの落ちたところで苦しそうに動いている。すると桃香ちゃんが立ち上がって、

「……フェレットさん、デバイスは持っていますか?」

「え、あ、はい!」

「それをなのはちゃんに」

「わかりました」

デバイス……桃香ちゃんから、聞いたことある。

魔法使いさん達の相棒みたいなもので、1+1を2だけじゃなくて、5にも10にも出来る可能性を秘めた発動体……。

だけど相性が悪かったら、『言うことを聞かない杖』になったり、『杖に使われている術者』になっちゃったりするって。

フェレットさんはわたしに紅いビー玉みたいな宝石を渡してくれた。さわると、すごく暖かくて、何だか安心する……。

これがデバイス……。

「わたしが時間を稼ぎます、なのはちゃんはフェレットさんに教え

てもらってその子を起動させて」

「え、でも！」

「大丈夫、あれくらいなら負けない」

言っなり桃香ちゃんはお化けと戦い始めちゃった。

・・・・・・よし！

「フェレットさん！この子の起動の仕方、教えて！」

「は、はい、目を閉じて、心を済ませて、ぼくの言っとおりに繰り返して」

「うん！」

フェレットさんの言っとおりに、目を閉じて、集中。

「我、使命を受けし者！」

「わ、我、使命を受けし者！」

「契約のもと、その力を解き放て！」

「契約のもと、その力を解き放て！」

「風は空に、星は天に、そして、不屈の心はこの胸に！」

いつのまにか、フェレットさんと声が重なっている。

「この手に魔法を！レイジングハート！セットアップ！」

途端にデバイスから光が溢れて、わたしは桃香ちゃんに言われたことを思い出す。

確か・・・・・・。

「落ち着いて考えて！君を護る服と、杖を……！」
「分かってる！」

頭の中に杖とわたしを護る服……バリアジャケット……だっ
け？

をれを浮かべる。

「とりあえず！これで！」

『Stundbyredy,setup』

デバイス……レイジングハートが光って、わたしを包み込んだ。

side 桃香

（しかし……以外としぶといですね、この思念体……
たしかロストログア『ジュエルシード』でしたっけ？もしそうであ
れば封印の必要がありますね）

「ちよつと話さないで藍桜！集中できない……！」

わたしが藍桜に怒鳴った時、

「この手に魔法を！レイジングハート！セットアップ！」

なのはちゃんがデバイスを起動させた！

あと少しわたしが耐えれば、なのはちゃんが封印出来るはず。

相手も十分弱ってきたしね！

「……………え？お前も封印できないのかって？残念、出来ません！！」

そもそも封印の術式自体組んでいないから、今のわたしは戦うくらいしか出来ないの！

（術式組んでおけばよかったですね、封印面では思いっきり役立たずです！）

「だからしゃべらないでよ！」

触手が突っ込んできたので、体を仰け反らせて避けた。

そのとき、いくつかの桜色のスフィアが黒いモノに当たった。

「桃香ちゃん！」

「なのはちゃん！」

なのはちゃんは、学校の制服を元にした白いバリアジャケットと、先端部分に紅い宝珠が付いた杖を持っている。

「……………というか。」

「なのはちゃんシューター出来たの？」

「全然！桃香ちゃんの見よう見まねでやったんだ、上手くいってよかった」

「……………つまり、ほとんど勘でやったんだねなのはちゃん；

つと、黒いモノがまた触手を伸ばしてきたので、槍で斬り飛ばす。続けて繰り出された体当たりも障壁で弾き飛ばした。壁に叩きつけられて、再びもがく相手。

「フェレットさん！早くなのはちゃんに封印のやり方を教えてあげてください！」

「分かりました！えと、なのはさん？」

「はい！」

フェレットさんがなのはちゃんに封印術をレクチャーし始めた。よし……あと少し！

「墜牙！爆炎槍！」

槍を振るって黒いモノを打ち上げ、火を纏った刃で突く。

「リリカルマジカル！」

つと、なのはちゃんの準備が終わったね？

じゃあわたしはここで退散。

あとは任せよつと。

「封印すべきは忌まわしき器！ジュエルシードシリアルナンバー2
1、封印！」

なのはちゃんが持っている杖から光の帯が伸びて、黒いモノの中に進入。

核になっていると思われる青い宝石のようなものを捕まえた。

黒いモノはもがくだけでもがくと、青い宝石を中心に消え去った。

「これがジュエルシードです、レイジングハートで触れて」
「うん」

青い宝石・・・ジュエルシードはなのはちゃんの杖の宝玉部分に
吸い込まれていった。

同時に結界が解除されたので、わたしも槍を納めた。

「ふう、一応一件落着・・・なのかな？」

「はい、ありがとう・・・ござい・・・ま・・・」

あらら、フェレットさん倒れちゃった。

・・・なのはちゃんが見つけたときは相当弱っていたら
しいから、そのダメージが来たのかもね。
さて、とりあえず家に・・・。

（主、警察がこちらに向かってきています）
「・・・」

遠くからはサイレンの音。

嗚呼、この展開どこかであつたような・・・。
でも結界を張っていたとはいえ派手にやったからね。
証拠に所々半壊したり、全壊したり・・・。

「と、桃香ちゃん・・・」

うるうるとうろたえた目でこっちを見てくるなのはちゃん。
とりあえず、

「じつ、ごめんなさい!!」
「でも逃げろ!!」

フェレットさんを抱えて、二人でその場を離脱です。

第十二話なのはちゃん、初の魔法使用（後書き）

今回桃香が使った技は某深淵物語の某陰険眼鏡大佐の技です。
だって、わたしの中で槍といたら彼ですもん！！
それではこの辺で、次回もお楽しみに^^ノシ

第十三話ユーノ（前書き）

高町家はみんな魔法のことを知っているんですが……。
自分未熟なもので、皆さんに伝わっているかどうか心配です。
さらに今回は短い上に内容が薄い……。すみません；
そんな十三話、どうぞ。

3 / 19 : 修正

第十三話 ユーノ

「はぁーっ・・・・・・・・ふぅーっ・・・・・・・・」

現場から逃げ出して、とある公園に逃げ込みました。

4年前を思い出して思わず苦笑い。

なのはちゃんも相当きつそうだ。

「はぁー・・・・・・・・はぁー・・・・・・・・ここまでくれば・・・・・・・・」

「うん、とりあえずちょっと休憩しよ？」

「分かった」

所々ぼかしてもだいたい内容が通じるのは、やっぱり一緒にいるからかな？

あ、フェレットさんが起きた。

「う・・・・・・・・あ、お二人とも・・・・・・・・あの、先ほどはありがとうございました、お陰で残りも魔力を全部治療にまわせました」

そういつてお辞儀をするフェレットさん。

でも、自分で包帯を解くなんて、器用だなあ。

「いいよ、元はといえば君が呼んだから駆けつけることが出来たんだよ？」

「そうだよ、無事でよかった」

「・・・・・・・・はい、本当にありがとございました」

あの念話が届いてなかったら、フェレットさんも終わってただろうね。

ああ、そうだ。

「フェレットさんの名前は？」

「あ、まだ名乗っていませんでしたね、ユーノ・スクライアです、スクライアが部族名なので、ユーノが名前ですね」

ユーノ……か……うん。

「いい名前だね」

「どうも……」

さてと、そろそろ疲れも取れてきたし……。これ以上外にいたら恭也さん達に心配させちゃう。

「なのはちゃん、そろそろ……」

「そだね、ユーノくんもいつしよに帰る？」

「はい」

あ、そうだ。

「敬語はいらないよ？ユーノくん」

「え、でも……」

「それわたしも思ってた、多分これから一緒に暮らすんだから、いらないと思うなあ」

わたしとなのはちゃんの言葉が予想外だったのか、困惑しているフェレット改め、ユーノくん。

……小動物って見てるだけで癒されるよね。

（お言葉ですが主、彼は『人間』ですよ？）

（わかってるよ．．．もっ．．．）

そうなんだよね。

魔力が枯渴しかけているところから見て、人間よりサイズが小さいフェレットになることにより、魔力の消費を抑えているんだろうね。

「．．．うん、わかった、よろしく．．．えっと．．．」

「あ、まだ自己紹介してなかったね？わたしは高町なのは、小学3年生」

「亜桜桃香、小学6年生」

「なのは、とうか、よろしく」

side ???

「おろ？ 結界消えた？ ついでにジュエルシードも」

（消えたな、ついでに中にいた連中は移動したようだ・・・追うか？ マスター）

「うんやー、追わんでいいやろ、『介入』はまだ早いと思う」

しかし、本当に春頃なんだねー原作始まるの。

「介入するにしても、巨木騒動が一番きりがいいと思うんだ、接触は・・・あのでかいにゃんこあたりでいいぞ」

（ふうむ・・・ではそれまでどうする気だ？）

「遠くから見守るw？」

（・・・そうか）

あ、いまため息つきやがったなこの野郎。

「まあ、ピンチになったら手助けくらいはするよ？」

（・・・手助けだけか？）

「『困難はそれを乗り越えられる人だけにやってくる』！ あたしが前世で呼んだ本にでてた一文だよww」

（なるほど・・・一理あるな）

「けど、流石に死にそうだったら助けるよ」

（わかった）

そうそう、ついでに言つと今まで会話しながら素振りやってたのよねw

ちようどご飯も出来たみたいだし、家にはいろっかな？

「おねーちゃん？ご飯出来たよ」

「おーらい、今行く」

s i d e ? ? ?

む．．．．．。

（あらら、結界消えたね？）

（そうですね、同時に中にいた者たちも移動したようです）
「そうか……」

あれから数ヶ月。

なんとかこの体にも慣れてきた。

今は住んでいるマンションの一室で、マルチタスクを駆使し剣技の練習をしている。

（それにしても、さすが武家出身って奴？一般人から見てもいい太刀筋してんじゃない）

「前世でもこちらでも鍛錬は欠かさなかったからな、自分で言うのもなんだが、それ相応の実力がついたのだろう」

（あとは実践あるのみですね、お嬢様たちが合流するのは再来週辺りでしょう？）

「ああそうだ、だから……この世界にも探索者がいるなら、邪魔させるわけにはいかない」

（まあ、もしも敵わなくても俺等には^{最悪}最高にして^{最強}最凶の『切り札』があるからね）

（それに私もいます）

「分かっている」

つと……電話か。

「もしもし？……ああ、お前か……元気だよ」

f r e e s i d e

あれから無事家に帰ったのはと桃香、そしてユーノ。
現在ユーノの事情を説明しおえた後である。

「でも驚いたわ、魔法なんて本当にあるのね」

桃子は興味心身でユーノを見つめている。

「しかし……いいのかいなのは？危ない目にあっただらう？」

士郎と桃子は不安そうになのはを見つめる。

特に士郎は、自分と同じ目にあって欲しくないのだらう。

「……うん、でもユーノくん困ってるんだよ？ほっておけない」

「桃香ちゃんばかり戦うわけにもいけないし……」となのは続けた。

「すみません、ぼくがもつとしっかりしてたら……」

ユーノが申し訳なさそうにうな垂れた。

「でも、ご近所にそんな危険な代物が落ちているというものやっかいだね」

「桃香は封印できないのか？」

恭也は素朴な疑問を桃香にぶつけたが、当の本人は遠い目であさつての方向を見ながら。

「すっかり術式組むのを忘れてたんです……少なくともご近所とかで魔法関係の争いごとがないだろうからいらないだろうなーっと思っただけですが……」

俯き、自嘲的な笑みを浮かべてうふふと笑う桃香を見て、一同は苦笑いをするしかなかった。

「とりあえず、今夜はもう遅いし、詳しい事情は明日……でいいかな？ユーノくん」

士郎の言うとおり、時計は遅い時間を指していた。確認をとられたユーノは「はい」と答えた承する。

「じゃあ、みんな、おやすみなさい」

s i d e ? ? ?

「でも21個だっけ？ジュエルシード、全部をたった数ヶ月で集めるのって大変そうじゃない？」

（だが彼女達は実際にやってのけている、更に、幾度もぶつかりながら・・・だ）

「うひえー・・・怖いね、女の子って」

（マスターも女だろう）

「だーもー！いいだしよー、同じ女でも怖いって思うことあるのよ」

（・・・・・・はあ・・・・・・で？どうするんだ？偽名を使うの
だろう）

「そだねー・・・・・・何がいいか・・・・・・あ・・・・・・」

（思いついたのか？）

「おつよ！あのさ・・・・・・」

第十三話 ユーノ（後書き）

『困難はそれを乗り越えられる人だけにやってくる』 実際にわたしが持っている本にのっていた一文です。

すごく励まされたので、これに使ってみました^^；

祝！8万8千hit！！あの日、あの時、あの飛鳥（前書き）

数字が中途半端だって？

いいんだよ！細かいことは！！

追記：この話は、飛鳥が使い魔たちと契約した直後のお話です。

あと、使い魔のうち一人を喋らせることが出来なかった・・・。

r
z

祝！8万8千hit！！あの日、あの時、あの飛鳥

「さてと、突然だけどあたしがしゃべるのが久しぶりなのは気のせいかにゃ？」

（マスター、何の話を？）

「ん？気にしちゃダメよ」

（つとに分かん女だ・・・）

どーも、すっかりでモンハンの世界に飛んできちゃった一条飛鳥D E A S H

さて、使い魔達の空腹を満たすために、さっき見つけた村についた・・・はいいけどさ。

「な〜んか皆さんお疲れ〜って感じ？」

「えっと・・・人間のことは正直よく分からないんですけど、たしかにみんなちよつと元気が無いです」

おどおどした感じであたしに話しかけてきたのは契約した使い魔の一人、リオレイア亜種―（つーより、桜レイアっていったら分かる？）の、ヒノコが返事をしてくれた。

「所々壊れているし・・・俺たちと同じモンスターが何かに襲われた・・・？」

考察するようにそういったのは、リオレウス希少種―（まあこつちも銀レウスっていいかい）のホムラ。

ちなみにホムラとヒノコは双子の兄弟、ホムラがお兄さんでヒノコが妹（らしい）。

「・・・・・・・・」

「ん？どうしたよ？」

「・・・・・・・・あっち、人」

あたしの服のすそを黙って引つ張り、人の存在を覚えてくれたのは、ナルガクルガの暁。

促された方向を見ると、たしかに人がいた。

鉱石と見受けられるでかい岩の隣に猫と一緒におばあちゃんが腰掛けています。

「えと？こんにちは」

とりあえず、そのおばあちゃんとコンタクトをとってみることに。

「おんや？めずらしいねえ、客人かい？」

「まあそんなもんです・・・・・・・・単刀直入みたいで悪いんですけど・・・・何があつたんすか？なんかみんな元気がないですし」

「ヨイヨイ、主等の目にもそう映るかい・・・・・・・・」

おばあちゃんは一息ついて、

「実はね、盗賊たちに襲われているんだよ」

「・・・・・・・・現在進行形ってことは、なんか食料とか、金品とか要求されているんですか？」

「察しがいいお嬢さんだ、その通りだニヤ」

突然おばあちゃんの隣にいる猫が喋ったのでちよつと驚いた。

まあそうだよな、ここはモンハンの世界なんだから、猫が喋って当然だし。

「この村ハンターはいないんすか？まさか盗賊に……」

「ニヤッフッフ……それはニヤいぞ、ハンター殿は大都市の遠征に向かつておる、しっておるじやろう？シェンガオレンだニヤ」

「ああ、そういうこと……つまりハンターがいない隙を狙って、襲われたと」

おばあちゃんと猫が一緒にうなづく。

こりゃ……ちょっと大変そうねえ。

「ちなみにわたしの考えは、奴等の最終目的はこのポケ村のシンボル、大マカライトではニヤいかと思っておるニヤ」

「大マカライトって……そこのでっかいそれ？」

「そうニヤ」

（自然の産物というやつか……立派だな）

なるほど

なる、おおかた食料やら金品やらを根こそぎ持って行って、村のほうの『貢物』が無くなってからこのでかいマカライトを要求するって魂胆ね。

「たく……これだから外道は……さて、どうあの世に送ってやるか……？」

「それで、主はいつたい何のようでここに？」

「ん？ああ、ちよつとこいつらの住居探し？」

「こいつら……？ああその四人か」

「ん、そうで……」

おりよ？遠くから村民？が来たにや。

てか、かなりあわてて……。

「オババ！大変だ、奴等が来た！！」

「！！客人、はやく隠れるニヤ！」

え、隠れるって……。

「どこに？」

「ハンターどの家を使うといい！奴等には無人と伝えてあるから、気付かないはずニヤ！」

「おーらい！ほら！いくよ！！」

四人をせかして、教えられた家に飛び込んだ。

窓からそつとのぞくと、明らかに風貌とガラの悪いあんちゃん達が村人達を前に威張り散らしてるのが見えた。

………嗚呼、はっ倒したい、はっ倒したい、はっ倒したい
いいいい！！

あー！奴等いつちゃん腹立つのさ！！弱者は強者に絶対服従とか
考えているゴミどもめええええ！！

「えと………ある……じ……さま？」

「うい？………ああ、ごめんごめん、どうしたよ？」

「さついがこわいです、あるじさま」

(………いわれたな)

ウルウル目&上目遣いで小刻みに震えながら、あたしに訴えてくる
ヒノコ。

………ごめん、今一瞬キュンと来た。

「ははは、わるいにや、ちょっと考えことしてたから………」

「そうですか………」

ふとみると、他の子も若干震えながらこつちをみてる。

うーむ・・・今後思考に浸るときは気をつけなきゃね；

「っは！ところでおめーら、そろそろ貢物がなくなってきたんじゃないの？」

「だったら、ほら、あのでけえマカライト鉱石をこっちによこしな！」

・・・・・・・・・・嗚呼、やっぱりむかつく。

「な、なめるな！こっちにはまだまだ食料があるぞ！」

「金目のものとられた上に、村の誇りまで盗っていくつもりか！？」

「ふざけんな！」

そーだそーだ！もつと言ってやれ！！

にしてもこの村の人たくましいなあ、普通なら何もかも諦めそうだけど。

「じゃあ明日の午後までに、これの倍の食料と金目のモン用意しな」「でなきゃ、あの大マカライト、もっていくからなあ？げひゃひゃひゃひゃー！！」

滅茶苦茶下品な笑いをして、ガラの悪いあんちゃん達は去っていった。

・・・・・・・・・・うし、じゃあここは一つ。

「おねーさんが一肌脱ぎますかね」

「ふむう．．．．．異世界に魔法ねえ．．．．．」

「この子ら、本当にあのモンスターなんだね」

「ねえねえ遊ばー!!」

現在、集会場で村民の皆様と会議中です。

ええ、お察しの通り、魔法のこととかお話しましたが、何か？

いつとくけど、あたしはやてと最善の結果の為にプライドでも、名誉でも、なんでも捨てられるよーw

それを言ったら、暗羅がすごい呆れてたけどwww

ちなみに会議の過程で聞いた話だが、運よく村を出ていた人々には鳩を飛ばして、事が落ち着くまで戻ってこないよう伝えたらしい。

もちろんハンターさんにも飛ばしたけど、盗賊たちに目の前で撃ち落とされたとか。

何とか奴等を欺いて、ハンターさん宛の手紙を届けた。

・・・・・・・・はいいけど、そのハンターさんからの返事も例のごとく目の前で撃ち落され、ハンターさんがいつ帰ってくるか分からずじまいになってしまったそう。

ハンターに頼れないと分かれば、自分達で歯向かうしかない。

そういうことで、村人総出で戦ったそうだが・・・・・・・・数で押されてしまい、老若男女問わない幾人かの人々が囚われたそう。

「さて、本題の盗賊討伐じゃが・・・・・・・・本当にぬし一人で大丈夫か？」

「そのことならご心配なく」

（むしろ盗賊たちのほうを心配したがいいがな）

今のあたしはヘラヘラと笑っているんだろうな。

困ったのと、本気で心配しているのが混ざった顔であたしを見てくる村民の皆さん。

その顔が喜びに変わるのが、今から楽しみだわｗｗ

さて、時間は飛んで約束の日の午後。

村の入口で待っているんだけど・・・遅いなあ？

自分で呼びつけといていい度胸だ。

社長出勤ってやつ？・・・・・・・・まあ、その社長ぶりも今日で終わらせてやるけど。

「ああん？なんだあ？食料や金品がないどころかガキ一人かよ」

「あいつら、まだ抵抗できると思ってんのかあ？だとしたら人選ミスだなあ！！」

昨日とまったく変わらない下品な声で笑うガラの悪いあんちゃん達。とりあえず、

「おっさん等こそ、まだ威張り散らせると思ってたんの？」

「当たり前だろ、弱者は強者に服従するのが当たり前だからな！」

嗚呼、こりやもうゴミ通り越してカスだな。

つか今日だけで何回『嗚呼』を使った？

・・・・まあそれだけこいつらに呆れたってことかな？

「器の小さい奴等・・・・・・・・」

「ああ？いまなんつったガキ！」

「おろ？聞こえてたの？わあーすっげーいたぶるしか能が無いあんたらでも耳はいいんだね！！」

わざと無邪氣にあんちゃん二人を貶す。

あんちゃん二人はぶち切れ寸前らしい、一方なんて、必死にこめかみを押さえている。

「つぐ……ガキ、結局お前は何がしたい？話合いなら受けないからな」

「馬鹿だなあ、お話するわけないじゃん！」

にかにか笑いながら、あんちゃん等を更に挑発する。
よし、そろそろ………制裁を下すか。

「『和平の使者なら槍は持たない』」

「どういう意味だ？」と相手が言い切る前に、二人とも片腕ずつ斬り落とした。

「や、小話のオチなんだけどさww」

再び一閃、今度は片足をそれぞれ斬り落とす。

「かなーりしつくりくるだしょ？」

刀を、一方のあんちゃんの喉に向けた。

「これは質問じゃない、拷問だ、貴様等に拒否権も無ければ人権も無いと思え」

あんちゃん等に拷mゲフンゲフン・・・失礼、O H A N A
S I して得た情報を元に、盗賊達のアジトに行くけど・・・
。。

うん、デザインのにもいかにもって感じで典型的すぎて、どうかアホくさい。

つといかんいかん……気を取り直して……。

「トレースオン
具象開始、
ソードパラダイス
剣の祭典」

どこのFATEと呪文が一緒だって？ 読み方

いいじゃない！！ぶつちやけよく知らないけど、弓兵とか剣士とか、
かっこいいじゃない！！

あたしの周りに、具象化した剣たちを回転させて、先へ進む。

「な、なんだてmぐぎゃああああああ」

「お前何な
んあああああ」

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない」

い」

「俺は最強dがああああああああ」

面白いくらいに刃に倒れていく盗賊たち。

一部ふざけた事抜かしてる奴がいたけど、瞬殺。

・・・ぐふふwww

「ざまーみろ！」

・・・あ？お前歪んでいるよって？

歪み上等！！歪まなきゃ護れないものだってあるんだ！！

「円閃牙あ！」

「ぎゃぐつ」

「瞬迅剣！」

「ぐつはあ！」

「死ねやあ！！！」

「そつちがね！襲爪雷斬！！」

「がはあ！」

何時間奴等と戦っていたんだろうか。

なんか、どさくさにまぎれて盗賊の頭も殺っちゃったみたいで。

何人かが命乞いをしながら逃げていった。

・・・あ。

「人質の監禁場所、聞いてねーや」

あのあと、何とか人質を解放して、ポツケ村に戻った時だった。
村のほうは何やら騒がしかったんだ。

何かなっと思って見てみると、人ごみが出来ている。

その中心にいる人物をみた人質の皆さんが、顔を明るくした。

「シグナム!!」

・・・・・・・・はい？

今なんつったこの人ら？

・・・・・・・・『シグナム』ウ！？

「あ！みんなあ！！無事だったんだね！？よかったあゝ!!」

そういつて人ごみの中心から飛び出してきたのは、見た目20代前半の女の人。

人質達に飛びついて、駆けつけるのが遅れてしまったことの謝罪や、無事でよかったという喜びを思いつきり表現している。

つか、この人の容姿、まさに『リリカルなのは』のシグナムなんだけど；

違うのはタレ目な所と、性格が厳しくなくて、なんというか……・ほわわんとした雰囲気をかもし出している所。

人々の反応を見る限り、どうもこの人がこの村のハンターさんみたい。

……つか、この人見た目的にハンターらしくないなあ……。

モンハンの主人公つてみんなたくまし過ぎる体格してるけど、このシグナムさんの場合、そんなこと無くて。

むしろハンターとして大丈夫なのかって思っくらいほっそりしてる。

「あの、あなたがこの人たちを……？」

「んー？まあそうなるのかな？」

するとシグナムさんは顔を思いつきり明るくして、

「ありがとう！！お陰でみんな助かったよ！！」

あわわわわわわ……！！

ちょ………待つ………腕振り回さないでええええええええええええ。

「あ、ごめんね？嬉しくてつい………」

しよげるハンターさんと、それを見て笑う村民の皆さん。

………こういうのを『絆』っていうのかねえ？

見てるこっちも暖かくなるよ。

ちなみにこの日の夜はドンチャン騒ぎで、どうやっても帰れそうにありませんでした。

「それじゃあ、この子等お願いしますね」

「うん！任せて！」

結局一泊しちゃいました。

帰ったら、はやてに事情説明しなきゃだなあ……。

……ん？上の会話で誰に何をお願いしたんだって？

決まってるじゃん、シグナムさんに使い魔達のお世話を頼んだんだよ。

月一で使い魔達の様子を見に来ることを条件に、承諾してもらえました。

使い魔四人もそれで納得してくれて、今じゃすっかりシグナムさんとこの料理ネコと仲良しに。

………ネコと戯れるちっちゃい子………うん、
萌え。

よし、

「じゃあわたしはそろそろ……」

「あ、そうだね、妹さんが待っているんだっけ？」

「はい、一泊しちゃったし、いい加減心配してると思うので」

一礼して、村をあとにする。

しばらく行って、振り返ると、村の人たちが手を振ってくれていた
ので、振り返した。

それから、転移してきたポイントにきた途端。

胃の中のものが逆流してきた。

舌に酸味を感じさせながら、口角からあふれ出す。

（おい、マスター！？どうした！！？）

「がふっ・・・・・・・・ごほごほっ・・・・・・・・ぶえっ・・・・・・・・」

今更かよ．．．．．人殺しに対する拒絶反応。

胃の中がからっぽになるまで、吐き続けた。

今思えば、使い魔達を助けた瞬間から、あたしは『業』を背負ったんだ。

・ ・ ・ ・ ・ 上等、こちらら親を亡くし身寄りを無くし、妹と二人で生きると決めたときから、屍を背負う覚悟は出来てらあ ・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ ! ! ! ! !

「ぐふっ・・・くっ・・・ふふふふ」

(マ……マスター……?)

暗羅があたしに戸惑っているようが、かまうもんか……。

[illegible]

「！」

妹^{はな}に拒絶されようと……この身一つ……。
護るためだけに生きてやる！！

祝！8万8千hit！！あの日、あの時、あの飛鳥（後書き）

．．．．．書きあがったのはいいですけど。

歪んでるなあ

あるえー？途中まではまともだったはずなのににゃー（）

まあこんなですが、今までご愛読してくださった皆さんに感謝です！

これからも『とある姉の原作破壊（仮）』をよろしく願います。

それでは^^ノシ

第十四話遠回りな遭遇（前書き）

いつもよりグダグダになってしまった気が・・・。
よろしければどうぞ。

第十四話遠回りな遭遇

side 桃香

「お、おはよう・・・」

翌朝、なのはちゃんの部屋から出てきたユーノくんが、道場に入ってきた。

わたしは素振りを中断させて、返事をする。

昨日私含めた高町家のみんなから「敬語は不要！」と言われたので、何とか私語（俗にいうタメ口）で話そうとしているみたいけど・・・

・・・どうもぎこちない；

しかたないのかな？敬語はいらないって言われても、知り合ったのはつい前日だからね。

「おはようユーノくん、なのはちゃんは？」

「まだ寝てる」

「そっか」と返して、素振りを再会させる。

「見てていい？」

「いいよ」

今日は体の回転を重視して、槍を振る。

切っ先を下げては急に上へ突き上げ、柄尻で後ろをついては素早く切っ先を突き出す。

「・・・慣れてるんだね？」

「うん、前々からちよこちよこやってるから」

ユ一ノくんと会話を交わしてから、一旦手を止める。

ここからが早朝訓練の山場！

目を閉じて、ただひたすら集中・・・。

ちなみにどれくらい集中しているかって言うと、

「・・・・・・・・桃香？」

「・・・・・・・・」

周りの音が聞こえなくなるくらい。

前にそれで遅刻しかけたことがあったんだよねえ・・・・。

あの時は大変だった。

「・・・・・・・・桃・・・」

「集中している今は話しかけても反応しないぞ？」

「あ、恭也さん・・・・」

別にわたしの能力に（全然じゃないけど）集中が必要なわけじゃない。

ただ、これから戦う機会が増えるというのなら、少なからず集中とそれにより生み出される『無心』が必要になってくる。

だから、少しでもその集中に慣れさせるために、毎朝こつやつて訓練しているんだ。

「・・・・・・・・いいですか？」

「・・・・・・・・なんだ？」

「桃香から出てくるプレッシャーが、さっきより半端無くなっているんですが」

「大丈夫、いつもこうだ」

よし、ここでいいかな？

思いつきり息を吸い込んで、吐き出す。

集中を切る時は、いつもこうやる・・・・・・・・って。

「恭也さんいつからそこに!？」

「お前が集中してる時」

集中を終わらせたあとって本当に周りが見えないから、こんな風に集中前にいなかった人が突然あられるとかなり驚いちゃうんだよね；

前からよくあることだからそろそろ慣れてほしいよわたし・・・・。

「ところで桃香」

「はい？」

「ユーノがお前のプレッシャーで死にそうなんだが」

「え？あ!？ちょっと!？ユーノくん!?!」

side なのは

「そんなことが・・・」

「うん、ユーノくんが悪いことしちゃった」

登校中に、今朝ユーノくんが倒れていた理由を聞いてみて、自虐的に笑いながらあさつての方向を見る桃香ちゃん。
実はわたしも一度、桃香ちゃんが集中してる時に話しかけたことがあったんだけど・・・。

「・・・・・・・・うう・・・・・・・・」

お、思い出しちゃった・・・。

「あ、そろそろバス停だよ!!」

「ほんとだ、行こう?」

「う、うん!」

桃香ちゃんと一緒に走って、バスに乗り込む。

そのままアリサちゃんたちと合流して、学校へ向かいました。

「《えっと、二人ともちょっといいかな?》」

授業を受けていたら、突然ユーノくんから念話が来た。
びつくりして声を出しかけたけど、何とか飲み込む。

「《わたしは大丈夫だけど・・・桃香ちゃんは?》」

「《平気、それで?何か用でも?》」

桃香ちゃんにもちゃんと確認してから、ユーノくんが話し出すのを待つ。

「《うん、昨日の・・・ジュエルシードのことで、こっちの世界にきてしまった経緯を二人に話そうかなって・・・》」

「《そういえば、昨日バタバタしてて結局聞いてないもんね》」

「《そうだったねえ・・・》」

思わず苦笑いしてしまうわたし。

それは桃香ちゃんも同じみたいで・・・。

顔が見えなくても、苦笑いしているのが手に取るように分かるの。

「《とりあえず、説明に入るよ》」

「《うん》」

「《分かりました》」

ユーノくんは一呼吸おいてから。

「《始まりは、ぼくがとある遺跡でジュエルシードを発掘したこと
からなんだ、ぼくの一族・・・スクライアは遺跡発掘を生業にして
いるからね・・・それで、護送艦を手配して、ジュエルシード
を運んでもらったんだけど、その船が渡航中に何らかの事故にあ
って撃沈、21あったジュエルシードが全部ちらばってしまったん
だ》」

「《その先はだいたいわかった、その21個全てがこの世界に来て
しまった、責任を感じたユーノくんも独自にジュエルシードを回収
するためにここに来た・・・と》」

「《・・・うん》」

あれ？でもその話だと・・・。

「《ユーノくんは発掘しただけで、責任はないと思うんだけど・・・
？》」

「《でもっ、あれは願いを歪んだ形で叶えてしまうし、それ自体に
魔力を秘めているから、エネルギーを流し込まれたらどうなるか・
・それになのはが言ったように、発掘したのはぼくだ、ぼくがやら
なきゃ・・・》」

ユーノくんの必死な感じが伝わってきて、思わずくすつと笑ってしまふ。

あ、もちろん馬鹿にしていると、そんなんじゃないからね！？
ただ、素直にまじめなんだなっと思ったからなんだよ！？

「《まじめなんだね、ユーノくん》」

「《ほんとに、だけど何でも一人でやろうと思っちゃダメだよ？》」

そのことを伝えると、桃香ちゃんも賛成してくれた。
ついでに一人でやろうとしたユーノくんを嗜める。

「《だけど・・・っ！！》」

「《じゃあまた一人でジュエルシードと戦って、なのはちゃんに拾われたときみたいに倒れてる？》」

「《っ、それは・・・》」

だまりくんじゃったユーノくん。
でも・・・

「《桃香ちゃん、いくらなんでもその言い方は・・・》」

「《・・・そうだね、ごめん》」

「《しょうがないよ、ぼくの自業自得なんだから》」

むむっ、急に暗くなっちゃったの・・・。

「《まあ、具体的な対策は帰ってからにしょ？今は授業に集中！》」

「《そ、そうだね》」

「《わかったよ、授業中にごめんね、話聞いてくれてありがとう》」

「《こっちこそ！お話してくれてありがとう》」

「《それじゃあ》」

そうやって念話は切れました。

帰り道、桃香ちゃんと歩いていたら、ジュエルシードの反応がでた！
すぐユーノくんと連絡を取り合って現場に向かったの。

「きゃああああああああっ!!」

!?

つて、ええ！？

「っえい！」

何とか飛び退いて避けたけど、倒れちゃって次の行動が取れない。
桃香ちゃんも離れているし、バリアも間に合わない……！
その時、ヒュッと何かが犬に直撃しました。

よく見ると剣みたいなの矢が、犬の肩に刺さっています。

「………
ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

いきなり、矢が爆発しました！
何がなんだか分からないけど今の内に起動を……！

『Stundby ready / setup』

突然レイジングハートが光って、わたしの体にバリアジャケットが、
手には杖が出てきた。

起動したんだろうけど……パスワードは要らなかったのかな？

「すごい、起動パスなしで………」

ユーノくんが驚いているみたいだけど、今は気にしちゃだめ！
早く封印しなきゃ！

「リリカルマジカル！」

「汝は我が仇、怨霊の体にて束縛せん！『バインドゴースト』！」

桃香ちゃんが犬をバインドで固定してくれました。

よし！

「封印すべきは忌まわしき器！ジュエルシード、封印！！」

昨日と同じ光の帯が犬を包んで、ジュエルシードを取り出します。
それをレイジングハートの中に入れると、犬は元に戻りました。

それにしても、こんなちっちゃい犬がジュエルシードに触れただけであんなになるなんて…………。

早く全部集めなきゃ！

……………それにしても。

「さっきの爆発した矢って、桃香ちゃん？」

「違うよ、多分誰かが手伝ってくれたんだと思うけど…………」

一緒に周りを見渡すけど、そんな人は誰もいなかった。
何だったんだろうなあ…………？

side 桃香

（お気づきですか？主）

（うん、もう一人・・・だね）

藍桜に答えてから、空を見る。

目に魔力を込めてもだいたいの特徴しかつかめないくらいの長距離に、その人はいた。

かなり背が高いから、多分中学生・・・？

手には矢を放ったと思われる弓が握られている。

「桃香ちゃん？」

「どうしたの？」

「ん？ああ、ごめん、帰ろっか？」

「うん！」

なのはちゃんを助けてくれたから、一応協力してくれるのかな？

二人に気付かれないように、その人にお辞儀した。

・・・見えてるといいけど；

side ???

どーも、お辞儀がちゃんと見えてたあたしですっ（キラリンにしても・・・）。

「へえ、こんな離れてるのに見えてるんだ……おどろき桃の木山椒の木ってね」

（口ではそういつているが、内心なんとも思っていないだろう）

「さすが暗羅！せいかーい！」

ライブラリ
記憶図書館を持っているのなら、鷹の目を持ってもおかしくない

しね〜。

にしても、

「奴さん、面白いエモノ持ってるね〜ww」

（一々振り上げて振り下ろす剣と違って槍は突き出すだけだからな、おおかた、武術に自身がなかったから選んだんだろう）

「まあ、戦国時代の農民も、刀じゃなくて槍を使ってたらしいからね〜」

時代劇でよくある『雑魚同士のチャンバラ』ってのは、間違いで実際は『雑魚同士の突き合い』なんだよね。

まあ、あたしは剣道場で『見てた』からだいたい剣術は身につけてるんだけど。

「さてと、じゃあそろそろ帰ろうかね」

（だな、そうだマスター、今日はスーパ―の特売だぞ？）

「まじで！？やっべ余計はやく帰らないとー！」

第十四話遠回りな遭遇（後書き）

という訳で、『あいつ』と桃香を遠まわし（？）に遭遇させてみましたw

いつもご愛読ありがとうございます。
次回もお楽しみに。

第十五話本格的な遭遇、あと巨木（前書き）

さて、今回はちょっと早いですが『あいつ』と桃香の遭遇です。
どうぞ！

第十五話本格的な遭遇、あと巨木

side ???

やほ、あたしだよッ

今日は妹はなの病院もないから図書館でのんびりしてるぜww

はぁー、それにしても最高だわ図書館。

神話とかの文献もあるから、あたしの武器とか戦術のバリエーションがかなり増えるしww

「にしても・・・平和だにゃー」

（ジュエルシードが出てあいつらがすぐに封印しているしな）

「そうだねえ・・・それにしても、この間あたしにお辞儀してきた奴さんって・・・」

（ああ、記憶ライブラリ図書館の適合者だな）

「やっぱし？ああ、でもなのはちゃんとここにいたから味方って見ていいのかもね？」

（いまはそう考えるのが妥当だろう）

「あ、あの一」

ん？

「おじょうちゃんだれよ？」

「あ、ごめんなさい、わたし月村すずかっています」

「おーらい、すずかちゃんね、すずちゃんって呼んでヨロシ？」

「はい！」

まあ知ってるけどwww

ここはあえて知らぬ存ぜぬを決め込みまそww

「えと、よくここにこられてますよね？確か・・・妹さんといっしょに！」

「うんきてるよw今日は残念ながら妹はいないけど」

「そう・・・みたいですわね」

「すずちゃんはいくつよ？見たところうちのこと同い年っぽいけど？」

「9歳です！」

「ああ、やっぱり同い年かあwはやてとw」

それからすずちゃんと話し込んでたら、もう帰る時間になってた。うーん、思ったより武器とか能力とかはとれなかったけどいいかにや？

「あ、そうだ！明日、友達のお父さんが監督をやっているサッカーチームの試合があるんですけど、よかつたらどうですか？」

「・・・お父さんがサッカー（の監督）やってるこの子の友達つつつたら・・・」

おおー！巨木騒動すか！

上手くいけばあの子ともエンカウトできるわ。

「うん、いいんでないの？都合がよかつたら、妹も呼んでくるよ」

「ありがとうございます！それじゃあまた明日・・・」

「あ、待った待った！まだ自己紹介してなかったわね？」

明日あの子等とエンカウトするから・・・偽名使っちゃえ。

「おねーさんの名前はユーリ・ローウェル、よろしく！」

side 桃香

今日は土郎さんが監督をしているサッカーチームの試合。
ちようどいいので、ここ最近日課になっていたジュエルシード探し
もお休み。

特になのはちゃんには思いっきり羽を伸ばしてもらわなきゃね！

「うにゃ・・・おはよう、桃香ちゃん」

「おはようおねぼっさん、朝ごはんできてるからちやちやっ食べ
ちゃって」

「うん・・・」

寝ぼけ眼でおりてきたなのはちゃんに、朝ごはんを出す。

ちなみに土郎さんはチームの最終調整と試合相手への挨拶に、桃子
さんや恭也さんはその打ち上げで翠屋が午前中貸切になるため、そ
の準備に行つてて、もう家にはいない。

（しかし、土郎氏のチームはそれなりに強いのでしょうか？）

(うん、この辺じゃ結構有名みたい)

藍桜と会話を交わして、手早く食器を洗う。
なのはちゃんも食べ終わったみたいだ。

寝ぼけ眼もいくらか起きていて、食器を流し台に置いた後、「着替えてくるね」と告げて、ぱたぱたと上に上がっていった。
ほどなくして、今度はユーノくんがおりてくる。

「おはようユーノくん、なのはちゃんは？」

「まだ着替えてる……」

若干顔が赤いような……ああ、なるほど。

「人間だつて言っていないから、本人がなのはちゃん気にせず着替えだしたと」

「せ、正解、っていうか、ふたりに見せてなかったっけ？人間の姿・
……」

「全然」

「え、でもじゃあどうやって……」

ユーノくんが言い切る前に続ける。

「分かる人には分かるの、ただこの世界にはそう言う人は少なくて、
わたしがたまたまそんな人間の一人だっただけ」

「……うーん……」

ユーノくんは頭を抱え込んでる。

「……ちよつと難しかったかな？」

「な、なんとなく分かった……気がする」

「例えが難しかったね、ごめん」

二人で苦笑いをしていると、着替えを済ませたなのはちゃんがおりにきた。

ちようどお皿洗いも終わったし、

「わたしも準備するから、二人は先に玄関にいつてて」

「うん！」

「わかったよ」

アリサちゃんたちと待ち合わせている、河川敷に来た。
もうアリサちゃんとすずかちゃんは来ているみたいで、こっちを気
付いてから大きく手を振っている。

「待たせてごめんね、アリサちゃん、すずかちゃん」

真つ先になのはちゃんが二人のところに駆け寄る。

わたしはすこし遅れてから、なのはちゃんたちの輪に入った。
ちなみにユーノくんはわたしの肩に乗っている。

「大丈夫よ」

「わたし達も、今来たんだ」

「そうなんだ」

するとすずかちゃんは思い出したように手を叩いて。

「そうそう！今日あと二人来るんだ」

「あと二人？誰よ？」

「昨日図書館で話した人と、その妹さん！」

・・・何だろう、今一瞬何かを感じた・・・。

「昨日会ったばかりなの？大丈夫？」

「うん、前からその人たちを見かけていて、昨日やっとお話できたの！」

「そっかあ、楽しみだね！」

すると、少し離れたところから誰かが来るのが見えた。

一人は車椅子に座っている、なのはちゃんと同じ年くらいの女の子。
もう一人は・・・っ！！？

（この間の・・・！？）

あの時はぼんやりとしか見えなかったけど、あのダークグレーのシ
ョートヘアは間違いない。

でもなんであの人がここに!?

「すーずちゃん!来たあ」

「あ、ユーリさん!こっちです!」

何も知らないすずかちゃんは、無邪気に手を振って、その人を『ユ
ーリ』と呼ぶ。

ユーリさんはにかと笑って、

「どうも!あたしはユーリ・ローウェル、年は12歳」

「ユーリの妹の八神はやていいます」

「アリサ・バニングスよ、よろしく」

「こんにちは!ユーリさん!」

アリサちゃんやすずかちゃんと握手をかわすユーリさん。

「ひらがなではやて、変な名前やろ?」

「そんなことないよ!」

「ええ、十分可愛いわ!」

「ほんま!?ありがとう!」

きやつきやとはしゃぐなのはちゃん達。

それを少し離れたところから見ていたわたしとユーリさん。
なんとなく……気まずいです。

「そーいや、そちらさんも初めましてだね?ユーリ・ローウェルだ
よーんw」

「あ、どうも……亜桜桃香です」

わたしもユーリさんと握手を交わした。
その時、

「《この間は大変だったね?》」

「《……!?!……その説はどうも、助けてくれてありがとう》」

「《ん、どーいたしまして》」

ちょうど手を離れた時に、試合が始まった。
それでもわたし達の念話は続く。

「《ところであなたは……》」

「《そだよ、あんたと同じ適合者、管理者は暗羅^{オーナー}つついの、よろしく》」

「《わたしの管理者は藍桜^{オーナー}って言います、こちらこそよろしく》」

翠屋JFCのフォアードが、シュートを決めた。

なのはちゃん達はきゃーきゃー騒いで喜んでいる。

ユーリさんも「ほう?」というだけだったけど、感心はしてたみたい。

「《……えと、助けてくれたって事は味方^{オーナー}って見ていいですか?》」

「《お好きにどうぞ、でもあたしは近所から『爆弾』が消えれば何でもいいから、もしあんたらに敵対する奴等が現れたらそっちにも味方するんで》」

「《……中立の立場ってことですか》」

「《おうよww》」

なのはちゃんが、はやてちゃんと話している。
おそらく今のゴールについてだろう。

「《さて、あたしらもそろそろ試合観戦する?》」

「《そうですね、今はこちらが有利ですけど・・・どうなることやら》」

「《だね》」

side なのは

今日はすずかちゃんが仲良くなった、ユーリさんと、その妹さんの
はやてちゃんに出会いました!

ユーリさんは気さくで明るい人で、はやてちゃんは関西弁をしゃべ
るちょっとおっとりした子。

二人ともとてもいい人なの!

「そういえばはやてちゃん、学校はどこにいつてるの?」

ちなみに今はみんなで翠屋にきています。

試合結果は翠屋JFCの勝ち!

だからみんな翠屋で打ち上げをしているの!

「あはは、うち学校いつとらんのよ、ほら、足がこんなやから」
「あ……」

もしかして、まずいこと聞いちゃった…？

「ご、ごめん……」

「？何謝つとるん？」

「え、でも……」

「ゆうとくけど、寂しくないよ？」

「そうなの？」

「うん、おねーちゃんがいるから寂しくない」

そうやって、笑うはやてちゃん。

何と言うか……。

「強いんだね」

「おねーちゃんよりは弱いけどな」

その時、今話題にしたユーリさんが桃香ちゃんと一緒に、飲み物が乗ったトレーをもって来た。

「はーいお待たせ」

「ありがとうございます！」

「すみません、わざわざ持ってきてもらって……」

「桃香もありがと」

「全然だいじょぶいよw」

「そうそう、わたし達年長者なんだから」

「それにしても」とアリサちゃんが続けます。

「おつきいですよね、ユーリさん」

「でしょ？わたしも最初は中学生だと思ってたの」

「すずちゃ〜ん？それって遠回りに老け顔だっついてない？」

「そ、そんな！」

「じょーだんよじょーだんwwまあ気が付いたらこの身長だから、
どうにも出来んわ〜」

「……口にはしているのは弱音のはずなのに、口調と顔は笑っているユーリさん……不思議な人だなあ。」

「……」

「？どうしたのなのはちゃん？」

「え？あ、うん何でもない！」

今一瞬ジュエルシードの反応を感じたけど……気のせいだよな？

「《あ、せや！おねーちゃん》」

「《ん〜？何よはやて》」

「《何で偽の名前使うとるん？おねーちゃんは『一条飛鳥』やろ？

》」

「《ああ、それ？簡単だよ〜ほら、あなたの部屋にあるあの本、あれを狙われるわけにも行かないからさ》」

「《ああ〜……何となく分かった、つまりおねーちゃんは『あの子』のためにわざと嘘ついたんやな？》」

「《そゆこと〜wwあとはうっかり住所とかを言っちゃわなければカンペキSA》」

s i d e 飛鳥^{ユトリ}

さて、あの後なのはちゃんたちと別れて、うちに帰ったところ。
今ははやてと一緒にのんびりしている。

「おねーちゃん、お茶いれるな」

「んー、わかった」

そうやって、はやてが台所に向かった時だ。

ズツ・・・・・・・・・・ドオオオン・・・・・・・・・・

轟音が轟いて、地震みたいに家がゆれる。

危つく車椅子から落ちかけたはやてを抱きとめて、窓に駆け寄ると、

「あらら、やっぱり?」

遠くのほう、ビル街の中心辺りに、でかい木が聳え立っていた。

「……にしても、

「でっけえにゃー……」

「何が……うわぁ……」

はやてが隣で口を押さえている。

幸い根っこはまだここまで来てないけど、時間の問題でしょうね。
うし、

「はやて、そういうわけだからちよいといっってくるよ」

「……うん、気をつけてな?」

「はいはいw」

返事しながら、腕を引き寄せて振り払うっ!

「武装っ!」

二階に上がり、

「あーい……」

自分に認識障害をかけて、

「きゃーん……」

窓から飛び出した。

「ふらぁあぁあ

いッ！」

第十五話本格的な遭遇、あと巨木（後書き）

うちのはやてさんはもう念話を使えます

もちろん飛鳥が教えました（今までそういう描写はしていませんでしたが。

さて、次回はVS巨木！

お楽しみに！

第十六話彼女にとっての・・・（前書き）

大変お待たせしました、十六話です。

今回ちよつと重いかも・・・？

追記：9月30日一部修正

第十六話彼女にとっての・・・

side なのは

わたしは今、桃香ちゃんとビルの屋上に立っている。

目の前には、木の根っこに埋もれている街。

・・・わたしの所為だ。

わたしがあの時もっと注意してたら、気のせいだっと思わなかったら、こんなことにはならなかったんだ。

「なのはちゃん」

「あ・・・桃香ちゃん？」

「後悔はあと回し、今はあれを何とかしよう」

・・・うん。

「そうだね、急ごう！」

桃香ちゃんの言うとおりだ。

今はあの木を何とかしないと！

「ユーノくん！この場合どうすればいいの？」

「えと、多分人の願いが原因になっていると思うから、核になっている部分を探し出せばいいと思うんだけど・・・」

「なるほど、ジュエルシードは願いを叶える宝石だからね」

「だけど・・・」

こんな広い中からどうやって・・・。

あ、そうだ！

s i d e 飛鳥^{ユリ}

あちゃー思った以上だね、街中の被害。

「こりゃニュースに取り上げられるww?」

（呑気なことを言ってる場合か? 早くあいつらと合流しなければ...）
「わーってるよw」

さーて、あの子等はっと。

お、はっけーん!

「やーっほー!」

「あ、ユリさん」

「へへー、なーんか大変なことになってんにゃー?」

「すみません、わたしがもっと早く気づいていたら・・・」

「あん、いいっていいってw・・・でだ、なのはちゃんはなに
してるのかな?」

なんかレイジングハート構えたままぴくりとも動かないし・・・。
試しに、顔の目の前で手をひらひらさせてみる。

「……何の反応もない」

「はい、今探してますから」

「うえ？どうやっ……て、ああ、なんとなくわかったよ」

サーチャー飛ばして、探索しているのね。

で、その制御のためにあそこ^{あそこ}まで集中していると。

やることもなさそうなので、その場で待機しておく。

「……！？見つけた！！」

「おおー！？」

「ふえ！？にやあっ！？ユーリさん！？」

びっびびびびつくりしたああ……

急に顔を上げないでよなのはちゃん……心臓に悪いじゃない……

「ふい……で？何見つけたのよ？」

「あ、はい！騒ぎの元になっている、ジュエルシードです！」

「おおー！やつたじゃん！」

「どこにあったの？」

するとなのはちゃんは、迷い無く1時の方向を指差して、

「あっち！」

「なるほど？」

「でも距離が……んお？」

何か、向こうの方から茶色っぱいうねうねした何かがつて。

「どう見ても根っこ？」

「だにやゝww」

「笑ってる場合じゃないでしょう！」と突っ込む桃香ちゃん。
でも状況はきちんと分かっているみたいね。
槍で足元を叩いて、魔方陣を展開、詠唱を始めた。

「其は燃え盛る炎、灼熱の君、業火は仇を焼くために、来よ！『イ
フリート』！」

すると桃香ちゃんの背後に・・・何と言つかめちゃめちゃマッス
ルになった全体的に蝙蝠っぽいのが現れた。
多分あれがイフリートなんだろうね。
さて、あたしも・・・。

トレース・オン
「具象、開始」

弓を出現させて、矢をつがえて引き絞る。

「ファイヤーボール！！」
フルンディング・ボルケーノ
「赤原獵犬、炎属性付与」

火球と火矢がちょうどピンポイントに当たって炎上。
連鎖して着弾地点周辺の周囲も萌えて・・・ゲフン失礼『燃えて』
いく。

でもまだ生き残っているのがあるわね。

「あ、あの・・・二人とも大丈夫ですか？」

「ん？べつに？」

「大丈夫、障害物はわたし達に任せて、なのはちゃんは封印の方法
を考えて」

あーもー、空気読まない根っこだなあ！
また来たよ；

「とりあえず、邪魔もんの処理はおねーさんたちにまかせなさい
！」

「そうだよ！というわけでイフリート！」

承知した、主！

イフリートが桃香ちゃんの槍に入っていく。

槍は全体的に緋色に染まり、形はかの三国志の英傑『関羽』の青龍
刀を思わせるものに変更される。

なのはちゃんも腹を決めたみたいね、レイジングハートに命じて、
標準のデバイスモードから、音叉型のシューティングモードに変形
させた。

しかし、

（こういう変形とか、間近でみると興奮するよね？）

（否定はしないが呑気なことをいつてる場合か！？マスター！）

（ぶーぶー！いーじゃんよ、ちよっとくらいわくわくさせて・・・

）

「よつとー！！」

急接近してきた根っこをとっさに取り出した刀で斬る。

直後に今までのよりぶつとい根っこが二本接近してきた。

むー、弓とか刀とかじゃ、ちと骨がおれるサイズね。

まあどうせこつという場合の技もちゃんと身につけてるけど。

「紅蓮・・・」

「炎覇・・・」

どうやらお隣も同じ考えだったみたいね。

あたしは足に、あっちは槍に炎をまわせて、

「蹴撃ッ!!」

「瞬迅槍おッ!!」

叩き付けと鋭い突きが、根っこを灰燼に変化させた。
直後、

「レイジングハート!行って捕まえてきて!」

『All right』

あたしらの脇を、桜色の砲撃が通り過ぎていく。
それはまっすぐジュエルシールドへと伸びていって、遠くの方で閃光を放った。

ほどなくして、桜色に包まれたジュエルシールドがなのはちゃんの手元に来た。

や、間近で見るとこう・・・膨大な魔力と邪悪っぽいオーラをひしひしと感じるね。

こんなんで世界をいくつも滅ぼせるってんのも頷けるにや。

「うし、万事解決だね」

「そうだね、なのはちゃんお疲れ様」

「そんな!二人もすごかったよ!」

「ぼくから見れば、みんなすごいよ」

ん？ああ、そういえばいたね、ユーノくん。

（でもなんで今まで話さなかったのさ？）

答え：作者の実力不足が原因なのさorz
っゲフンゲフン……さてと、

「おねーさんそろそろ帰っていいかにゃ？」

「あ、はい！ユーリさん、今日はありがとうございました」

「うんやゝ別にいいおw？それじゃ、三人も帰り道気をつけてゝ」

お辞儀するなのはちゃんに手を振ってから、あたしはその場をあとにした。

free side

その夜、やはりあの巨木がニュースに取り上げられていた。テレビの中のスタジオでは、専門家や解説者たちが熱い議論を繰り広げている。

（わたしの……せいだ）

ニュースを虚ろな目で見ながら、なのははそう思考する。すると、隣に誰かが座った。

視線を横にずらすと、兄の恭也がいた。

「……………これも、魔法とやらが原因か？」

「……………うん」

拒絶されるのは怖かったが、それ以上に嘘をつくのが嫌だった。だからなのはは静かに肯定する。

「……………お父さんのサッカーチームの子が持ってたの……………それなのにわたし、気のせいだって思い込んで……………もし気づいてたら、こんなことにならなかったよね」

「……………そうかもしれないが、なのははちゃんと解決しただろう？ 桃香も、お前を責めるどころか逆に褒めていた、『探索魔法だけでなく、砲撃魔法も覚えた』って、まるで子供みたいにはしゃいでたぞ？」

恭也の慰めに、少し気が楽になるのは。だが、

『なお、この騒動で負傷者は　人、死亡者は……………』

「
・
・
・
・
・
・
え
？」

なのは思わず立ち上がってしまう。

死亡者

一番見たくない三文字が、画面の下の方にはつきりと表示してあった。

「あ………ああ………つ！！！」

「
・
・
・
・
・
・
・
落ち着けなのは」

はつきりと目を開き、顔に絶望を浮かべるのはの肩を、恭也はしっかりとつかんで、鎮めようとする。

だが、なのはは涙をぽろぽろと流しながら、首を横に振るだけ。いつのまにか、体が大きく震えていた。

「ああ……あああ……あつ……！」

「ちがう、なのは、見るな！！」

恭也は、なのはの目を覆い隠しテレビを消したが、時すでに遅し。すっかり自責の念に駆られたなのはは、呪詛のように『ごめんなさい』を繰り返している。

[illegible]

「なのは！しっかりしろ！！」

騒ぎに気づいた士郎、桃子、美由紀、ユーノ、桃香が、リビングに集まる。

「まさか……なのhちゃん？大丈夫？なのhちゃん？」

事態を理解した桃香は、なのhに駆け寄り、恭也に代わって肩をゆする。

が、なのhは涙をぽろぽろとこぼすだけ、拭おうともしない。

「とう、か、ちゃ……わた、し……っうわあああ
あああああっ!!」

「え、わあっ!？」

突然だった。

なのhは思いっきり桃香を突き飛ばし、走り去る。

その方向は 玄関だ。

「つまつて!なのhちゃん！」

「なのh!!」

桃香含む高町家総出で、なのhの後を追う。

だが一行が玄関についたころには、もうなのhが出て行った後だった。

side ???

今日、僕は全部『亡くした』。

お父さんとお母さんが、僕を木の根っこから守って死んだ。
今、僕は家にいる。

テレビでは『あの木』を人為的なもの……つまり、誰かが
わざとやったといってた。

他にも、僕と同じ思いをした人がたくさんいるみたいだった。

……許さない。

許さない許さない許さないゆるさないゆるさないゆるさ
ないユルサナイユルサナイユルサナイ！！

どうして『あれ』を発生させた！？どうして街中でやる必要があっ
た！？

僕は……いや、『俺』は絶対、ユルサナイ。

『アレ』を発生させた奴を……殺す。

そして護るんだ、誰も俺と同じ思いをしないように……！！
その時、家の庭で何かが光りだした。

庭に出てみると、どうやら代々受け継がれているうちの祠が光って
いるようだ。

格子戸をあけて中を見ると、

《む……おや？我は起きている？では使い手が現れたのか・
……ん？もしかして、その君が使い手か？いや、そうでな
くても自己紹介は必要だな》

……剣が、しゃべってる。

《我は 家の宝剣『五郎入道正宗』、よろしく頼む》

第十六話彼女にとっての……（後書き）

『あれだけの大きさと範囲で、（命に関する）被害を描写しないってどうよ？』

と、個人的に疑問に思っ^て、ちょっと『自分^が』納得いく展開にしてみました。

一番最後のは………ついでのフラグです（笑

次回、なのははどうなるのか？

それでは^^ノシ

第十七話遭遇、いくつかの場所で（前書き）

今回そんなに進展ありませんが、『今後のフラグのようなもの』から多数出てきていますwww

追記：10月1日ちょこつと加筆。

第十七話遭遇、いくつかの場所で

side 桃香

あれから数日。

なのはちゃんは部屋に籠りつきりだ。

あのあと、あの臨海公園でなのはちゃんを見つけたけど……。

正直、あの事実には9歳に重すぎた。

今朝もテレビでやっているのは、この前の騒動のこと。

そしてお決まりのように出てくる、被害者の数。

……何か、自分の無力さが分かった気がするよ。

被害者だけじゃなくて、なのはちゃんも助けられないなんて……。

「こんなんで……変えられるのかな？」

思わず、口から不安が出た。

side なのは

何も頭に浮かばない、何も感じない、何も聞こえない、何も見えな
い。

ベッドの中で、ぼんやりとするだけ。

唐突に何かを思い出した。

だけどそれは、この前のニュースだった。

画面の下の方にはつきりと書いてあった、『死者』…………。

ほんとう、何で見逃しちゃったんだろう。

さつさと気付けば、ジュエルシードを封印できていれば、あんなことにならなかったのに。

…………もう、考えるだけ無駄だね。

直接じゃないにしろ、わたしは…………わたしは…………。

「なのはちゃん？」

今は誰とも話したくない。

だけど、それを伝える気が出なかった。

「今日も学校にいかなくていいってさ、わたしはもう出かけるけど…………無茶しちゃダメだよ？」

声はもう聞こえなくなつて、また部屋に音が無くなった。

…………これから、何をすればいいのかな？

しばらく、ぼんやりしてたけど、いい加減体を動かさなきゃ。
着替えてから部屋を出る。

下に下りると、誰もいなかった。

・・・・・・あたり前だね、今頃みんな翠屋じゃないのかな。
テーブルの上においてあった朝ご飯（時間的にはお昼ご飯かな？）
を食べてから、外に出た。

とはいえ、今の時間帯は普通、小学生は出回ってないから、ちよっ
と注目浴びちゃうのが玉に瑕かな・・・・・・？

いくところが無いので、いつもの臨海公園に来ています。
ベンチに座って、ぼんやりする。

動く気も起きないので、空を見ることにした。

side はやて

今日は隣の浦原商店まで、お買い物しにいつている。
いやゝそれにしても、あそこの商品は安いし品揃えが豊富だし。

ちょっと距離があるのはうちにとって難点やけど、まさに世の奥様の味方や！

それに、何年か前にちょっとしたこと、お店の人とも仲良くなったんやけど、みんな面白くてええ人なんやで！
せやから、毎回行くのが楽しみ

ガツツ

あ、あかん、車輪が溝にはまってしもうた。

どう動かしてもはずれんし、かと言って助け呼ぼうにも、周りに人がおらん。

どないしよう……。

その時やった。

「あんた、大丈夫？手伝おうか？」

「へ？」

見ると、気の強そうな女の子が目のおつた。

後ろの方に、その女の子とそっくりの子と、オレンジ色の髪に茶色の目をした、どうみても外見が日本人離れしとる男の子がいる。

「えと、いいんですか？」

「いいっていいって！困ってる人を助けるのはとーぜんでしょ？」

「そういうわけだから、ちよいと動かすぜ？」

女の子がゆった後に、そのオレンジ色の髪の子がうちの車椅子の取っ手を握った。

続いて女の子が右に、女の子にそっくりな子が左にいつて、車椅子を抱える。

「いくよ？せーのっ！」

あれよあれよと言う間につてこっいつんやろっね。
車輪はすぐにはずれた。

「あ、ありがとうございます」

「もーいーの！ついでだから、送ったげるよ」

「え、いいんですか？」

「もちろん、またはまったら大変でしょ？」

「うーん……じゃあ、お願いします」

「おしきた！」と、女の子はうちの後ろにいつて、車椅子を押し始めた。

あ、せや！

「まだ、お名前聞いてませんでしたね？うち、八神はやていいいます」

「あ、そだね、あたしは石田散竜^{いしたちりゅう}、みんなは『チル』って呼んでるから、あんたもそう呼んでね、それと、敬語もいらないよ」

「俺は石田阿竜^{いしたありゅう}、チルとは双子の兄弟だ、俺は『アル』って呼ばれてる」

「最後か……俺は黒崎刀護^{くろさきとうご}、あだなも何も無いから、普通に刀護って呼んでくれ」

チルちゃんにアルくん、刀護くんかあ……うん。

「よろしく！」

side 刀護

俺とチルとアルは、途中で出会ったはやてって子と一緒に浦原商店へ向かっている。

「へえ？お姉さんいるんだ？」

「うん、ちよつと変わり者やけど、頼りになるよ」

「そうなんだ」

「兄弟かあ」

「ああ、刀護は一人っ子だったな」

「おうよ、家に帰っても暇だからなあ」

「ご両親お医者さんだからね」

「ああ、たまに手伝いとかやるけど、遊び相手がないのはちよつと……」

まあ、お陰で保健体育は成績いいんだけど。

「そつかあ、ええなあ……」

はやてが、寂しそうにぼつり。

「はやて、どうした？」

「あ、うん……うちな、お父さんもお母さんもおらんから……」

「え、そうなの……？」

「うん……」

これは……ちよつとまずいこと聞いたかもな；

「えと、何か、ごめん……」

「いや、別に刀護くんの所為やないよ、そりゃ寂しくないゆうつら嘘になるけど、別にそれほど寂しいゆうつわけでもないから」

「うわぁ、はやてって見た目によらず遅しいわね？」

「そんな！うちおねーちゃんがおらんやったら何もできんよ！？」

そうやって謙遜（つていうんだっけ？こういうの）してあたふたするはやて。

つと、そうこうしてるうちに商店についたみたいだな。

「こんにちは」とあいさつして、引き戸をあける。

「いらつしゃーいみなさ・・・おや、はやてサンも一緒でしたか」

「はい！こんにちは、浦原さん」

普通に会話するはやてと浦原さん・・・・・・・・つて。

「二人、知り合いなの？」

俺の代わりに、チルが疑問をいった。

浦原さんは扇子で口元を隠してから、

「ええ、そうですよ？」

「何年か前に、ちよっとした縁で、知り合ったんよ」

けろりと答える二人。

呆気にとられる俺達を他所に、

「ところではやてサン、今日もお買い物ですかね？」

「はい、いつもどおり500円分！」

「かしこまりました、少々お待ち下さい」

とスムーズにやり取りする。

「……………はやお母さん」

「へっ？」

「いや、今の浦原さんとの会話聞いてたらついそんな言葉が……………」

「なんだか気まづくなったので、視線をそらした。」

とりあえず、後ろで意味無くニヤニヤしてたチルには後で拳骨な。

「お待たせしました」

「あ、はい！ありがとうございます！」

ちょうどいいタイミングで、浦原さんが来て、はやてに袋を渡した。

「刀護サンたちは奥でお話ですか？」

「はい！」

「宿題がてらに、世間話つてやつでも……………」

「はやてもどう？」

「ふえ？ええの？」

「もちろん！」と答えるチル。

はやては少し考える素振りを見せてから、

「じゃあ、ご一緒させてもらおかな？」

はやてはにつこり笑って答えた。

side なのは

どれくらい空を見てたのかな？

気が付いたらもう周りが暗くなり始めていて、特に西のほうが赤く
なっていた。

「・・・・・・・・・・っ」

不意に昨日のニュースを思い出しちゃって、頭を抱え込んだ。

それに加えて、空が血で塗られてるみたいに思えた。

わたし一人のミスで、たくさんの人が・・・・・・・・死んだんだ
よね。

直接じゃなくても、人殺しは人殺し・・・・・・・・。

・・・・・・・・あははっ。

「どうすればいいのかな？」

帰らなきゃいけないけど、体が動かない。

・・・・・・・・まだ明るいから、もうちょっといいよね？

「この辺でいいか？・・・分かった、それじゃあ・・・」

向こうの方に、男の子が見えた。

多分誰かと一緒にいるんだろうけど、その人がどこにいるのか分からない。

・・・わたしと同じ魔導師っていう可能性もあるけど・・・まさか、ね。

「・・・ん？」

「・・・あ」

偶然男の子と目があう。

そしてそのまま逸らせずに、時間が過ぎていく。

いくらか時間がたって、男の子がこっちに近づいてきた。

暗くてみえなかった格好とか、顔とか、よく見えるようになる。

真っ黒な髪に、海みたいな青い目。

ジャージを着ていて、左手には、黒い鞘と白い持ち手の刀を持っていた。

そして何より目が行ったのは、包帯で巻かれて、まるで骨折したみたいになった右腕。

わたしを見たまま男の子は口をあけて、

「どうしたんだ？こんなところで」

「・・・うん、ちょっと・・・つらいことがあって・・・」

また黙ってみる男の子。

すると小さくため息をついて、

「もう夜になるから帰ったほうがいい、心配してくれる親御さんがいるんだから」

「……そうかもしれないけど、お父さんとかお母さんとかいるのは、あなたも同じだと思うな」

そしたら、男の子はまた黙って。

「……この間の、大きい木の時に、死んだ」

「.....っ!？」

鳥肌が立つのが分かった。

「……………」
ち…………」

めんな……………

目の前がぼやけて、男の子がよく見えなくなる。

多分今ので、わたしが原因だつてことを気付かれたかもしれない。もしかしたら、あの剣で殺されるかもしれない。

でも、当たり前かもしれないなあ……
 ……ただ、返ってきた言葉は以外だった。

「……お前が謝る必要はないと思う」

「え？」

「お前は多分、俺に同情してくれているんだろうけど、必要はないから」

「でも」

「幸い俺には支えてくれる『家族』がいるし、目標もある、だからお前が泣く必要はない」

まっすぐにわたしを見て、男の子はそう言った。

「……………だけど、

「やっぱり、家族が死ぬのは……………」

「ああ、寂しいさ、だけどそれを言い訳に立ち止まるわけにもいかない」

「同じ年とは思えないくらい……………何ていうのかな？」

目と、表情と、言葉、全部に強い決意がこもっていた。

「……………何でか知らないけど、体がいくらか軽くなった気がした。」

わたしはゆっくり立ち上がってから、

「……………強いんだね、あなた」

思ったことを口にしたとたん、男の子の表情がガラリと変わる。

「違うな、『目標』に逃げたんだ」

また、二人とも黙り込む。

それを終わらせたのはわたしだった。

「……………それでも、うじうじ悩んでるわたしより、ずっと強いよ」

「……………そうか」

わたしは男の子に背中を向けながら、手を振る。

「……………ありがとう」

気がついたら、そんな言葉が出てきていた。

s i d e 刀護

「うわ、そろそろ帰らなきゃ」

「あ、ほんまや！」

「けっこう時間たってるね」

「そうだな」

すっかりはやてやチル、アルと話し込んでいて、気がついたら時計の針が5と11を指していた。

それを確認した俺たちは、そろって苦笑いをする。

「じゃあ、今日はこの辺でお開き？」

「だな」

「みんなそろそろ帰らんと、うちの人心配するやろ？」

「それははやてもだろ」

「あ、せやね」

俺たちを心配するはやてに、同じだつてことを教えたら、はやては柔らかに笑った。

「・・・・・・・・やべ、かわいい・・・・・・・・！！」

「おんやゝ？顔が赤いよ？とーごー？」

「確かに、デレデレするなんて珍しいね」

「つば、ばか！二人とも何言つてやがるんだ！」

「きゃー！怒ったゝ！！」

「だれの所為だ！！」

そうやって、俺たちにとっては恒例の漫才（？）が始まりかけたが、

「ちょ、みんな漫才しとる場合？ほんとに帰らんと・・・・・・・・」

「むう・・・・・・・・そりや、言われてみたらそうだね」

「まともすぎて反論できないわ・・・・・・・・ちっ」

（さりげに舌打ちした！？）

はやてがやんわりとその漫才を止めた。

あと、舌打ちとか聞いてしまったら戦慄するのは俺だけか？

「チルサンとアルサンのお家には連絡しましたよ、お母様がお迎えに来るそうです」

「おお！さっすが浦原さん、準備いい！」

「すみません、ありがとうございます」

テンションに任せて喜ぶチルと、丁寧にお礼を言うアル。

性格の違いってこういうところにもでるんだな。

「さて、刀護サンはいつも通りとして、はやてサンは今からお帰り

ですね？」

「はい、道も覚えてますし、真っ暗になる前には帰れます」

俺はランドセルを、はやては買った物が入った袋を持って帰る準備をし始める。

「はやてん家、あたしらのところより離れてないもんね、ちょっとうらやましいかも」

「あはは、まあチルちゃんとアルくんに関しては、また明日ゆーことで」

「おうよ！またいっぱい話そうね！」

「うん！」

そうやって、はやてとチルは指きりをしていた。

さて、俺は商店の土間におりたわけだが、ここで問題が発生。

「そうだ、はやて、一人で車椅子に乗れるか？」

「うん、大丈夫だよ、刀護くん悪いけど、ちよつと車椅子押さえてくれへん？」

「ああ、いいよ」

はやてはそう返すと、俺に車椅子を押さえるよう指示。

俺は言われたとおり車椅子の後ろにまわり、支える。

するとはやては慣れた様子で、車椅子に座った。

そして俺はすかさずはやてに買い物袋を渡す。

受け取りながらはやては、

「ありがとう」

と、嬉しそうに笑った。

「はやては明日も病院？」

「うん、この足の治療……ゆうても原因自体がわからへんから、ちょこつとした検査だけなんやけど」

「そつかあ、大変だな」

「だけとおねーちゃんがおるから、怖くはないよ」

帰り道、そんな会話をしながら俺とはやては歩く。

空はもう端っこのほうが赤いこと以外、本当に真っ黒だった。

こういう時って、街灯のありがたさを感じるんだよね。

しばらく歩いていると、目の前に分かれ道が見えてくる。

「はやてはどっちだ？」

「こっちや」

「あ、じゃあ同じ方向なんだな」

そういつて、右を指差すはやて。

それを見て俺はほっと……って、なんでほっとする必要あるんだ？

・・・・・・考えてもしたかないか。

「よし、行こうか」

「せやね、はよう帰らんと」

俺は脚を、はやては車椅子を動かして、右に曲がる。

そしてまたしばらく行くと、向こうのほうに人影が見えてきた。

こっちに近づいてきているので思わずはやての少し前のほうに出る。その人と俺たちが街灯の明かりに入ったときに、はやての顔が明るくなるのがわかった。

「おねーちゃん！」

「はやて！」

はやてのお姉さんと思われる人に、はやてが飛びつく。

お姉さんははやての頭をなでてから俺を見て。

「君、送ってくれてたの？」

「え、あ、はい！」

「そっかあ、ありがとう」

「い、いえ！どういたしまして！」

そうやって頭を下げてくるお姉さん。

俺はなんだか照れくさくなって、頭の後ろをかいた。

「そーいや君、家は近く？よければ送ろつか？」

「あ、大丈夫です！もうすぐそこなので！」

「じゃあ一人でも大丈夫かあ、せっかく送ってくれたのに、ちよいと残念かもww」

「すみません・・・・・・」

「いーよお！君の所為じゃないんだから！ただ、近いとはいえ、油断しちゃだめよ？」

「はい、えと・・・・・・・・おきづかいありがとうございます？」

慣れない敬語を使ったら、お姉さんにはっこり笑って。

「へえ！今どきの子って難しい言葉も言えるんだ！関心関心！」

「ど、どうも」

「うん、それじゃああたしらはここでいいかな？」

「あ、はい！お気をつけて！」

「そっちもねー！」

「送ってくれて、ありがとうなー！」

車椅子を押されながら、はやてが手を振ってくれたので、振り返す。そのまま俺は、家に帰った。

「ん・・・・・・・・・・そーいやあの子の顔、どっかで見た気がするけど・・・・・・・・まあ、その内思い出すかにゃー」

第十七話遭遇、いくつかの場所で（後書き）

はい、先に謝ります。

すみませんでした！！（ガバツ　綺麗な土下座

言い訳はしませんがあえていうなら、出来心ってやつです！ハイ！
次回も期待してくれると嬉しいな・・・？

それでは^^ノシ

第十八話便利屋さん、はじめました（前書き）

タイトルは本編に関係してるだけで、意味はありません。
今回もフラグ的なものと日常です。
そしてついに……。。
それではどうぞ。

第十八話便利屋さん、はじめました

side ユーノ

あれから一週間。

なのはは少し元気になった。

いつも通りまた学校に通い始めている。

「……あの頃のなのは、見てられなかったもんなあ。
ちよつとだけでも立ち直れてよかった。」

「ユーノくん、今日もお願いね」

「あ、はい！」

そうそう、こつちに来てから、僕にもちよつとした仕事できた。
桃子さんが僕をバッグの中に入れて、家を後にする。
ついた先は、

「あ、桃子さん！おはようございます！」

「おはよう、さて、今日もがんばりましょ」

「はい！」

「さ！喫茶翠屋、今日もいくわよ！」

そう、なのはの家がやっている人気のお店、翠屋。

少し前から、僕はここの看板フレットとして働かせてもらっているんだ。

といつても、業務内容はちょこちよ動きまわったり、お客さんに撫でさせたりしてくらいだけど、皆喜んでくれるからやりがいがあるよ。

あ、早速本日最初のお客様だね。

桃子さんたちは明るい声で「いらっしやいませ!」という。
ぼくもお客さんにかけてよって、

「きゅっ!」

side 桃香

「でさー、そのタレントが……」

「あー、そりゃ大変だったよね」

「今日どこいく?」

「おーい! サッカーしようぜ!」

今は昼休み。

今日もうちのクラスは賑やかで、仲良しなグループごとに集まっている。

それぞれ、昨日のテレビや、今日の授業のことをしゃべったり、連れ立って外に出て行ったりしている。

ちなみにわたしは一人で読書中。

（これといった友達がいませんもんね、主）

（そうなんだよねえ．．．．．まあ浮いてるわけでもないから、このままでもいいかな？）

（．．．．．行き遅れになつても知りませんよ？）

（ちよっ！？何言つてるの藍桜！わたしの年齢じゃまだ早いって！）

（おや、主は実年齢三十路アラサー近くなのですよ？立派な行き遅れだと思つたのですか？）

（．．．．．もういいよ、藍のバカアア．．．．．）

あれ？目から塩水が．．．．．。

「ねえ．．．．．ちよっと」

「うん．．．．．」

「亜桜さん、また一人で落ち込んでる」

「何かあつたのかな？」

クラスの子達が何か言ってるけど、聞こえないもん．．．．．！

「桃香ちゃん！」

「ん？．．．．．ああ、なのはちゃん」

読んでいた本を本棚に戻してから、なのはちゃんのところに行く。
．．．．．なのはちゃんはあれからいくらか立ち直って、こうやってまた学校に通っている。

まだ悩むところはあるみたいだけど、かなり回復してるみたい。

「どうしたの？」

「ちよつと教科書で分からないところがあつて．．．．．教えてく

れる？」

「うん、わかった、じゃあちよつと準備するから、待ってて」
「うん！」

s i d e 飛鳥^{コトリ}

「それじゃあ石田センセ、ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

「はい、お大事に」

はやての主治医である石田先生に挨拶してから病院を出る。

「……今更だけど、はやてがこの間知り合った『石田』姉弟と苗字が一緒なのよね。」

しかもどっちも病院関係者だし………こんがらないように気をつけなきゃ。

「さて、と」

病院を出てからケータイのスイッチを入れる。

ん？じゃあ今まで切ってたのかつて？

当たり前じゃにやいか！ケータイの電波は病院の電子機器にとって毒なんだぞ！！

つげふんげふん・・・・・・・・・・メールの項目を開いて、受信箱をチェックする。

「えつと・・・・・・・・・・お、来てる来てる」

「おねーちゃん、何見とるん？」

「お仕事来てないか見とるんw早速だけどこめんね、はやて、今日は午後いなくなるから」

ちよこつとだけ寂しそうに笑ったはやての頭を撫でながら、受信されたメールの一つを選んで、返信する。

今年に入ってから、剣道場のバイト以外に、もう一つ仕事をはじめた。

それは便利屋で、名前は『グレー・ヴェスベリア偽純白の明星』。

飼いい猫探しかから、気になるあの子の好みに、話し相手、おつかい、合言葉を言えばちよつと危険な『裏』の用事まで、なんでもやる。

ただ、それなりの報酬はいただくけど、受け持った依頼は一つ一つ、確実にこなしてつてるから、評判は上々ww

・・・・・・・・・・何？『労働基準法』？それ前にも聞いたよお！大丈夫、名義上は『ただの』小遣い稼ぎだから、でもちよつとギリギリかも？

まあ、さすがに裏の方をやる時には、変身魔法で年齢ごまかしてるんだけどねクライアントつ

さて今回の依頼主は合言葉あり、内容は・・・・・・・・・・つと。

「換金時の証明書、その他もろもろの信用書類偽装の助っ人・・・・・・・・

「……ねえ？」

side なのは

「なのはちゃん、じゃあ次はこれやってみようか？」

「うん、わかった！」

「桃香、ここは？」

「あ、そこはこうやるの」

「えっと………うん出来た、ありがとう」

「桃香さん、これはこの公式を使っても………」

「うん、普通はこれでやるけど、問題ないよ」

わたしとアリサちゃんとすずかちゃんは、ただいま桃香ちゃんに勉強を教えてもらってる。

はじめは国語だけだったはずが、いつの間にかアリサちゃんは理科を、すずかちゃんは算数をやっていたの。

ちなみにわたしは国語をやっているんだ。

わたし、文系は苦手だけど、桃香ちゃんの説明は分かりやすくて、

かなり頭に入ってきます！

キンコーン・・・・・・・・。。。

「あ、昼休み終わっちゃった！」

「教室に戻らないと・・・・・・・・。」

「そうだね、桃香ちゃん！教えてくれてありがとう！」

「うん、転ばないようにね？」

「はい！」

桃香ちゃんに手を振ってから、勉強道具をもって教室に帰りました。

「それじゃあ、また明日！」

「うん！」

「ばいばーい」

放課後、今日は塾はお休みなので、アリサちゃんたちとはここでお別れ。

桃香ちゃんは先生のお手伝いでいないので、ここからは一人で帰ることになる。

「……………そういえば、一人になるのって久しぶりだなあ。最近まで部屋に引きこもっていたとはいえ、桃香ちゃんが来てから、一人の時間が少なくなった気がする。」

「……………この間のことを気にしてないっていったら嘘になるけど、いつまでもうじうじしてらんないもんね。しばらく歩いてて、なんとなく足が止まった。」

視線の先には臨海公園……………。

「……………いるかな？」

ちよつと寄り道です。

でもその時、

「おい！なーちゃん！」

side 飛鳥^{コトリ}

クライアント
依頼主に会って正式に依頼を受諾、完遂してから、帰っている時だ

った。

臨海公園に入っていくのはちゃんが見えた。

「……本日二度目の今更だけど、『なのはちゃん』ってより『なーちゃん』が言いやすい気がする。よし、

「おーい！なーちゃん！」

すると向こうは驚いた顔でこっちを見た。

あたしはニコニコ笑いながらなーちゃんに近寄る。

「こんなとこで何してんのさ？」

「ユーリさん……いや、ちょっと……寄り道しよっかなって……というかなんですか？『なーちゃん』って？」

「あらら、寄り道は良くないよww『なーちゃん』に関しては……気分的にそう呼びたかった？」

「なんで疑問系なんですか？」

そういつて苦笑いするなーちゃん。

「……うん、桃香ちゃんから、この間の巨木騒動の一件で落ち込んでるって聞いたけど、けっこう立ち直ってるみたいね。」

「まあ、この子の場合心配は必要ない……か」

「？あの、何かいいました？」

「ん？気のせいじゃにゃーいのーww？」

危ねえ危ねえ、心の声が漏れてたな；

「は、はぁ……あ、そうだ、何かご用ですか？」

「うんや、ご用ってほどのもんじゃないよ、偶然見かけて、声かけただけだから」

「そうなんですか」

「おうよwwというわけでおねーさんはもう帰るにや」

「あ、はい！気をつけて！」

「なーちゃんもねww」

手を振ってくるなーちゃんに手を振り替えてから、その場を後にした。

side なのは

ユーリさんと分かれてから、公園に入ってみた。
そして、あの子と初めて会った場所に行ってみる。

「・・・・・・・・・・あ」

いた。

この間と同じ格好で、鞘に収めたままの刀を振っていた。
右腕の包帯はまだ取れてないみたいだけど、それでもかなり上手だ
と思った。

一通り振り終えたのかな？

一旦動きを止めて、大きく息をしながらベンチにおいてあるタオル

を取りに行く。

「・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・っ」

目が、あった。

男の子は一瞬ピタツと止まってからこっちを見た後、わたしのことを思い出したみたい。

「この間の・・・・・・・・・・」

「うん、久しぶり」

何でだろう？ちょっと話したただけなのに、すごく嬉しい・・・・・・・・・・。

「その様子だと、いくらか吹っ切れたみたいだな」

「えへへ、この間あなたと話したら、いくらか楽になったんだ」

「ああ、だから『ありがとう』っていったのか」

「うん」と頷いて、右腕に目を移す。

「右腕・・・・・・・・・・まだ治っていないんだね？」

「・・・・・・・・・・ああ、複雑骨折ってやつらしい、治るまで、まだ時間がかかるな」

「あの・・・・・・・・・・だったら、ここで訓練とかしないで・・・・・・・・・・
・その、家で安静にしているとかは？ほら、家ででもダンベルとか、持ち上げていれば・・・・・・・・・・」

別に強くなりたいって思いを否定する気は無い。

けど、やっぱり怪我人なんだからちょっとくらい休んでも・・・・・・・・・・

•
•
•
○

「気遣いは感謝するけど、やっぱり強くなりたいから」

その子は、そう言って笑った。

「にやはは、でも腕は大事にしたほうがいいよ」

「ああ、そうさせてもらっつよ、時間的にもそろそろ帰らねば」

あ、
そうだ。

「まだ、名前を聞いてなかったね？わたし、高町なのは！」

「なのはか……かわいい名前だ、俺は牙崎鬨夜、よろしく」

「つと、鬨夜くんだね！ うん、よろしく！」

闘夜くんと握手をしてから、家に帰った。

もう春先だつていうのに、夕方になるとちよつと寒くなる。だけど、それより……。

「かわいって………いってくれた」

寒さに負けないくらい、顔が熱かった。

side 飛鳥^{ユトリ}

「はいよ、これくらいでどうだい？」

「えつと？……ええ、十分です、ご利用いただきありがとうございます」

数日後、書類偽装の手伝いの報酬を貰っていた。

ちなみにあたしは変身魔法を使い、白髪でいくらか成長した姿でそれを受け取る。

いや、実質そんなに危険な仕事じゃないんだけどね？一応うちでは偽装を『裏』の項目にいれてるし、例えばどんな内容でも『裏』の依頼ではこの姿って決めてるから。

「いや、こつちも大助かりさね！手伝ってくれてありがとう」

「どういたしまして、またのご利用お待ちしております」

「ああ！」

かなり満足した様子で去っていく依頼主^{クライアント}。

その容姿は、黒髪で小柄な日本人女性………なんだけどさ。

勘のいい人はもう気づいたかな？

（あれってアルフさんだよね？暗羅）

（ああ、マスターの記憶にある言動、変身後の容姿がすべて一致する、それに現在の時間軸は原作では第3話後……更に偽装書類の使用目的はマンシヨンの一室を借りるためと来た）

（ま、それだけそろえば本人と断定していいだろうね、さしずめ、こっちに滞在するための下準備つてやつ？）

（だろうな、仮に予想が外れていても、彼女らが来るのは間違いないだろう）

（くすくすつ、予想通り、面白くなってきたじゃないかww）

（？予想通りなら、面白みが減ってしまう気がするが？）

……くすくすくすくすつ。

（あーもう分かってないなー暗羅は、展開が読めても、そこに至るまでの経緯が面白いのよ！）

（そんなもんか？）

（そんなもんなのよww……でも、ね）

今のあたしの顔に浮かんでいるのは、おそらく『妖艶な笑み』というやつだろう。

ただ自分で確認できるのは、口の端がつりあがった事だけ。

（外れたら外れたで、結局はさらに面白くなるだけ、なんだよね）

s i d e ? ? ?

その日の夜。

インターホンが鳴ったので、チェーンがかかっていることを確認しつつ、扉を開ける。

まあ、この時間帯だ、おおかた大家くらいだろう。
扉の向こうを除くと、

「ユキ！」

「久しぶり」

「お前達・・・・・・・・どうし・・・・・・・・」

言い切る前に、思い出した。

そういえば、彼女らがくるのは今日だったな。

「まさか……忘れてたのかい？」

「す、すまん、来ることは覚えていたが、今日だったとは……」

ドアの向こうにいる、二人のうちの一人が、俺をジト目で見てくる。一応弁解はしたが、どうも見苦しいな……。

「とりあえず中に入れ、立ち話もなんだし、しばらくここに住むんだからな」

「む……まあ、そうだね」

「そうとくれば」と、俺はチェーンをはずし、二人を中に入れる。もう一人の、俺より年下の少女の荷物を預かり、リビングの一角においた。

「疲れただろう？ 軽いものでよければ今から作るが……」

「

「うーん……じゃあお願いね」

「ああ、頼んだよ」

少女は少し考えてから、女性の方は即答して、俺の提案を肯定する。

「よし、じゃあちよつと待っててくれ」

今日はもう8時を回ってしまったし、二人の疲れ具合を考えたら……。

「おかゆが妥当だな、色々具もいれるか」

早速魚を焼き、野菜を刻んでいく。

そして水を沸騰させてから、今日の晩御飯に炊いた、少し冷えたご飯と焼き魚、きざんだ野菜を入れた。

あとはふたをして煮込むだけと。

「しかし、俺の時もそうだが、よく書類を偽装できたな」

「・・・・・・・・・・ユキとわたし達の身分証明書を作ってくれたのは彼女だよ？」

「そうさ！まあ、あたしとこの子の分は人の手を借りたよ、それにしてもこっちの世界にも便利屋はあるんだね、お陰で助かった」

「そっか・・・・・・・・・・ほら、緑茶だ、あつたまろぞ」

「ありがと」

少女と女性にお茶を渡してから、俺も一服する。

といっても、おかゆが焦げないように見てなきゃいけないから、すぐに席を立つただけだな。

「今回の仕事はロストログアの搜索だったか？」

「うん、対象はジュエルシード、全部で21個あつて、力は願いを叶えるってやつ」

「だけど、ゆがんだ形で叶えるのが欠点だね、それに魔力を注げば次元震だっておきちまう・・・・・・・・・・まったく、あの鬼婆は！・・・・・・・・娘になんてものを集めさせるんだ・・・・・・・・・・！」

女性の最後の方のばやきは、少女には聞こえなかったみたいだが、俺にはしっかりと聞こえた。

俺と少女と女性にジュエルシードの搜索を命じた人は、確かにあつてまだ一月しかたっていない俺でさえ『異常だ』と思ってしまう。

少女が言うのを聞く限り、昔はとても優しかったみたいだが・・・・・・・・・・なら何が『彼女』をそうさせたのやら。

っと、危ない危ない、おかゆが焦げるところだった；

「ほら、できたぞ」

「おお！さすがユキ！おいしそうだねえ」

「男の子なのに料理が上手・・・・・・・・・・」

おかゆを茶碗に注ぎ、二人の前に持つていく。

女性はかなり目を輝かせて、少女はどこか寂しそうにそういった。

「そんなに気に病むな、俺が教えるから」

「・・・・・・・・・・うん、そうだね、それじゃあいただきます」

「ああ、召し上がれ」

嬉しそうに食べる二人を見て、何となく和んだ。

第十八話便利屋さん、はじめました（後書き）

というわけで、ついに次回より、三人目の転生者本格参戦です。
名前とプロフィールは近日に！
それでは^^ノシ

第十九話死神さんが出てきた時点で、イラギュラーには気をつけましょ？（前書

遅くなりました・十九話です。

今回はついに・・・。

それではどうぞ！

第十九話死神さんが出てきた時点で、イラギュラーには気をつけましょ？

side 飛鳥

「ふえ？すずちゃん宅のお茶会に誘われた？」

「うん！この間図書館で会ったときに約束したんよ、なのはちゃんとアリサちゃんもくるんやて！」

晩御飯を食べてる最中、はやてがそんなことをいったので、思わず過剰に反応してしまう。

はやてはにこにこしながら、ご飯をほおばった。

「へえ？それで、いくの？」

「もちろん！……なのはちゃん、この間の大きい木の時から元気ないって聞いてたから」

「………そっか」

姉妹そろって笑いあってから、再び食事を再開した。

「お茶会ゆうたら・・・・・・・・フェイトちゃんとの初対面だよにや？」

（そうだな・・・・しかしマスター、どうやら我々が介入したことで世界の流れがいくらか変わってしまっているようだ、フェイト嬢以外の来訪も頭に入れておかねば・・・・・・・・）

「そーだね」

まあ、だいたいの流れまでは影響してないはずだから、だいじょーぶ・・・・・・・・の、はず。

・・・・・・・・考えてもしやーないか。

「とりあえず、寝るお、明日も早いからにや〜」

（了解した）

ふと思ったけど、誰でもしたくなるよね？ベッドへのダイビング。

side 桃香

「えっと・・・・・・・・うん、よし！」

服装の乱れが無いからチェックしてから、玄関に下りていく。
ちようど恭也さんとなのはちゃんが待っていてくれた。

「待たせてごめん」

「大丈夫だよ」

「ああ、バスまでまだ時間がある」

そうやって、三人で外に出た。

三人そろってバス停へ向かって歩きながら、

「今日はすずかちゃん家に行くんだよね？」

「うん！」

「それで恭也さんは忍さんに会うと」

「まあ・・・・・・・・な」

恭也さんは少し照れくさそうにうなじをかいだ。

「あ、バス停・・・・・・・・」

「でも・・・・・・・・あれって乗る目的のやつ・・・・・・・・だよな？」

「・・・・・・・・やばくないか？」

その後？

ええ、三人そろって無言で走りましたよ？
もちろん全速力で。

s i d e 飛鳥^{ユトリ}

「この辺でいいのかにゃ？」

「うん、もらった地図の通りにいくとこの辺やけど……………」

はやての手にある地図を見ながら、まわりの地形と照らし合わせる。
すると、向こうの方に周りの家とは大きさとか、風情とか大きさと
か、あと大きさとかが明らかに違う建物が見えた。

……………しょうがないじゃん、だって本当にでかいんだもん
！！

「わあ！ほんまにおつきいなあ！」

はやては一人無邪気にはしゃいでるけど……………うん、おねー

さんあのサイズのお家は後にも先にもテレビでしか見たことないや
っ

圧倒されるってこのこと言うんだねーあははー……………。
とりあえず、

「待たせるのもなんだし、いこっか？」
「うん！」

再びはやての車椅子を押して、歩き出した。

side ???

「じゃあ早速探しにいこうか」

「それならあたしがついて……………」

「いや、俺が行こう」

言葉を遮られたことに腹を立てたのか、睨んできた。

しかしこちらもゆずれない理由があるので睨み返しながら、

「お前達はいつこの間来たばかりだろう、どうせ二人で行くのなら、お前がこの子のどちらかに待機して貰わなければ」

「そんなんだったらこの子じゃなくてあたしが……！」

「こいつは言っても聞かないだろう？だから自然と待機組はお前になるわけだ」

いくらか言いくるめると、相手は悔しそうに黙り込む。

「……心配なのは分かるが、やはり『休み』というのは必然と必要になる。」

遠いところから移動してきたというのなら、なおさらだ。

「ごめんね、でも母さんを待たせるにはいけないから……」
「けど……あーもう！」

なだめられ、しばしの葛藤を見せた後、叫ぶ。
「……悩むのは構わないけど、ご近所の迷惑も考えるようにな。」

「ユキ！怪我させたら承知しないからね！」
「分かっている、切り傷一つ付けさせないさ」

にやっと笑いあってから、刀を持って外に出た。
もちろん刀には認識障害をかけている。

「それじゃあ行ってくるね……行こう、ユキ」
「ああ」

「気をつけて！留守は任せな！」

待機を引き受けてくれた仲間小さく手を振って、二人で屋上へ向かった。

side なのは

「大変だったんだね」

「うん、でも間に合ってよかったよ」

「あはは、本当に、ね」

わたしとアリサちゃんと桃香ちゃん、さっきのバス停でのお話をしている。

すずかちゃんは、はやてさんとユーリさんに連絡を取る為にちょっと抜けている。

あ、ちょうど帰ってきた。

「お帰りすずかちゃん！ユーリさん達、なんだって？」

「ただいま、もうすぐ着きそうだけど、もうちょっとかかるってさ」

そうやって、ちょっと残念そうに笑った。

うーん、確かにちょっと残念かも。

「お待たせしました〜！」

「キューツ！！キューツ！！」

ちょうどファリンさんがお茶とお茶菓子を持ってきた。

その時ユーノくんを追って走り回っていたネコが……………つて！

「ファリンさん危ない！」

「へ？わ！？わ！！あわわわわわっ！！」

ネコがファリンさんの足元を回って、ファリンさんの足が纏れてしまっ

た。そしてお盆をひっくり返してしまった。

お茶とお茶菓子がダメになりかけた時。

桃香ちゃんが走り出した。

慣れた足取りで近づくと、ファリンさんを支えて床におろして、宙に浮いてしまったお盆をうまくキャッチした。

そしてユーノくんを掴むと、わたしの方に投げてきた。

お盆の上のお茶とお茶菓子は、いくらか乱れていたんだけど無事だった。

ちなみにこの間1〜2秒くらい。

「足元には気をつけてくださいね？」

「あ、はい！ありがとうございます！」

そして何事もなくファリンさんに向かってにっこり笑った。
……………うーん、何と言っか、

「桃香ちゃん、お父さん達みたいになってる気がする」

「あ、分かるかも」

「それ、私も思ってたよ」

「え、ええっ!？」

ちよつとシヨックを受けた感じで、受け止めたお盆をテーブルに置く桃香ちゃん。

「でも、ここいたんじゃまたファリンさんが転んじゃうよ？外に移動したほうがいいと思うんだけど……………」

ちなみにわたし達がいるのはすずかちゃんの家の一室。

たしかにこのままここにいたら、また走り回るネコに足を取られるかもしれないね。

というわけで、お庭に移動することになりました。

「でも、よかった」

お庭に移動してから、世間話をしていたとき、アリサちゃんがぽつりと言った。

「だって、最近元気なかつたんだもん」

「そうだよ、暗かったし……………本当に心配したんだから」

「にははっごめんね、もう大丈夫だよ」

そうやって笑った。

けど、無理してるって思われたのかな？
二人ともちよつと暗くなっちゃった。

「ただいま・・・ってあれ？どうしたの？」

桃香ちゃん！グッドタイミング！！

その時、

「・・・・・・・・つ（ジュエルシード・・・・・・・・？こんな時に・・・・・・・・！?）」

思わず桃香ちゃんの方を見た。

桃香ちゃんも気付いたみたいで、いくらか真剣な表情でこっちを見てきていた。

反応からして、すずかちゃんのお家の中。

だけど、アリサちゃんとすずかちゃんには魔法のことを黙っているから席を外しにくいよぉ・・・。

「《と、桃香ちゃん！ユーノくん！どうしよう！！》」

「《まずは落ち着こうなのはちゃん、焦ったら何もならないよ》」
「《あ、そうだ！》」

ユーノくんが何か思いついたみたいで、「キュウッ」っと一声鳴いてから、走り出した。

あ、そっか！！

「あれ？ユーノ？」

「どうしたんだろ？」

「もしかして何か見つけたのかも、ちよつと行ってくるね」

「それじゃあ、わたしも着いていくよ、何かあってからじゃ遅いからね」

始めにわたしが走り出して、次に桃香ちゃんが後から追って来る。アリサちゃんとすずかちゃんに「すぐ戻る」と伝えてから、林の中へと入っていった。

side 飛鳥^{ユリ}

「おりよ？」

現在すずちゃん家のまん前……なんだけど、

「どうしたんおねーちゃん？」

「や、どうも『爆弾』が起きたみたいでさ。しかも場所的にどうもすずちゃん家の中なんだよね」

「ええ！？それって大変やん！！」

おろおろしたすはやて。

……うん、ごめんときめいたおねーちゃんを許して。

「そういうわけだからちょっと行って来るわ、もう目の前だから一人でもいけるでしょ？」

「うん！気をつけてな？」

「まかせろ！つーわけでいつちえきみゃーす（いつてきまーす）！」

はやてに軽く手を振ってから、現場へと向かった。

f r e e s i d e

なのはと桃香を見送ったアリサとすずか。

するとアリサはにやっといたずらっぱい笑顔をすずかに向けた。瞬間、すずかは悪いようなそうでもないような予感を感じる。

「さて、それじゃあ後を追うわよ」

そして見事的中。

すずかは苦笑いしながら、

「えと・・・どうして？」

「決まってるじゃない！ユーノが来てからのなのはと桃香、どうも

怪しいから尾行してやんのよ!」

「…………今頭痛がしているのは気のせいだろう。
そう信じながら、

「でも、いいのかな?危険なことだから巻き込みたくないから黙ってるとか」

「だったらなおさらよ!あたしらでもちよつとくらいなら協力できるかもでしょ!」?

今度は頭を抱え込むすずか。
だがこうなったアリサは止められない。

「それじゃあ行くわよ!」!

とアリサが立ち上がった時だ。

「アリサちゃん!すずかちゃん!」

向こうの方から、はやてがファリンの姉ノエルに車椅子を押されながら手を振っていた。

アリサとすずかの側につくと、ノエルは一礼してすばやくその場を去っていく。

「お待たせしてごめんな」

「そんな!いいよ!」

「けど、ユーリさんは?」

するとはやては苦笑いしてから、

「えつとな、何か途中でバイトの連絡が入ってしもつて、さっき分かれたんよ」

直後にアリサの目がキラリと光る。

「さつき……確かなのはと桃香も同じくらいに……」

そして再び不適な笑みを浮かべると、

「……よし！それじゃあはやても一緒に行きましょうー！」

「ふえ？どこに？」

「決まってるじゃない！」

なのは、桃香、ユーリの秘密、暴いてやるのよ。

後にはやてとすすかはこう語る。

「あの時のアリサには何故か逆らえなかった」

と。

side 桃香

ユーノくんのお陰で上手く抜け出せて、たった今ジュエルシードを
発見・・・・・・・・・・。
発見・・・・・・・・・・したんだけど。

なおおーん・・・・・・・・・・。

「ユーノくん、あれって・・・・・・・・・・」
「えと・・・・・・・・多分あの子の『大きくなりたい』って願いが正しく
叶えられたんだと・・・・・・・・」

呆氣に取られてるなのはちゃんの質問に、同じく呆氣に取られたユ
ーノくんが答える。
・・・・・・・・・・ねえ。

「ジュエルシードって以外と適当に願いを叶えるのかな？この間の
犬とかは『強くなりたい』って願ってあんなゲテモノになったんで
しょ？」

「ま、まあ、願いを歪んだ形で叶えるのがジュエルシードだから・
・・・・・・・・」

「『歪んだ』？だから『適当』の間違いじゃ・・・・・・・・」
「とつとにかく！」

ユーノくと漫才っぽいことをやってると、なのはちゃんが声を上

げた。

「今はジュエルシードをなんとかしよう！突込みとかはその後でいいと思うの！！」

「……………それもそうだね」

「それにあんなサイズじゃすずかちゃんも困ると思うから……………」

なのはちゃんはレイジングハートを起動させて。

わたしは最近作り上げた防具―（なのはちゃんのバリアジャケットを大人っぽくした感じ）をまとして、封印の準備にはい……………」

零閃。

フォトンランサー。

一陣の風といくらかの閃光。

直後にネコの体が大きく傾き倒れた。

……………つてええ！？

「だれ！？」

思わず攻撃が来た方向にむかって叫んで構える。

すると離れたところにある木の上に、なのはちゃんと同じくらいの女の子と、中学生くらいの男の子が立っていた。

というか、あの男の子……………。

（主！お気づきですか！？）

（分かってる……………三人目の記憶図書館能力者だね）

槍を構えて、二人を睨む。

なのはちゃんも状況は飲み込めてなかったみたいだけど、一応構えた。

「……………同じロストログアの探索者、か」

「そうだね……………けど一方はそんなに強そうじゃないし、あの動物の姿を取っている魔導師も敵じゃない、けどあと一人は……………」

「ああ、一応実力はあるようだ」

二人は何かを話しているけどよく聞き取れない。

多分、男の子の方はわたしじゃなきゃ相手できない。

だからなのはちゃんは自然と女の子の方を相手にすることになりそうだけど……………。

「なのはちゃん、もしかしなくても戦いになると思うけど……………
・大丈夫？相手はこっちより場数を踏んでるよ」

「えと……………多分大丈夫」

……………はあ、四年前の不安が実現するなんて。
ちよつと最悪かも。

「まあいい、あちらの足止めは任せろ、お前は早く封印を」

「……………うん、気をつけて」

つ向こうが戦闘体制に入った！

「《なのはちゃんは女の子の方を！ちよつとだけでもいいから足止めして！！ユーノくんは隠れて結界の展開と封印の用意！！》」

「《分かった！》」

「《任せて！》」

念話で短くそれだけ言ってから、わたしは男の子に突進。
突き飛ばして、なのはちゃんたちから離す。

「悪いけど、あの子に手出しさせるわけには行かないっのっ！」

続けざまに大きく槍を振って、叩き付けた。

けど男の子は鐔のない刀で受け止めてはじき返してきた。

一瞬体制が崩れたけど、すぐに立て直して、突きを繰り出す。

男の子はなれた体裁きで避けた。

やっぱり、強い！

一旦距離を取って、睨みあう。

「……………あなたも記憶図書館の？」
ライブラリ

「ああ、そうだ」

相手は意外にあっさり肯定した。

「わたしは亜桜桃香！管理者は藍桜！」
オーナー
「……………俺は沢城雪斗、管理者は闇サワと暗サワ」
さわしろゆきと
オーナー
やみ
くら

名乗ると、相手も名乗り返してくれた

雪斗くん……………か。

「ちゃんと名乗ってくれるんだね？」

「前世では武家出身だったからな、名乗ったら名乗り返すが礼儀だ」

「なるほど……………できれば戦いたくないけど、そういう

わけにはいかない？」

「ああ、お前とあの子を戦わせるわけにはいかん」

ちょっと厳しそうな子だけど、『戦わせるわけにはいかない』ってことは、一応実力は認めてもらってるってところかな？

「殺しはせんが・・・・・・・・・・多少の切り傷は勘弁願いたい!!」

雪斗くんはそう叫ぶと、居合い斬りの構えを取って、走って・・・・・・。

・・・・・・・・・・って速っ!

なんとか槍で受け止めたけど、一撃も重い・・・・・・・・・・!!
きつとそうとう鍛えていたんだろうな。

これは・・・・・・・・・・きつい戦いになるかも。

「っ 閃空裂波!!」

「縦牙一閃!!」

槍を持って回転するけど、縦一閃で止められてしまう。

「裂波拳っ!!」

「しまっ・・・・・・・・・・ああっ!!」

大きく突き飛ばされて、地面を転がる。

その時、

「桃香!?!」

「なのはちゃん!それに何でネコさんが・・・・・・・・!!!?!」

「桃香さん大丈夫なん!?!」

・・・・・・・・・・待つて!ちょっと待つてよ!!

何でいるの!?!

「アリサちゃん！？すずかちゃん！？はやてちゃんまでっ……………」
「！？」

わたしの変わりに名前を呼んだのはなのはちゃんだった。

同時に視線が女の子からずれてしまう。

どうやら相手はそれを見逃すほど優しくないらしい。

持っていた黒い鎌の金色の刃を飛ばした。

なのはちゃんはとっさにシールドで防ぐけど……………って
！！

「みんな危ない！！」

刃がアリサちゃん達への直撃コースへ。

もう！最悪すぎだよ！！

立ち上がって傍へ駆け寄ろうとすると、

「I a m t h e b o r n o f m y s w o r d ……
…！」

アリサちゃん達の前にユーリさんが現れて、呪文を唱えてから手
前に突き出した。

すると七枚の花弁が出現して、刃を防ぐ。

「おねーちゃん！！」

「ユーリさん！？」

「もうっ何がどうなってるのよ！？」

慌てふためくアリサちゃんとすずかちゃんに笑いかけながら、ユー
リさんは女子のを見て、

「ちょっとちょっとお嬢さ〜ん？事故とはいえ一般人がいるときに攻撃ってどうよ？」

へらへら笑いながら、そう言った。

「まあ、お子さんだからってことで一つ、おねーさんSだけど、ちっちゃい子責め立てるほど酷でもないからにや〜www」

そう言つて、人差し指をクイクイツと動かす。

明らかに挑発しているのが目に見えた。

女の子は少しむっとしてから、攻撃対象をなのはちゃんからユーリさんに変更。

鎌に再び刃をつけて、斬りかかる。

「うーん、速さじゃ一人前だね〜……………けど、防御は三流だ」

ユーリさんはいつの間にか女の子の腕を掴んでいた。

そして思いつきり投げ飛ばしてから、追撃を加えるために走り出した。

雪斗くんは、女の子が危ないと思ったのかな？

刀を抜いてから、ユーリさんに向かっていった。

ユーリさんは軽く飛び上がると体を回転させて叩きつけるような蹴りを。

雪斗くんは刀身に衝撃波を纏わせて、

「崩襲脚っ！！」

「魔神剣っ！！」

どんつと爆発。

ユーリさんが飛ばされてきたけど、うまく受身を取ったので無事。
雪斗くんは所々怪我してたけど、大丈夫みたい。

「ゆ、ユキ……………!」

「問題ない、それより帰ろう、目的は達成した」

雪斗くんはそう言って、手を見せた。

「……………あ!？」

「ジユエルシードが!？」

「そんな!いつの間に封印したんだ!？」

驚くわたし達を他所に、雪斗くんと女の子は帰っていく。
その時、一瞬女の子が振り返って、

「……………ごめんね」

と呟いた気がした。

ネコを見ると、元の大きさに戻っている。

簡単な治癒術を使ってから、すずかちゃんに返した。

ふとアリサちゃんと目が合う。

「洗いざらいしゃべってもらうわよ?」

……………なんだろう、口は動いてないはずなのにそう言
ってる気がした。

s i d e 雪斗

「大丈夫か？」

「うん、投げられただけだから、どこも痛くない」

認識障害をかけてから帰っている途中。

彼女に安否の確認を取った。

たしかに見たところ外傷はない。

あの『ユーリ』と呼ばれていた奴のいったことは本当のようだな。
容赦がない部分が見受けられたが、年下を傷つけるほど冷酷でもないようだ。

「ユキは？あいて、強かったでしょう？」

「ああ、だが今はこちらが勝てるな、まあギリギリで、だが」

乱入者によりあの『桃香』という少女の戦い方は詳しく見れなかったが、実力はかなりのもの。

治療術を使っているところも確認できたから、おそらく中衛に立って前衛をサポートする戦い方だろう。

彼女と戦った『なのは』という子については………経験が無さ過ぎる、といったところか。

多分、最近になって魔導師として活動し始めたのだろう。

だが潜在能力はかなりのものだ。

いつか彼女を打ち負かしてしまうのではないだろうか？

「《あーあーあー、マイクテス、マイクテス》」

………思考に浸っていると、わりとふざけた念話が届いた。

声色からして、『ユーリ』だろう。

「《移動中、あるいは団欒中失礼wwわたくし、ユーリ・ローウエルと申しますww》」

………ぜんぜん『失礼』という気が伝わってこんのだが。

「《えっと、今念話してる………》」

「《簡潔に述べろ、敵か？味方か？》」

なんだかしゃべらせてると本題に入らなさそうなので、やつが何か言う前に割り込んでやる。

ユーリは念話の向こうでうなっていたが、すぐに「まあいいや」と開き直った。

「《ときどき味方、ときどき敵、かにやゝwwあたしや近所から『爆弾』消えればなんでもいいから、そちらさんが劣勢だったらそちらさんにつくし、逆にあちらさんが劣勢だったらあちらさんにつくよゝww?》」

「《………ということは、基本傍観しているだけで、特に手出しはしない、と?》」

「《正解!そういうわけだから、そこんところろしくにやゝww》」

そついうとユーリは一方的に念話を切ろうとする。

だがそつはさせんぞ、聞き出すことが山ほどあるからな。

「《待て、貴様は記憶図書館能力者か?》」

「《前者に暇だから一応待つよゝん?後者に関しては再び正解wwあたしの管理者は暗羅^{オーナー}つてえのつか、なんで分かったのよ?実はその辺にいる魔法使いさんつてあるにゃよん?》」

「《貴様言ったな?》そちらさんが劣勢だったらそちらさんにつくし、逆にあちらさんが劣勢だったらあちらさんにつくよゝ」と《》

「《あーうん、言ったね》」

それが何か?と聞いてくるユーリ。

「《貴様は何故『どちらかが劣勢になる』、と予想できる?普通なら有利なほうにつくだらう?》」

「《………あー、なーんとなく分かった気がする、つまり『どっちかが劣勢になる』って分かってなきや出来ない発言だ?》」

「《そつだ》」

向こうで、今度は納得したように唸ってから、

「《おっと、それじゃあたしはそろそろログアウトよろし？さつき割り込んできた嬢ちゃんたちがもう待ちきれないみたいでさ」ww」

「《……承知した……最後に言っておく、敵に回ったときは容赦せんからな？》」

「《おおー怖や怖やwwまあ了解だでーww》」

それじゃっ、と言って奴はこんどこそ一方的に念話を切った。

「ユキ、どうしたの？さつきから黙り込んで……」

「ん？ああ……なんでもない、ただこれからのことを考えていた」

そういつて、彼女の頭を撫でる。

彼女は気持ちよさそうに目を閉じた。

第十九話死神さんが出てきた時点で、イラギュラーには気をつけましょ？（後書

というわけで三人目転生者の登場でした！

設定は待て次回ということで。

一番苦労したのは飛鳥の『熾天覆う七つの円環』^{ローアイアス}の部分。

なんでルビに変換されないのさ……orz

それでは^^ノシ

第二十話温泉、相談、戦闘（前書き）

遅くなりました・二十話です。

何だか話が長くなっている上にグダグダになっている気が・・・。

第二十話温泉、相談、戦闘

妹を起こさないように気をつけながら、そっと部屋に入り込む。
極力足音を立てないようにして、ゆっくりゆっくり、ベッドで寝息を立てる彼女の傍らに立つてから、手のひらを上に向けた。

「……………ん、準備おk？」

ああ、出来ている。

瞬間、あたしの手の中に拳より一回り大きくて赤くて、丸い『宝珠』を取り出して語りかける。

『宝珠』は一瞬輝いてから、思念通話であたしにOKを出してくれた。

「うし、じゃあ始めまそ？」

了解した。

そうやって、妹の左手に『宝珠』を『入れた』。

side なのは

遂に始まりました、ゴールデンウィーク!!

という訳で、わたし達家族含めるみんなで温泉に向かっています。
お父さんとお母さんも、今日はお店を若い人たちにまかせて、休日
を満喫するつもりみたいです。

「それにしても、本当にあるのねー魔法って」

関心したように車の中で呟くアリサちゃん。

実はこの間、アリサちゃんとすずかちゃんに魔法がばれちゃったんです。

その時一緒に現場にいたユーリさん曰く、

「なつたもんはなつたもんでしょーないだよ、この際全部お話し
まそw」

ってことで、ユーノくんのこととか、ジュエルシードのこととか、
色々話したんだ。

もちろん二人とも最初は驚いてたけど、ちゃんと信じてくれて・・・

ちょっと嬉しかったなあ。

あ、そうだ!

温泉に向かっているメンバーは、わたしとわたしの友達一同と、す
ずかちゃんのお姉さんの月村忍さん、それとファリンさんとノエル
さん。

ちなみにユーノくんはバスケットに入っています。
そして……………

「はやてちゃんは知ってたんでしょ？」

「うん、実際にいくつか使えるけど、念話……………ていうよりテレパシーゆうた方が早いね……………と、ちょっとした射撃くらいしかできひんのよ」

はやてちゃんとユーリさんの八神家！

二人とも身寄りが無いってことで、「じゃあ一緒に！」ってお父さん達が誘いました！

ちなみユーリさんと桃香ちゃんは忍さんが運転するほうの車に乗っているのははやてちゃんとは離れているのですが、多分大丈夫だと思います。

近場で二泊、のんびり温泉に漬かって日ごろの疲れを癒そうと言う、高町家の旅行プランとしてはいつものことです！

side ユーリ
飛鳥

さて、あたしとはやては高町家の皆さんの家族旅行にお誘いを受けて、同行している最中です。

あたしはともかく、はやてにものんびりしてもらいたいしね。
ましてや行先は温泉だ、足に効くんじゃないかな？

……………まあ、そんなんじゃ治らないこと知ってるんだけどさ。

ほら、こういうのって気持ちが一番大事とか言っじゃないww？

という訳で気軽に楽しもうと思ってるぜww

「ユーリちゃん、桃香ちゃん、そろそろつくから準備してね？」

「あ、了解ですw」

「分かりました」

ちなみにあたしと桃香ちゃんはすずちゃんのお姉さん……忍さん言うんだけど、その人の車に乗せてもらってる。

……別に、高町家の車がいっぱいばいばいで乗りきれなかったって訳じゃないんだからね！？

っゲフン！！閑話休題っと。

まあそんなこんなで、あたしは降りる準備をした。

といつても、軽く広げてたメモ（内容は秘密）を片付けるくらいだけどにゃww

なんかそれだけじゃしっくりこないので、無意味に姿勢を正してみた。

「そーいや桃香ちゃん、これから行くところって……」

「うん、海鳴温泉だよ」

「そつかあ、そーいやあたしや温泉っていったことねえや」

「それじゃあ、はやてちゃんも今回が初めてなのね？」

「そーゆーことになりますねw」

まあ、前世では何回か入ったことあるんだけどね。

それなりに気持ちよかったけど、結局効果が実感出来なかったっていう……。

「お、あれっすか？」

「そうだね」

ちょうど遠くの方に、施設が見えてきた。

side 桃香

温泉宿に着いて、チェックインをしてから部屋に入る。
そしてちよつと早いけど、皆で温泉に入ることになので、みんな着替えを持って脱衣所前に集合してる。
ちなみにはやてちゃんは美由紀さんが抱っこして連れてきた。

「わざわざありがとうございます」

「すみません、ほんとならあたしが抱っこしてたんすけど……」

「いいっていいって、子供なんだからもうちよつと年上頼っていいんだよ」

申し訳なさそうにお礼をいうユーリさん、はやてちゃんと、にこにこ笑いながら答える美由紀さん。

確かに、ユーリさんはともかく、はやてちゃんはもうちよつと頼ってもいいと思うなあ。

全員そろったのを確認してから、お風呂に入っていく。
つと、そうだ。

「なのはちゃん」

「うん？」

「きゅっ!？」

「はい恭也さんよろしく」

「あ、ああ」

「え？あ、ああっ!？」

あ、すみません、台詞だけじゃ分かりませんね。

わたしがやった動作を言葉で描写すると……。

なのはちゃんの名前を呼ぶ 体ごと振り返るのはちゃん さり気無くユーノくんを取り上げる そして流れるように恭也さんに渡す。という感じ。

「ちょ、ちよつと！桃香ちゃん!」

「気持ちは分からないでもないけど、ユーノくん一応男の子だよ？
だったらわたし達じゃなくて恭也さん達の方がいいと思うな」

「で、でもっ!」

「まー、いーんじゃにやいのんw？」

ほつぺたを膨らませて反論するのはちゃんをなだめるように、ユーリさんが話に入ってきた。

「姿は動物とはいえ、ユーノくん一応健全男子なんだからさ？」

まだ反論したさそうに、ユーリさんを見るのはちゃん。
ただどさすがに諦めたみたい。

恭也さんの方を見て、

「じゃあ、お願いね？お兄ちゃん」

「ああ、まかせろ」

「それじゃ、あたしらも入ろうぜ？？さすがにこれ以上待たせるわけにもいけないからさww」

ユーリさんの提案にうなづいて、脱衣所に入っていた。

（よかったですねユーノさん、淫獣回避おめでとうございます）
（もう、そう言わないの！）

side ユーノ

た、助かった………！

確かに今は動物の姿になっているとはいえ、やっぱり女湯に男が入るのはどうかと思っていたし………。

かといってあそこで『人間だ』って言うても信じてもらえなかっただろうしね。

桃香には後でお礼言わないと、

「それじゃあユーノ、俺達も入るか？」

「あ、はい！」

そうやって僕は、恭也さんと一緒に入ることになった。

「そうだ、ユーノ」

「？はい？」

「今は客は俺達だけだ」

「あ、そうですね」

確かに、僕達以外のお客さんとすれ違ってないなあ。

でも何の関係があるんだろ？

「というわけで、『戻ったらどうだ』？」

「！はい、分かりました！」

そういうことかあ。

さすがにまだ全快していないけど、元に戻る分には問題ないから・
・・・・。

目を閉じて、自分の下の姿をイメージ、イメージ・・・・。

緑色の光に包まれて、僕は元の『人間』の姿に戻った。

「ふう・・・・・よし」

「それが本当の姿か」

「はい、最初に会ったときも言ったと思うのですが、負傷が酷くて・
・・だから回復しやすいようにフェレットの姿をとっていたんです」

来ていた衣服を脱ぎながら、恭也さんから洗面用具を受け取った。

「その辺は桃香から少し聞いた、確か遺跡の発掘をしている最中に
ジュエルシードを見つけたんだらう？それで護送を頼んだ船が沈没
したとか」

「ええ、それで責任を感じて、この世界に来たんです」
「なるほどな」

浴場に入っただ後、恭也さんに日本のお風呂のマナーを教えてもらった。

side なのは

ユーノくんと一緒に入れなかったのは残念だけど、確かにちよつと強引だったかも。
後で謝らなきゃ。

「温泉つてええなあ〜」

「でしょでしょ〜？」

隣では、はやてちゃんとアリサちゃんが楽しそうに話して、そのまた隣ですずかちゃんが笑っている。

少し離れたところでは、桃香ちゃんとユーリさんが、さらに向こう側で、お母さん達が話していた。

・・・・・・・・・・。

「《ねえ、ユーリさん》」

「《はいはい、何かご用かになーちゃんww》」

「《・・・・・・・・唐突で悪いんですけど・・・・・・・・その、人殺し》ってしたことありますか？》」

何でだろう。

この間の木のこと、桃香ちゃんじゃなくて、ユーリさんに話したらすつきりする気がした。

何だかみんなに聞かれたくなったので、念話で話しかける。

「《あるよ》」

「《やっぱりそうですよ、普通そんな………つてええ！？》」

なんだかすごく重要なことをあつさり答えてくれたの！！

「《回数的に二回ぐらい、人数的には………あ、数えるの面倒だ》」

「《………そう、なんですか》」

「《まあ、二回ともそうしなきゃ救えなかったしね》」

「《え………？》」

「殺さなきゃ救えなかった」って、どういうことなんだろう………

「《一回目はさー、転移の失敗でたまたまどり着いた世界で、悪い人たちに現地の動物がいじめられてたのよね、それでプッチンしちゃって、さくつと》」

「………言い方は軽いけど、その時はどんな気持ちだったんだろう。」

「《んで、二回目は同じ世界で、腹ごしらえしようと思って立ち寄った先の村を襲ってた盗賊団にこれまたプッチンして、それでまたさくさくつと》」

「《………どんな気持ちでしたか？》」

「《気持ちも何も、どっちとも一番最初に思ったのが「ざまーみるw」だったね》」

「《なんとも思わなかったんですか?》」

ちよつと酷い気がするけど………。

「《頭はね、体は結構限界だったみたいでさ、翌日吐いたのよこれ》が」

そう言つてへらへら笑うユーリさん。

………でも、

「《やっぱり、きつくないですか?》」

「《まあ全然つていったら嘘になるかもだけど、特に何も思わないね、さつきも言つたけど、そうしなきゃ今頃もっとたくさんの人や動物が苦しんでたんだから》」

「仕方ないのよ」と、ユーリさんは言つた。

「《………やっぱり、ユーリさん強いです》」

「《やんw強いんじゃないくて、そう言う神経が無いってだけの話よん?そういう点では、おねーさん、なーちゃんがうらやましいけどにや〜》」

「《ふえ?》」

ちよつと意外………。

「《だって、おねーさんは人一人死のうが何にも感じないけどさ、なーちゃんはもちろんと苦しんでるじゃん、赤の他人の為に怖がってるじゃん》」

「《・・・・・・・・》」

「《そーいう『優しさ』ってえの？大切だと思うよ》」

・・・・・・・・『優しさ』、かぁ。

「《戦うことに関しても、人殺しに関しても、ある程度の恐怖は持ってた方がちょうどいいと思うにやww》」

「《・・・・・・・・はい》」

「とにかく」とユーリさんは続ける。

「《死んだ人間は生き返らないってのは、みんな知ってることだから、なーちゃんは間違ってるじゃないよ》」

ユーリさんはそういつて、わたしに笑いかけてくれた。

「《・・・・・・・・そうですか、ありがとうございます》」

「《いいのいいのww》」

「《あ、あのっ》」

最後に、気になることを聞いてみる。

「《最後に教えてください、何でユーリさんは人一人死んでも何も感じないんですか？》」

「《ああ、そゆこと？簡単簡単ww》」

「《感情がないからだよ》」

s i d e 雪斗

現在、俺と彼女らはジュエルシードを探るために、とある温泉宿の近辺に来ていた。

今は俺の隣で、彼女が意識を集中させている。

（しかし、持ったいねえことするなあお嬢も、せつかくの温泉だ、ゆつくりすればいいのによ）

（まあ、『母親』があんなでは、彼女も頑張らざるを得ないかと・・・いいえ、この場合無茶ですね）

（言ってやるな、闇、暗、どっちにしるジュエルシードは回収しなければならぬものだ）

その様子を見て、どこか残念そうに言う闇サワと暗サワ。
ちなみに、この二人は俺の管理者で、闇サワを『闇』、暗サワを『^{アン}暗』と呼んでいる。

（ま、そうなんですけど）

（俺としちゃ、この間の巨木みたいにでかいのが出てきてくれたら面白いけどな、痛めつけがいがありそうだよあ）

さらに補足をいれると、暗は常時敬語の一般常識者、闇は超Sだ。
『ド』ではなく『超』であるところがポイントである。

「・・・・・・・・あ」

会話が一区切りした時。

ちょうど彼女が顔を上げた。

「見つかったか？」

「詳しい場所までは無理だったけど・・・・・・・・だいたいのところなら」

そう言って小さくため息をつく彼女。

よく見ると、額は汗でびっしょりになっていた。

「・・・・・・・・お前も一緒に入ってくればよかったのに」

先に温泉に入っていった仲間　　アルフというのだが　　を思
い浮かべながら、そう言ってみる。
しかし彼女は笑って、

「うん、でも今はジュエルシードを優先・・・・・・・・？」

言葉が途中で終わったので、何事かと思ったが、どうやらそのアルフからの念話らしい。

つかの間黙り込んで、小さく頷いた。

「アルフからだろ、何だつて？」

「この間のあの子達と接触したつて」

あいつ……見た目どおり大胆なことするなあ。

「ほう、それで相手はなんて？」

「それが……」

どこの酔っ払いですかあなたは、人違いくらいなら結構ですけど言うだけ言って爆笑って、あなた喧嘩売ってるんですか？ここまでくるとばっちりもいいところですよ。

「……だつて」

彼女は若干涙を溜めて震えている。

しかし……黒いな；

「だ、誰がそれを言ったつて？」

「えっと、この前ユキと戦ってた人だつて」

……桃香か。

（彼女は怒らせないほうがいいようですね）

（だな、その内もつとおつかねえこと言い出すんじゃない……）
（ありえるな……）

ちなみにこの間、子猫のようになっていた彼女を見て和んでしまったのはここだけの話だ。

side 飛鳥^{コトリ}

（にしてもだ、昼間の人さゝあれアルフさんだよにや？）
（ああ、しかし使い魔か）

会話の内容から察した人もいるかも知れど、アルフさんとあったのよ。

え、そういう描写全然なかったって？

原作とほぼ変わらないから作者が描くのを面倒くさがったのよ。

（そうだね……そろそろあの子らの誰か、呼ぶ？）

メタ発言は自重してつと………。

ほら、よくいうじゃない、『目には目を』ってさ。

っていう訳で、別の世界で待機させてる使い魔の内の一人を呼び出そうかって話になってる。

………ちなみに言つと、『目には目を』で有名な『ハナムラビ法典』だけど。

本当は『目をつぶされたら、つぶした相手の目もつぶさせたれっ！』っていう復讐の法律なのよね。

あ、ちなみにあたしらは部屋にいるんだけどにや。

うん、めっちゃめっちゃ広いわwww

思わずはやてと一緒にごろごろやったよ、三往復くらい。

晩御飯もおいしかったし、現在子供組は寝室でお休み（つつても、あたしと桃香ちゃんは起きてるけどw）で、大人組は隣の部屋で談笑中。

時間的にも、ジュエルシードがそろそろ発動してもいいと思うけど

「《っ、なのは！桃香！ユーリさん！！》」

にや〜って、発動したんかいっ！

ユーノくんの言葉に反応したのか、なーちゃんががばつと起きて、あたしと桃香ちゃんを見る。

そしてそのまま頷きあつて、アリサちゃんとすすちゃんとはやてを起こさないように部屋を出て、なーちゃんはバリアジャケットを、あたしと桃香ちゃんは武装して、夜空へ飛び立った。

あ、ちなみに士郎さん達へは置き書きをやっておいた。

閑話休題。

しばらく飛行していると、一筋の光が見えた。

一気に速度を上げて近寄ってみると、棧橋のすぐ近くからその光が伸びているのが分かる。

そのすぐ側には……………。

「あ……………」

「あの子……………」

フェイト嬢と雪斗がいた。

すでに封印処理は済んだみたいで、あたし達が地上におりる頃には光は収まっていた。

「んじゃ、あたしは一応中立だから」

「分かってる」

桃香ちゃんと短い会話を済ませて、再び空へ。

ある程度高い所で戦いの行く末を見守ることにした。

side なのは

目の前にいるのは、この前すずかちゃん家で出会った女の子。
この子の目を見たときから、ずっと気になっていたことがある。

「あの時の魔導師・・・・・・・・か」

どうして、そんな寂しそうな目をしているの？

「あゝららゝ、あたし言わなかったっけ？」

急に声がしたので振り向くと、昼間あつた女の人がいた。けど、普通じゃないってことがすぐに分かった。だって、犬の耳と尻尾が生えてるんだもん。

「いい子は大人しくしてないと、ガブツといくよってね？」
「やっぱり・・・・・・・・なのは、あの人使い魔だ！！」

女の人を見て、ユーノくんが叫んだ。
『使い魔』って確か・・・・・・・・。

「そうさ、存在のためにご主人様の魔力を食らう、その代わりに守ってあげるのさ、命を懸けてね！！」

すると女の方は、全身から魔力を出して体を変化させる。
次の瞬間には、女の方の姿は狼に変わっていた。

「実質三対三、かぁ、やれる？なのはちゃん」

真剣な表情でわたしを見てくる桃香ちゃん。
・・・・・・・・この前みたいに勝負にすらならないと思うけど。
でも、

「大丈夫！」

何にも出来ないのは嫌だもんね！

「そっか、じゃあわたしはまた・・・・・・・・・・」

桃香ちゃんは、あの子の隣に居る男の子（名前は雪斗さんだったと思う）を見る。

「ユーノくんには、あの使い魔の人を頼んでいい？《なるべくなのはちゃんから離してね？わたしはともかく、経験上どうしてもこっち側が不利だから》」

「まかせて《わかった》」

ユーノくんは真っ先に飛び出て、あの使い魔さんに向かっていきます。

何か仕掛けようとしているのを感じたのか、使い魔さんは毛を逆立てて、

「させると思っているのかい！？」

「させてみせるさー！！」

二人の足元には、きれいな緑色の巨大な魔方陣。

「なっ、まさか転移魔法・・・・・・・・・・」

使い魔さんが何かを言い切る前に、二人はどこかへ消えてしまった。わたしはレイジングハートを構えて、目の前の子を見つめる。

「・・・・・・・・話し合いで、どうにか出来ないかな？」

「・・・・・・・・きつと、何を言っても無駄だと思う」

何とか戦わないでの解決を提案するけど、ばっさり切られた。

「戦うしか、ないの？」

「そうだね……賭けて、互いのジュエルシードを一つずつ」

女の子は言うなり、杖を鎌に変形させてわたしに突っ込んできた。わたしはとっさにプロテクションで防ぐけど……。

一撃が重いつて、こういうことなんだろうね。

少し離れたところでは、桃香ちゃんと雪斗さんが戦っていた。

「……………」

女の子はまた鎌を振る。

鎌はわたしのプロテクションを壊して、わたしに迫ってきた。思わずそれを腕で受け止めたけど…………。

「つつわ……………!!」

電気をまとってる!?

一瞬体中がしびれて、動けなくなる。

幸いなのは非殺傷設定ってことなのかな？

けど、腕から少し血が出てきた。

女の子は一旦離れて、今度は電気で出来た発射体を撃ってくる。

わたしはそれにディバインシューターで立ち向かう。

「……………バルディッシュ」

『A s o n i c m o v e』

っ、女の子が消えた……………違う! 追いきれない速さで動

いているんだ!!

証拠に、消えたすぐ後から攻撃が始まった。

すぐにフィールド系のバリアで防ぐけど、一撃一撃が強くて、防ぎきれない!

そして急に女の子が目の前に現れて、鎌を振ってきた。

まずい、首が狙われて・・・・・・・・!!

「へーい、そこまでねんww」

ガキンッと音がすると同時に、ユーリさんの声が聞こえた。

反射的に閉じていた目を開けると、刀に止められている鎌が見える。すると、レイジングハートが一回光ってから、

『Put Out』

ジュエルシードを一つ出した。

「レイジ・・・・・・・・っ」

レイジングハートにむかって思わず「何してるの!？」と言い掛けで、黙った。

あの子さっき言ったもんね、「互いのジュエルシードを賭けて」って。

わたしは負けた方だから、ジュエルシードをあの子に渡すのは当然・・・・・・・・。

「きつと主人想いのいい子なんだね・・・・・・・・ありがとう」

女の子は寂しそうな目を変えないままで、そう言った。

ジュエルシードはゆっくり静かに動いて女の子のデバイスのコアに

入っていった。

ユーノちゃんと桃香ちゃんの戦いも一段落ついたみたいで、わたし達のほうに走ってきていた。

「・・・・・・・・こちらの勝ちか」

「さっすがあたしのご主人様！」

冷静に言う雪斗さんと、素直に喜ぶ使い魔さん。

女の子は二人に向けて小さく頷いてから、

「・・・・・・・・帰ろう」

女の子が離れていく。

ジュエルシードを探し続けていれば、またぶつかる事になるんだろうな。

・・・・・・・・でも、やっぱり何も分からないまま争うのは嫌だ。

「あのっ、まって!!」

思わず女の子を呼び止める。

どうしてだか、自分でも分からないけど・・・・・・・・。

「あなたの、名前は？」

これだけは聞かなきゃいけないと思った。
女の子はわたしを少しだけ見つめてから、

「・・・・・・・・フェイト・テストロッサ」

「フェイトちゃん・・・・・・・・わたしはっ」

女の子、フェイトちゃんは名前を言ってくれた。

だからわたしも名乗ろうとするけど、フェイトちゃんはそれより早く、この場から帰ってしまった。

・・・・・・また、会えるかな？

第二十話温泉、相談、戦闘（後書き）

この小説のテーマは『原作破壊』。

というわけでユーノくん淫獣回避です。

ユーノファンの皆さん、よかったですね（笑

ついでにフラグをまた一つ立てました。

それでは^^ノシ

第二十一話レベルアップと『炎姫』（前書き）

全開、あ、違った、『前回』更新した後に気付きました。

雪斗の設定のつけてなかった……！orz

あとがきに乗っけています！

それでは二十一話どうぞ！

追記：11/24、ちよこつと修正。

第二十一話 レベルアップと『炎姫』

槍を振ると、刀で起動をそらされる。

それでも、少し傷をつけることは出来た。

すると相手は刀を槍に交えたまま、刀身をこちらにずらしてきた。

刃は少し刃こぼれしながらも確実にわたしへ迫ってきている。

対するわたしは無防備、唯一の武器は刀で防がれている。

流石にまずいと思って、とっさに目を閉じた。

「・・・・・・・・・・っ!？」

というところで目が覚めた。

呼吸が乱れて、のどが苦しい。

無理矢理整えてから、とある戦法が頭に浮かんだ。

side 桃香

「ねえ、桃香ちゃん……お願いがあるの」

「？なあに？」

温泉の一件から数日後。

なのはちゃんが突然真剣な表情で話しかけてきた。

ちなみにわたしが居るのは道場。

……この間の温泉での戦闘の時、間合いに入り込まれて大変だったから。

槍は扱いが簡単だけど、リーチが長すぎてあんまり接近されると駄目っていう弱点がある。

だから思いついた戦法を練習していた。

その素振りを一旦止めて、なのはちゃんの話聞く体制を取る。

「わたしに……槍の使い方、教えて」

「……はい？」

ちよつと……意外かも。

なのはちゃんは、お世辞にも体力があるとは言いつらい。

それなのに槍を教えると言って来た。

「どうして？」

理由を聞いてみる。

「……この間、温泉でフェイトちゃんと戦ったとき、何も出来なかったから……あのときユーリさんが割り込んできてなかったら、わたし、多分ここにいない」

「そっか……でも付け焼刃の戦術じゃ叶わないよ？あ

の子達と初めて会った時、いったでしよう？あなたとフェイトちゃんじゃ、経験の差がありすぎるって」

「そうかもしれないよ……けど、強くなりたいんだ、フェイトちゃんと話し合うためにも、あの大きい木の時みたいに死ぬ人を出さないためにも」

「……………」

……………そうだね。

力が届かなかつたり、何も出来なかつたりっていうことほど、辛いことは無いもんね。

だけど……………。

「どうするの？ジュエルシードも探さなきゃいけないのに」

「それはボクがやるよ、一人でも出来るから……………」

そういうのはユーノくん。

でもそうはさせないよ？

「駄目、ユーノくん、まだ完治していませんでしょう？こういうのもなんだけど……怪我人だから自重しなさい、今のあなたは足手まといだよ」

「うぐっ……………でも、どうやってなのはの実力をあげるの？桃香、教導の経験ないし、いつまたああの子、フェイト達来るか、分からないんだよ？」

うーん……………そこなんだよねー。

（主、ちょっと）

？藍桜……………？

(どうしたの?)

(ええ、実は面白いものを見つけてまして、今データを出します)

目の前にウィンドウが現れる。

これって……………。

side 飛鳥^{コトリ}

「あ、せや、おねーちゃん」

「ん?何よ?」

さつとと、あの温泉でドンパチから数日。

あたしもはやても無事我が家に帰ってきて、現在リビングで二人そろってのんびりしてる。

で、はやてが何か思い出したらしくて、話しかけてきた。

「あんな、最近変な夢見るようになったんよ」

「夢？」

「うん、なんか変な広場のご真ん中にうちが立ってるねん、すごいなー思つて走り回ったり、飛び回ったりしてると、足元になんかの魔方陣が出てくるんよ」

「それってどんな？」

するとはやては白い紙を取つてくると、鉛筆でその魔方陣の大雑把な形を描いてゆく。

「こんな感じの、なんか真ん中辺りに翼つぱいがあるんよな」

「ほうほう、それで？」

「そしたら、魔方陣の縁ふちいうのかなあ？そこから火みたいなんがぶわーっと湧き出てくるんよ」

そういうとはやては、「ぶわーっ」の部分でまだか細い手を命いっぱい広げた。

うん、可愛い、萌え。

・・・・・・・・げふん。

「でもな、その火熱く無いんねん、あ、熱がないってわけじゃないんよ？ただなんというか、こう・・・・・・・・あつたかい？なんかそんな感じなんよね」

「ふーん、それでその後どうなるのよ？」

「うん！でな、そのあとその火が人の形になつてな、何か話しかけてくるんよ、けど・・・・・・・・全然聞こえへんのやあゝ」

はやては頭を抱えて、おでこをテーブルにあてた。

あたしは苦笑いしながら。

「でも全くつてわけでもないじゃろ？ちよつとでも聞き取れた部分

とかは？」

「うう……あ、そういえば、『どらい』がどろのうの言つてた気が……」

「『どらい』、ねえ」

「うん、何なんやろうね？」

そうやって、あたしとはやてはそろってうん、と考え出した。

（『あいつ』がはやてになじみ始めたようだな）

（だね、あとはあの子が覚醒^{めい}めるのを待つばかり、か）

side なのは

「なのは？何かあったの？」

「そうだよなのはちゃん、元気ないよ？」

「ふえ？・・・あ、アリサちゃん、すずかちゃん」

桃香ちゃんに槍を習い始めてから三日くらい。

学校で、机に突っ伏してると、アリサちゃんとすずかちゃんが話しかけてきた。

「・・・この間のあの子のこと？」

「っ・・・にはは、やっぱり隠し切れなかったか」

体を起こして、二人を見ながら、

「・・・完敗だった、手も足も出なかったよ」

「そ、そうなの？」

「うん、何と言うか・・・経験の差がありすぎるんだよね」

今のわたしは、苦笑いをしているんだろうな。

アリサちゃん、すずかちゃんはちよつと寂しそうな顔をして、わたしを見ている。

「・・・ちよつと暗くなっちゃったかな？」

「あ、でもね、最近桃香ちゃんに槍を習ってるんだ、これでちよつとは敵えばいいと思うんだけど・・・」

「でも相手は強いんでしょう？大丈夫なの？」

「そうだよ、怪我とかしたら・・・」

「まあ、やらなきゃ分らないよ、それに前より戦えると思うな」

心配してくれるのは嬉しいけど、わたしだって負けるわけにはいかないもんね。

「むう・・・ま、無茶だけはしないでよね？」

「にやはは、分かつてる」
「怪我には十分気をつけて」
「うん」

side ???

夜。

ビルの上にて『爆弾』を搜索しつつ、主様を待っている。
しかし……議論の末くじ引きで決めたとはいえ、残してき
たみんなには少し申し訳ありませんね。

むこうに戻る時はお土産でも持って行きますか。

「ごめん、お待た〜」
「主様！」

思わず膝をつきかけましたが、何とか抑えて一礼だけですませる。
主様はこういった『固いこと』は苦手なおかたですからね。

「ごめんにゃく待たせちゃって」

「いえ、先行して安全確保するのも役目です」

「あははー、ありがと」

そういつて、気さくな笑顔を見せてくれました。

「……おや？　そういえば幾ばくか曇っていますね？」

確か予報では一日晴れ……だったはずですが。

それに……。

「魔力を感じるねえ」

「はい」

時々ですが、一瞬暗雲の中に稲光が走るのが見えます。

おそらく、魔力変換『電気』を持っている者の仕業と思われるが……。

「主様、心辺りは？」

「あるある、ありすぎて困っちゃうww」

困る、と言っている割には余裕そうですが……それが主様ですから、仕方ないでしょう。
つと、

「結界が展開されましたね」

「おうよwwこの魔力はユーノくんだね、行くよ？」

「承知」

そして私と主様は、ビル街を跳んだ。

side なのは

ユーノくん、桃香ちゃんとジュエルシードを探してて、もうタイムアップかな？という時に、発動した。

雷を使って無理矢理発動させたみたいだけど・・・。
魔力からして、フェイトちゃんじゃない、じゃあアルフさん？
とにかく！ジュエルシードのところにいかないと！

「《桃香ちゃん！ユーノくん！》」

「《分かってる！》」

「《いくよ！》」

「《うん！》」

念話で短く話してから、ユーノくんが結界を展開、わたしはレイジングハートを首元から取り出して、

「いくよ！」

《All right, my master》

「セーット！アープ！」

桜色の光のあと、バリアジャケットをまとって、空を飛ぶ。
しばらくビルの間を進んでいると、向こうに青い光。

「見つけた！」

レイジングハートをシューティングモードに切り替えて、砲撃をチャージ。

そのまま撃つ！

「バスターッ！」

「ファイアッ！」

フェイトちゃんも近くにいたみたい。

金色の砲撃と、桜色の砲撃が、ジュエルシールドにぶつかって、封印した。

ジュエルシールドの近くに来て、わたしは見つめる。

「フェイトちゃん……………」

「……………」

フェイトちゃんはただ黙って、わたしを見るだけ。

後ろからは雪斗さんとアルフさんが走ってきている。

わたしの方からは、桃香ちゃんとユークンが来ていた。

「……………この間は、自己紹介できなかったけど……………聖祥
小学校三年生！高町なのは！」

聞いてくれていると思うけど、もしかしたら聞いてないのかもしれない。

それでも、わたしの名前をあの子に伝えたかった。

「・・・・・・・・・・」

フェイトちゃんはただ黙ったまま、杖（多分バルディッシュって名前だったと思う）を鎌に変えて、斬りかかって来た。

わたしは咄嗟にレイジングハートでそれを受け止める。

それを合図に、また戦いが始まった。

side 桃香

わたしが横一閃を繰り出すと、雪斗くんは縦一閃でそれを弾く。雪斗くんが突きを繰り出してくると、わたしは顔を横にずらして、槍でいなした。

しばらく金属音だけが続いてから、同時に距離を置いて、

「・・・・・・・・・実力を上げたか」

「こてんぱんにやられて何もしいってのもどうかと思うしね」
「なるほど」

そうやって、また打ち合いが始まる。

ふと、雪斗くんが視線を逸らした。

その先にあるのはフェイトちゃんとなのはちゃん。

戦いつつ、二人を見てから、

「・・・・・・・・あの子も、動きが変わっているな？」

「やっぱり分かる？」

今のわたしはきつと、いたずらっぽく笑っているんだろう。
雪斗くんを見ながら相手の出方を伺う。

「あえて何も言わないけど、とりあえずわたしたちを舐めないで
てこと」

「・・・・・・・・そうか、承知した」

「ところで」雪斗くんは続ける。

「気付いているか？」

「・・・・・・・・うん」

『何に』と言わなくても分かる。
わたしも雪斗くんも一点を見つめた。

「ユーリ・ローウェル・・・・・・・・といったか」
「うん」

今回はかなり遠くにいる。

それに、隣には覚えの無い気配があった。
仲間か何かなのかな？

ここからだ、存在しか確認できない・・・・・・・・。

「まあ、とにかく邪魔しなければ俺は構わんがな」
「あはは、同感だよ」

と、会話が終わると同時に雪斗くんは切りかかってくる。

しかも、わたしの間合いに入ってきて、だ。

前にも言ったけど、槍はリーチが長い分、間合いに入られると防御が取れないって弱点がある。

熟練の人なら、そんなことが滅多に無いが、対策を立てているかしているんだろうけど、わたしは生憎素人。

そんなわたしに出来ることは、対策を立てるくらい。
だから、

「ふっ………」

「……っ!!」

「……ふふふ、驚いてる驚いてる。」

相手の力を利用して、何とか弾き返してから再び体制を立て直す。
雪斗くんは、わたしが片手に持っている物を凝視している。

「………短槍、か」

「そう、普通の槍に比べて短いけど、今みたいに間合いに入られた時には便利なんだよ?」

「なるほど、だから『舐めないで』か」

「そうだよ、けど、これだけで驚かないでよね?」

そう言って、なのはちゃんの方に目をやった。

side フェイト

「やあっ！」

「はっ！」

もう、何度目なのかな？

あの子の杖とわたしのバルディッシュが、また火花を散らしてぶつかりあった。

始めの内は、少し腕が上がっていると思っていたけど、違う。これは少しどころの話じゃない。

あのネコの時や、何日か前の戦闘とは比べ物にならない。

それに、誘導弾も打ち出してきた。

一体……この何日かで何があったって言うの！？

また罅迫り合いをした後、いったん離れた。

「………いつたい何をしたの？」

「そうだね、早い話………舐めないでってこと」

「………」

本当に………何日か前に会った時より強くなっている。

「………始めは、ユーノくんのお手伝いっただけだったの、それに桃香ちゃんだけに戦わせなくなかったから」

ゆっくり、目の前の子は話し出す。

「だけど………ある時にね、わたしのミスで、たくさんの人

が怪我したの……だから、もう二度とそんなことが起きないように、誰も傷つけないために」

「……目には、誰にも動かせない『想い』があった。
二つのそれはまっすぐわたしを見ている。」

「これが！わたしの理由！！」

あの子ははつきり、そう叫んだ。

「フェイトちゃん！あなたがジュエルシードを集める理由は何！？
わたし、何も分からないままぶつかるのは嫌だ！！」

「……何で分からない、けど……………」

この子に、話してもいい気がした。

「……………わたし」

「言わなくていい！！」

突然アルフが叫ぶ。

「優しくしてくれて、理解してくれるような人たちの中でぬくぬく
育ってきた奴に、話さなくていい！！今のわたしたちの最優先事項
は、ジュエルシードだ！！」

「……………っ！」

「……………そうだ、わたしの目的はジュエルシードだ。」

こんなところで、何を迷っているんだ！！

「確かに！」

気を引き締めて構えたとき、あの子が声をあげた。

「確かに甘ったれた子かもしれないよ！だけど！覚悟だけは誰にも負けない！！」

まっすぐな目を崩さないまま、そう叫んできた。

思わず、アルフも黙ったようだ。

その時だ。

ジュエルシードが、強烈な光を放ったのは。

f r e e s i d e

それは突然の出来事だった。

ジュエルシードが、眩い光を放つと同時に、辺り一帯がゆれ始めたのだ。

『地面』ではなく、『空間』が、唸りをあげて揺れている。

すると、本能的にそれをまずいと感じたのか、なのはとフェイトが

同時に動き出した。

数十秒と経たずに二人はジュエルシードのもとへ到着。
互いの杖をジュエルシードに向けた。

事が急だっただけに、二人は気付かなかったのだろう。

無理も無いかもしれない、ジュエルシードに触れたものは全て願いを歪んだ形で叶え、暴走してきたのだから。

しかしそれでも、『ミス』は『ミス』である。

「封いつああ!!」

「封つうわああ!!」

突然ジュエルシードから発生した衝撃波で、二人とも吹き飛ばされた。

ジュエルシードの

二人はそのまま成す術無く地面に叩きつけられ、痛みに思わず体を縮める。

桃香と雪斗は、呆然とその光景を見る。

どちらかが、ぽつりと呟いた。

「・・・・・・・・まさか、次元震？」

side なのは

痛い・・・・・・・・体中がズキズキする。

目を開けると、未だに光を出しているジュエルシードがあった。

・・・・・・・・このままほっといたら、また誰か死んじゃうのかな？

あの時みたいにな？

・・・・・・・・マタ、タクサンシンジャウ？

「・・・・・・・・っ」

立ち上がって、走り出す。

行き先は、ジュエルシード。

フェイトちゃんも、同じように走り出していた。

手を伸ばす、ジュエルシードを掴む。

気付いたら、わたしもフェイトちゃんも、デバイスを持っていなかったけど・・・・・・・・。

もう、関係ない。

両手で包み込んだ途端、手がすっごく痛くなった。

「うああ・・・・・・・・」

「ぐうあ・・・・・・・・」

それでも、止めない。

また、誰かが死ぬなんて、また、あんな思いをするなんて・・・・・・・・。

思わず、わたしもフェイトちゃんも笑顔になる。

けど・・・・・・現実には甘くないって、このことを言うんだね？

次の瞬間には、わたしもフェイトちゃんも、また飛ばされていた。
ジュエルシードの光はさつきより強いし、揺れも大きい。

『絶望』って言葉が似合いそうだけど・・・。。。

でも、諦めたくない。

けど、体が動かない。

遠くの方で、アルフさんとユーノくんが叫んでいるのが聞こえる。

桃香ちゃんと雪斗さんは、動こうにも動けないみたいだ。

流石にもう終わりかなって考え始めた時だ。

ジュエルシードのすぐ側に、女の人が立った。

真っ白なコートに、同じくらい真っ白な髪の毛。

毛先は少しだけ桜色になっている。

その人は、腕を振り上げると、

「・・・・・・封印術式『魔女狩り』、発動」

何かを呟きながら、ジュエルシードを殴った。

その瞬間、光が収まる。

女の人はジュエルシードを手にとってからわたし達を見て、

「主様より皆様へ言伝です、『ちよつと気が変わった、しばらく一個だけあたしに預けてくれないかい？』・・・のことです」

みんな、目を点にした。

free side

突然の乱入者に、一同は驚愕と警戒心を抱いていた。

無理もないだろう、いきなりジュエルシードの暴走をパンチ一つで収めたと思ったら、『主からの伝言』でジュエルシードを持つていくと宣言したのだから。

「ど、どうということだ！？それが危険だって分かっているのか！？だいたい！君の主っていったい！？」

ユーノは焦り故の大声で、乱入者に問いかける。

乱入者は全員の顔を見渡しながら、

「危険だと承知しています、故に皆様が集めているということも」

「だったら……！」

反論しようとするユーノを乱入者は手で制して、

「ですが、主様としては毎回ドンパチやられるのもハラハラしてしまふそうで、今のあなた方の行為は、爆弾の傍で花火などの火遊びをやっているようなものですから」

冷静にそう告げた。

ユーノはそれを聞き、「しまった」という表情になった。

「というか、十分な封印処理もせずに戦闘など、危険もへったくれも無いじゃないですか」

乱入者はあきれたように首を横に振る。

一方のユーノは押し黙り、俯いてしまう。

「……………一ついいか？」

「ええ、答えられる範囲でなら」

そんなさなか、雪斗が手を上げた。

「きさまの主というのは……………ユーリ・ローウェルか？」

「肯定、自己紹介がおくれましたね、わたしはヒノコ、主様より『炎姫』の肩書きを授かった使い魔でございます」

乱入者、ヒノコはそう言うとお辞儀をした。

すると今度は桃香が口を開く。

「今度はわたしから、ユーリさんの目的は？」

ヒノコは桃香に体ごと向き合ってから、

「主様の考えはこうです、まず我々がこの一つを預かります、そしてあなた方のジュエルシードの持ち数がそれぞれ10になった時、互いのジュエルシード全てと我々が持っているジュエルシードをかけて、勝負をしようじゃないか、ということです」

それを聞き、一名を除く者達は納得の顔をしている。
そう、『一名』を除いて。

「…………ふざけんな」

低い震えた声で、そう言ったのは、

「アルフ……………」

フェイトが、さみしげにそう呟く。

「フェイトは一個でも多く集めなきゃいけない理由があるんだ!!
それをお前なんかに渡してたまるか!!」

「ほう?では、あなたはそのまま何もせずにいると?言っておきま
すが、今回一步間違えればこの世界がなくなっていたのかもしれない
んですよ?そうなってしまえば困るのはあなた方では?」

「それでも構わないさ!あたしはフェイトが幸せになれるならなん
だつてするつて決めたんだ!!」

感情に任せ、ヒノコにさんざん言い返すアルフ。

一方のヒノコは肩を少しあげて、戻してから、

「その心意気は立派ですが、あえて言わせていただきます、あなた
のそれはただの駄々こねですよ?」

「…………うるさい!!」

ヒノコの挑発めいた発言に、とうとうアルフの堪忍袋の緒が切れる。
するどい右ストレートがヒノコに迫るが、彼女は呆れたようにため
息をつく、慣れた足取りで体をずらし、左手で受け止めた。

そしてそのままアルフの力を利用して、後方へ投げ飛ばす。
アルフは体制を崩すも、地面に手をつき、ばねの容量で立ち上がった。

そして再びヒノコに接近、アッパーを繰り出す。
ヒノコはそれをまたも簡単そうに避けると、

「精神に乱れがあるようですね、その程度で戦うなど・・・戦いを舐めているのですか？」

「お前えええっ！！！」

再び振りぬかれるアルフの拳を、ヒノコは驚づかみにした。

「もうあなたの相手はしてられません、いい加減帰らねばお嬢様を心配させてしまいますし・・・とりあえず、終わりますしょう？」

刹那、アルフを掴んでいるヒノコの手が、熱を帯び発火した。

「ブラスト！」

「がつぐああああ！！！」

炎を纏った一撃が、アルフの腹に直撃、そして派手に吹っ飛ばされる。

「アルフ！！この・・・！！！」

大分回復したらしい。

フェイトがまだふらふらとする体で立ち上がり、バルディッシュをヒノコに向ける。

そして帯電した短槍を数本生み出して、

「ファイアー!!」

ヒノコへと発射した。

咄嗟のこと故か、反応しきれなかったヒノコは直撃を受けた。

「っづあ……………!!」

雷撃を受け、ヒノコは膝を着き倒れる。

だが、あまりの呆気なさにフェイトはポカンとしてしまった。

ジュエルシールドを拳一つで封印し、今まで自分の使い魔を圧倒していた相手が、雷撃で倒れたのである。

「フェイト!」

「あ、アルフ! うん、お願い!」

戸惑いながらも、ジュエルシールドを手に入れる好機と判断。アルフを向かわせた。

「はいストーップ! 試合しゅーりょー!」

突然アルフの目の前に、軽い口調とともにユーリが落ちてきた。ヒノコを護るようにして立ち、刀の切っ先をアルフに向ける。

「主様……………申し訳ありません」

ふらふらと立ち上がり、申し訳なさそうに頭を下げるヒノコ。

ユーリはへらへらと笑いながら、

「しゃーないしゃーないww あんたの素体の弱点が電気ってだけの

話だしよ〜?」

言いながら、ヒノコの手から落ちたジュエルシードを拾い上げる。アルフの視線が鋭くなった。

それを受けたユーリは考える素振りを見せると、徐にジュエルシードをポケットに入れ、歌いだした。

「ポケットの中にはジュエルシードが一つ」

歌いながら、ポケットを軽く叩く。

「もひとつ叩くとジュエルシードが二つ」

ポケットから取り出されたのは、二つのジュエルシード。

「へ?・・・ええええっ!!?」

思わずその場の全員が大声を上げる。

「というわけで、良い子の二人にプレゼントw」

そう言うと、なのはとフェイト、それぞれに投げて渡した。

「んじゃ、おねーさん達はここでさよならするわよんw」

ひらひらと手を振り、ユーリは夜空へと跳ぶ。

ヒノコも一礼してから、ユーリに続いた。

「《ユーリさん》」

「《ユーリ》」

「《んお？どうしたよお二人さんw？質問なら受け付けるよんww》」

「《あのもう一つのジュエルシード、どこで手に入れた？》」

「《ああ、あれ？来る途中に拾った》」

「《ひ、ひろったあ？》」

「《おうよwwちょうどいいやーってことで、封印して持ってきたけどにやwwあーそうだ雪斗ちゃん？》」

「《………何だ？》」

「《あんたに関する『予言』を一つプレゼントねw桃香ちゃんもそのときに介入しなきゃだから、聞いててよんw》」

「《わたしも？》」

「《そそww『あの子のママンとガチバトル』、そゆわけだから、雪斗ちゃん気をつけてねw》」

「《あ、待て！………一方的に切りおった……………》」

第二十一話レベルアップと『炎姫』（後書き）

飛鳥ユウリが最後にやった予言は、最近気になってる『大神』のウシワカというキャラを意識してみましたww

それと、飛鳥の使い魔も出してみたり……。

詳細はかなりあとで公開すると思います。

早速次回、ガチバトルです。

できれば黒之フルボッコまで行きたいな。

その前に雪斗の設定どうぞ^^

沢城雪斗（12・男）

身長：男子の平均より遙かに上、中1でも通じそう。

体重：男子の平均

管理者：オーナー闇サワ、暗サワ

能力：ライフフラリ記憶図書館、ソードマスター刃ノ達人、???

詳細：記憶図書館の管製人格により故意に死亡させられた転生者の

一人。

前世の実家が武家だった故か、物静かで、常に物事を冷静に取ろうとする姿勢を持つ。

フェイトやアルフには、素性が分からない自分を拒むことなく受け入れてくれた恩義を感じている。

そのためか、共に行動していることが多い。

戦闘では、主に居合いや強力な足技でのダウンを狙ってくる。

純粹な剣術だけならほとんど負けなし。

能力の関係上、唯一オーナー管理者が二人いる。

ちなみに前世は女性、だが日常的に男のような振る舞いをしていたため、転生後性転換してもなんら影響はなかった。

転換の原因は記憶図書館ライフフラリの管製人格が、前世の生き様と胸部から、男と誤認したため。

一話更新することにより、重くなっている件or
z
今回なんて20KB記録したんだぜ・・・。

第二十二話VSおかーさん（前書き）

あけましておめでとうございました！

ちよーっと『いろいろ』あつたとはいえ、更新が遅れましたことを
お詫び申し上げます。

それでは本編どうぞ！

第二十二話VSおかーさん

side 雪斗

「そろそろ、母さんに報告に行こうと思っているんだ」
「な、行くのかい!？」

あの次元震から数日。

フェイトがどこか暗い面持ちでそう提案してきた。
アルフはかなり慌てた様子で、フェイトに寄る。

「うん、ジュエルシードもだいたいぶ集まってきたしね」
「しかしフェイト、大丈夫か？」

「……………あの『母親』が、フェイトにまともな態度を
取ると思えない。」

「大丈夫だよ」

俺の問いかけに、フェイトはただ笑うだけだ。
まったく……………。

「無茶をしおつて……………」
「ん？何か言った？」
「いや、何も」

side 桃香

「うん、だいぶ回復したね」

「ほんと!？」

「けどまだ『門の中』での練習は駄目、もうしばらくマルチタスクで練習だね」

「あうつ……………」

今、なのはちゃんはどこか不服そうにぷくつとほっぺたを膨らませてる。

思わず、『可愛いな』って思ってから、頭を撫でた。

あれから数日。

なのはちゃんの怪我也だいぶ治って、生活には問題が無いレベルに達している。

最初のころはちょっと楽しかったな。

両手が使えないからって『あーん』をしてあげたら顔を真っ赤にして照れるし。

久々に一緒にお風呂にも入ったつけ？

けっこう懐かしい体験をしたもんだよ。

……………ん?『門の中って何?』って?

それはね、

(にしてもちよつと驚いたかも、まさか『MAR』の『修練の門』が入ってるなんてね)

(ですがお陰でなのはの實力も上がっています、あわよくば、フェイトと互角になれるかもしれません)

(そうだね、なのはちゃんがんばってるし、わたしも負けてられな

いな！

(はい)

『修練の門』の中は異空間だから、時間は現実の60分の1。

分かりやすく言うと、修練の門の中で60日いても現実ではたった1日しか経過してないんだ。

だから手っ取り早く強くなりたいとき……って言ったらちよつとあれだけど。

とにかく、現実で数日経たずに実力を上げることが出来る便利なアイテムなんだよ！

だからそのお陰でなのはちゃんもはじめに比べたら実力がかなり上がっている。

マルチタスクで練習し始めたなのはちゃんを見つめながら、わたしはなのはちゃんを診るために展開していた術式を閉じた。

side はやて

今日のおねーちゃんはどこかピリピリしてる。

いや、な、顔はいつも通りにこにこしてるんやけど、その、何と言うか……。

『出撃前の兵隊さん』……？

なーんかそんな感じがするんよね。

今だって、ほら、

「なるほど、そういうことが・・・」

「そそ、でだ、調べて分かったことが・・・」

かなり真剣な顔でヒノコさんと話してる。

ちなみにヒノコさんは何日か前からうちに住み始めたおねーちゃん
の使い魔さん。

見た目は綺麗なお姉さんで、胸もなかなか・・・っと、ア
力な。

ただ、どうも丁寧すぎるというか、固すぎるというか・・・。

おねーちゃんに対しての『主様』はともかく、うちに対しては『お
嬢様』やで？

照れくさいというか、何と言つか・・・。

ええ人っていうのは分かっとなるんやけどな。

素体は・・・なんやっただけ？

何か凄いのだったのは覚えとるんけどなあ・・・。

バシーン・・・・・・・・

バシーン・・・・・・・・

「たった三つとはどういうことなのフェイト!?」

なんでだよ・・・・・・・・。

「悲しいわフェイト!あなたそれでも私の娘なの!？」

バシーン・・・・・・・・

「ごめんなさい・・・・・・・・!母さん・・・・・・・・!」

バシーン・・・・・・・・

どうして!?言われたとおりちゃんと持ってきたじゃないか・
・・・・・・・・!!

「これ以上母さんを悲しませないで!!」

フェイトは一生懸命じゃないか!?あんたの為にぼろぼろに
なってるじゃないか・・・・・・・・!!

バシーン・・・・・・・・

誰か・・・・・・・・誰かフェイトを助けて・・・・・・・・!

「この!役立たず!!!」

誰か・・・・・・・・・・っ!!

「ユキ・・・・・・・・!!」

side ????

ママやめてよ!

わたしの妹をいじめないでよ!

ママ! 気づいてよ!

どうしてわたしの声が聞こえないの!?

どうして妹をいじめるの!?

どうしてわたしを見てくれないの!?

もうやめて!! それ以上やったら死んじゃうよぉ!!!!

ママァ!!

s i d e 雪斗

さて・・・・・・・・・・今頃フェイトとアルフは時空の庭園、か。

・・・・・・・・・・二人にはそろって、『留守番してて！』と言われた。

まあ、腐っても親子だ。

水入らずの時間も必要だろうが・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・修羅場を迎えていなければいいが。

それに仮に大事があっても問題はないだろう。

一応有事の際には念話で知らせるように言っているが、無意味だろうな。

フェイトは年の割には強いし、アルフも優秀な使い魔だ。

更に、フェイトの母親である彼女・・・・・・・・『プレシア・テストロッサ』は過去に『大魔導師』と呼ばれていたらしい。

最近では研究のために籠りつきりらしいが、それでも実力は十分なのだろう。

これだけの精鋭が集まっているのだ、多少の天変地異はなんとかできるはずさ。

お、そろそろ昼時か。

何か作ろう

「《ユキ！聞こえる！？ユキィ！！》」

「《っ・・・アルフか！？どうした！？何があつた！？》」

「《フェイトがあ・・・フェイトがあ・・・！！！！》」

『有事』の内容を聞いて、

頭の中の何かが切れた。

side 桃香

お昼ごはんを食べ終わって、のんびりしている時だ。

「《ユーリ！亜桜！どっちでもいい！答えてくれ！！》」

「《雪斗くん？ど、どうしたのそんなに慌てて！？》」

「《そだよーん、まずは深こきゅいきましょや、二・三回やったら落ち着くんで無いの？》」

頭の中で、ユーリさんと雪斗くんの声が響く。

慌てていたらしい雪斗くんは何度が吸ったり吐いたりを繰り返してから、

「《……………フェイトが危ない》」

言ったことは、ただ、それだけなのに、

「え、ちょ、桃香ちゃん！？」

「どこにいくんだ！？桃香！！」

玄関を飛び出していた。

side 飛鳥^{ユリ}

はやてをヒノコに任せて、街を走る。

「《とりあえず二人は、今から言う番地にあるマンションの屋上に来てくれ！管理人はいるがセキュリティは甘いからすぐに入れるはずだ！》」

「《分かりました！》」

「《りょーかい！》」

「《ちょ、雪斗さん！？ユーリさんも！？どういうこと！？》」

雪斗と桃香ちゃんと連絡を取り合いつつ、歩道を走る。
つてか、なーちゃん着いてきてんの？

「《だって桃香ちゃんいきなり飛び出していくんだもん！それにフイトちゃんが危ないって聞いて！！》」

なるほど、やっぱり優しい子だねえ……………。

（っていうか、セキュリティが甘いマンションってどうよ？）
（ご都合主義ってやつだな！）

なんて突っ込み入れつつ、言われた番地に向けて速度を上げた。
……………今なら車と互角に渡り合える気がする、うん。

「ユーリさん！」

「お、桃香ちゃんになーちゃん！」

途中桃香ちゃん達と合流して、待ち合わせ場所に駆け上がる。
屋上では、雪斗がすでに武装して待っていた。

「ごめん！待たせましたか！？」

「いいや、多分問題ない！早速だが転移を頼みたい、俺は転移系の魔法は使えないんだ！」

「ああ、だったらあたしがやるよ」

転移ならしよっちゅうやつてるからね！

というわけで、雪斗に教えられた座標を入力して、あたしらは世界からいなくなった。

「そーいやユーノくんは？」

「あ」

「……………置いて来ちゃった」

……………哀れフェレット。

side 桃香

転移の光が納まると同時に、周りの雰囲気が変わったのが分かる。
目を開くと、目の前に異様な光景が広がっていた。

近未来的な構造と、西洋文化が入り混じったような感じで、かなり
不思議な建物だ。

窓の外に見えるのは空じゃなくて、暗い何かがうごめいてる風景。
初めての場所だからなのか、なのはちゃんは不安そうにキョロキョロ
口してる。

「とにかく進むぞ！」

「うん」

「あ、はい！」

「おーらい」

雪斗くんに急かされて、前に進みだすわたし達。

「・・・人ん家に勝手に上がりこんでなんだけど、ここ、あまりいい気になれないにや」

ユーリさんがそうばやいているのが聞こえた。

閑話休題

途中何度か、防衛用と思われるロボットと戦ったけど、そんなに苦労はしなかった。

雪斗くんを先頭に、ひたすら奥まで進んでいく。

すると進行方向に何か見えてきた。

雪斗くんはそれに気付いたのか、いきなり速度を上げて、

「アルフ!!」

「あ・・・・・・・・ユ・・・・・・・・キ・・・・・・・・?」

アルフさんの顔は、涙でグシャグシャになっている・・・・・・・・つて。

「何があつたんですかアルフさん!？」

なのはちゃんかなり慌てた様子で、アルフさんに聞いていた。何回かしかあつたことがないわたしでも分かる。

あのアルフさんがこんなに泣くくらいのことだ。

ちよつと想像がつかない。

「この際誰でもいい!フェイトを・・・・フェイトを助けてくれ!

！このままじゃフェイトが、フェイトがあー！！」

なのはちゃんにしがみついて、必死に頼み込んでくるアルフさん。
言われなくても…………

「もちろんです！わたし達そのために来ましたから！フェイトちゃんはどこに！？」

すると今まで黙っていたユーリさんが突然、アルフさんの後ろにある扉に向き合って、

「おっじゃまっしまーす！！」

思いつき蹴飛ばし……………つてえええ！？

ちよ、いいのかな！？緊急事態とはいえ人の家を壊すって……………。

ユーリさんはそのまま中に入って行っちゃうし、雪斗くんもなのはちゃんもそれに続いて行っちゃうし……………。

……………器物破損の罪に問われないのかな？

（主！今は……………）

（分かってる！行くよ！！）

とにかく！今はフェイトちゃんを助けないと！

side フェイト

．．．．．私はできない子、役立たずの子。

母さんの期待に応えられないどうしようもない子。

．．．．．けど、どうしようかな．．．．．。

またぼろぼろになっちゃった．．．．．。

アルフとユキ、心配するんだろうなあ．．．．．。

またいつも通り、アルフにだいたい直してもらってから帰ろう．．．．．。

それでまた、ジュエルシードを集めなきゃ．．．．．。

母さんを悲しませちゃ、ダメだ．．．．．。

「おっじゃまっしまーす!!」

「フェイト!!」

「フェイトちゃん!!」

ああ、もう意識が．．．．．。

side なのは

桃香ちゃんが急に飛び出して、追いかけてったらフェイトちゃんが危ないって聞いて……。

それで、フェイトちゃんのお母さんがいるっていうところに来た。

ユーリさんが扉を蹴り飛ばして（あれはすっごくびっくりした……

・・！）奥に入ると、ひどい怪我をしているフェイトちゃんと、鞭を持った女の人がいた。

「っ誰!？」

女の人が怖い顔でこっちを睨んできた。

怖がって、ちよつと足を止めたわたしと違って、雪斗さん、ユーリさんはフェイトちゃんと女の人の中に立った。

桃香ちゃんもフェイトちゃんに近寄って、怪我の具合を見ていた。

わたしも咄嗟に、桃香ちゃんのそばに立って女の人を見た。けど、

「なのはちゃん、今フェイトちゃんに持続型の治療術をかけたから、外に運んで、アルフさんのそばにいてくれる？」

「え、でも」

「多分じゃなくても戦闘になる、あなたがここにいたら……
こう言ったらなんだけど、足手まといになる」

「・・・・・・・・っ！」

『足手まとい』・・・・・・・・。

「ごめん、けどお願い、ここじゃあなたにしか頼めない」

桃香ちゃんは、わたしを真っ直ぐ見てくる。

手には、苦しそうに息をしてるフェイトちゃん。
・・・・・・・・。

「・・・・・・・・わかった、任せて」

「ありがとう」

フェイトちゃんを受け取って、走り出す。

部屋を出る時に見たのは、どこか頼もしい雰囲気纏っている桃香ちゃん、ユーリさん、雪斗さんの、三人の姿だった。

「さーつてと！18歳未満の方のご退場はもうおしまい？」

「18未満って、それ俺たちも該当しないか？」

「気にしたら負けよ？ほら、RPGとかでよくあるじゃん？イベント戦闘とかで、このキャラは外せません！っての」

「いや、例えが分かりづらいから」

へらへらとした顔で話す飛鳥と、冷静にそれに突っ込む桃香と雪斗。

「話はもうおしまいにしれくないかしら？」

そこへ女性が口を挟んできた。

紫色の長い髪を揺らし、所々露出がしている黒い衣服を纏っている。

「雪斗くん、この人が・・・？」

「ああ、フェイト・テストロッサの母親・・・プレシア・テストロッサ」

「雪斗・・・？そう、あなたの所為なのね？最近フェイトが墮落している原因は」

女性・・・プレシアは雪斗を睨みながら、鞭を杖へと変形させた。どうやらあの鞭はデバイスだったようである。

「とにかく、あなたを倒せばフェイトはまた元に戻る・・・わたしのお人形にね！！」

狂ったように、プレシアは両手を高く上げる。

飛鳥達三人は、武器を構えた。

刀を抜刀した雪斗は一番前列、同じく刀を構えた飛鳥は中衛、槍を構えた桃香は後衛についた。

プレシアが握っている杖から紫電が迸り、部屋全体を砕き焦がしていく

三人は慣れた足取りでかわし、行動を起こす。

「自分の娘を人形呼ばわりとかさー、人としてどーよ!？」

プレシアにそう語りかけながら、飛鳥^{ユリ}は刀から衝撃波を飛ばす。

「フェイトちゃんだって生きていますよ!？親子なのに、どうしてそんなこと言っんですか!？」

桃香は槍を振るい、真空波を撃ち出す。

「誰の為に彼女が戦い続けているのか、考える!!プレシア・テスタロッサ!！」

雪斗は腕と刀に魔力を纏わせ、プレシアに斬りかかった。しかし、プレシアは小さくため息を吐くと、

「……………うるさい」

「は？」

「え、ちよっ」

「なっ!」

一瞬の出来事だった。

紫電が空中を走り、部屋中を震わせ、三人を弾き飛ばした。空間の中をプラズマが暴れ回り、飛鳥^{ユリ}を床に叩き付け、桃香を壁にめり込ませ、雪斗をプレシアに捕獲させた。

プレシアはギリギリと、華奢なはずの手で雪斗の首を強く締め上げる。

雪斗は呼吸が不能になり、口を動かして酸素を求めた。

s i d e 雪斗

脳裏が真っ白に塗りつぶされ、残る思考は今この場にいない彼女のこと。

危ういのは自分なのにと思いつつも、彼女がどうなるのかとそればかりを考える。

アルフがそばにいるから問題はないだろうが、いったん考え出すと止まらない。

段々と死にたくないという思いが強くなってきた。

相棒、ここでおしまいかなぁ？

脳裏に、声が響く。

終わる気、ねえだろお？俺も、暗サワも、お前も……………

・。

鼓動が高ぶってくるのが分かる。

何で記憶図書館に選ばれたか、考えろよ。
ライブラリ

力なく垂れ下がっていた手に、力が籠るのが分かる。

お前が、ここで終わる器じゃねえからだよ。

もう息は出来ないはずなのに、はつきりとプレシアを睨む。

さあ、俺を解放しろや相棒。

自分でも驚くくらいの力でプレシアの腕を払いのけ、拘束から抜け出す。

能力名でもいい、それに使われる道具の名前でもいい。

声に導かれるがままに、仮面をかぶる仕草を取る。

さあ、叫べ。

s i d e 飛鳥^{コトリ}

あっちゃー、思ったより強いわプレシアそん。
さすがは『大魔導師』って感じ？

って、そんな呑気に考えとる場合ちゃうわ！！

あたしはともかく雪斗くんがピンチじゃにやいの！！

やべー助けようにも全身痛いし、すぐには動けなさそうだし……

桃香ちゃんは！？……ってだめやん！夢の中におる！！気絶しちよる！！

詠唱とか、明らかに間に合わねえし、どないしようかあーっ！？

いやいやいやいや、落ち着けあたしCOOLになれ！

突破口は開けるはずだ！諦めたらそこで試合終了じゃあああああ
ああ！！

「……………！？」

「……………っ」

なんて思考してたら、雪斗くんが自力で拘束から脱出してた。

なんとか最悪の事態は回避できたみたいだの。

体も大分動かせるし、今の内に桃香ちゃんを回復じゃあ！！

つか、雪斗くん何かしようとしてる？

仮面かぶる仕草してるし、これじゃまるで……………。

「……………バーサーカー狂化……………！！」

って言ってるそばから『何か』発動させおつた！！

一瞬だけ仮面と思われる幻影が顔に浮かんだ後、背中の皮と服を突き破って六枚の翼が現れる。

闇を思わせる真っ黒なそれらが血を滴らせながら背中の表面から少し離れた位置で浮いた。

「……………てめえ、よくもやってくれたなあ？」

口から放たれた音は寒気を覚えるには十分すぎるものだった。

つか、感情がいくらか『無くなった』あたしでも寒気を感じることは出来るのね……。

ちよつと感動。

さて、話しかけられた方のプレシアそんはつと……。

……すげえ、絶えてるよこの人。

いや、若干震えが見られるけど、ほんつとによく見ないと分からないレベルだし……。

あれか？『これ以上のプレッシャーを受けたことの有るあたしにや効かんわっ！』ってやつか？

あたしらより上の経験者だからね、実践にも何度か出てるだろうし……。

でもそれ抜きでも感心だわ。

というか……。

「……もう一度いうぞお？フェイトが誰の為に戦っているか、考えろや女郎……。」

うん、明らかに雪斗くんの気配が別物だね。

や、根っこは同じだよ？なんつか、こう……葉っぱの色が変わった……みたいな。

紅葉みたいに夏あたりは若葉色だけど、秋になったら鮮やかな血の色になる感じ。

口調も厳格な武人さんから不良っぽいものにならつと変わってるし……。

もしかしたらあれが雪斗くんの能力の一つ？

でも何にせよ、形勢逆転のチャンスってことだけはよく分かったわ。

free side

突如として雰囲気の変わった雪斗にたいして、プレシアが抱いた感情は『困惑』と『恐怖』。

普段礼儀正しく厳格な彼が、突然自分の目の前で変貌したのである。誇り高き武人から、百戦錬磨の狂人へ変わった雪斗をいくばくか眺めた後、杖を構えてプラズマを打ち出した。

少しの恐れを抱いたものの、戦う意思は消えていないようである。

紫色のプラズマは雪斗を襲うが、彼はそれを素手で受け止めた。

その光景を見た飛鳥^{コリ}と、彼女の治療により目を覚ました桃香、そしてプレシアは驚愕する。

だが雪斗は立ち直る時間を与えない。

紫電を握りつぶすと体を回転させ、鋭い蹴りをプレシアに打ち込む。プレシアは咄嗟に障壁を張ってそれを防ぎ、杖を鞭に変形。

帯電させて、雪斗に向け振り下ろす。

一方の雪斗は荒っぽく、それでいて無駄のないステップで打撃の嵐を掻い潜り、プレシアに接近。

鳩尾にきついストレートを放った。

「がっ・・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・・・！」

人体の弱点をつかれ、プレシアの体制が崩れた。

それを見た飛鳥^{コリ}は何を思ったか、立ち上がって詠唱の姿勢をとる。

「光の花、咲いて開いて目くらまし！『ヴァンジーロスト』！！」

光の粒がプレシアの頭上に集束され、雪斗との間に落ちる。
飛鳥^{ユウリ}は、不満そうに視線を突き刺してきた雪斗に向かって、

「奇襲かけるよ！いったん退いて！」

束の間黙り込んだ雪斗だが、やがて了承の意として小さく首を縦に振る。

飛鳥^{ユウリ}も頷くと、桃香を支えどこか隠れられる場所を探し始めた。
すると、壁に不自然な凹みを見つける。

目くらましの効果の期限もあったので、飛鳥^{ユウリ}達は飛び込んだ。
『中身』がなんなのか確認せずに、である。

きつちり扉を閉じて、三人は一息ついた。
沈黙が束の間、そして、

「「ぶはあっ！」」

桃香と飛鳥^{ユウリ}が同時に息を吐き出した。

「お、おつかねがったであー、流石大魔導師だべー」

「さりげに東北弁になってるよユウリさん………けど、それに同意」

息を整えながら、苦笑いを交わす。

「ところで」、と飛鳥^{ユウリ}が切り出した。

「雪斗くんそれ何よ？や、あんたの能力ってのは分かるけど」

その問いにしばらく沈黙する雪斗。

やがて、

「ああ、そうだ……どっかの世界で作られた一最強（最凶）の兵器の力らしいが、実際のところは俺にもわからねえ」

「ただ」と続ける雪斗を、じっと見つめる桃香と飛鳥^{ユトリ}

「最大限にまで開放したあかつきにや、世界を一つつぶせるって話らしい」

「あー分かるかもしれね、だってほら、それ発動させたときの仕草さーまるで

BLEACHにでてくる『虚化』みたいじゃん」

へらへらと笑う飛鳥^{ユトリ}を、雪斗はどこか付き合いきれないといった顔で見た。

「……けど、フェイトに見られなかったのは幸いだな、こんなおつかねー姿、餓鬼にはみせらんねえ」

そんな中、ふと、桃香は道が続いているのに気づいた。

そして、その先がぼんやり明るくなっていることも。

「……はじめはただの好奇心だった。

その先にあるものは何なのかと、目を凝らしたとき。

桃香の顔が、驚愕に歪む。

s i d e 雪斗

「ふっ二人とも、あれ見て!!」

いつのまにか思考に浸っていた俺を現実に戻したのは、亜桜の焦った声だった。

何事かと思って見ると、亜桜はかなり驚愕した様子である方向を指差している。

そこには通路があり、その奥を見て、

気がついたら走り出していた。

三人一緒に突き当りまで走りぬいて、呆然と立ちつくす。

目の前にあるのは、何らかの研究に使われるであろうポット。

「……いや、それだけなら問題はねえ。

俺たちが驚いているのは、その『中身』だ。」

「どうして……!？」

隣で、亜桜の震える声が聞こえる。

「どうしてここに……『フェイトちゃん』が!？」

液体の中で死んだように眠る……いや、眠ったように死んでいるか？

なんにしろ、こんなもんに餓鬼を放り込むんざ正気じゃないな。

「あっちゃー……しまった……そうだったかー」

亜桜とは逆隣から、ユーリのそんな声がした。

俺も亜桜も思わずユーリのほうを振り向いてしまう。

奴はけっこう驚いた顔をしたが、すぐに納得したような表情になり、

「もしかして……その様子だと、二人とも『原作』知らない？」

「「知らない」」

同時に答えた俺たちを見て、再び納得したようにうなづくユーリ。

「まあ、なんだ？ プレシアさんが、その、『狂ってる』理由っての？ この子なんだよ」

『狂ってる』の部分を遠慮がちに口にしたあたり、何か知っている
と見える。

やつも話す気はあつたらしい、ゆっくりと語りだした。

「この子の名前は『アリシア・テストロッサ』……フェイト
ちゃんの『オリジナル』だよ」

「……オリジナルってことは……まさかフェイト
ちゃん……！」

「そ、『プロジェクトF』ってのの技術で生まれたこの子のクロー
ン」

それを聞いた瞬間、先ほど以上に、呆然としてしまった。

同時にプレシアへの怒りもわいてくる。

それを察したのか、ユーリは静止するように手を前に突き出してか
ら、

「でも、一応プレシアさんも被害者だかね？自分が横暴な上司に
従った所為で、愛娘をなくした、だから狂った」

ポットを撫でながら、ユーリはどこか冷たい目をしていた。

「フェイトちゃんが本来のアリシアちゃんと違ったから、ジュエル
シードを求めてる、そーでしょ？プレシアそん？」

思わず、後ろに振り返った。

そこには、黙ってこちらに杖を向けているプレシアが……。

free side

「や、すみませんね、こっちもこっちで必死だったんで、お望みならすぐにでも出て行きますよ?」

飛鳥^{ユリ}の軽い口調に対し、プレシアは無言の殺意で答える。
しばらく沈黙が続くが、それを破ったのはプレシアだった。

「……………なぜ、アリシアのことを知っているの?」

「見てのとおりあたし暇人なんで、色々世界を渡って、資料とか見ているうちに、ね」

「そう……………」

彼女は小さく、それだけいうと、杖を降ろした。
それと同時に殺意が消える。

「……………正直迷っているわ、このままジュエルシードを集め続けたとして、本当にアリシアが蘇るのか」

ぼつりぼつりと語りだすプレシアを、飛鳥^{ユリ}、桃香、雪斗の三人は、
臨戦態勢を解きながら見つめた。

「フェイトの事だってそう、頭ではアリシアではないと分かりきっているはずなのに、あんな仕打ちをしてしまう……………」

プレシアの両手はだらりと垂れ下がり、杖を握る力は弱くなっている。

「わたしはどうすればいいのかしら？ フェイトを娘と呼び、アリシアを忘れるか、アリシアに執着して、フェイトを捨てるか……」

そしてそのままがつくりと、膝をついた。

桃香はやるせない表情で、雪斗はどこか意外そうな表情で、プレシアを見る。

そんな中、飛鳥^{ユリ}がため息をつき。

「アホやろ？ アホやろ？ もっかい言う、アホやろ」

「ちょ、ユリさん！？」

「容赦ねえな」

腕を組み、ぱつさりとプレシアの悩みを切り捨てる。

「そんなん決めるのあんたの仕事やろ？ つかなんでその選択肢に『フェイトを娘と呼び、かつアリシアに執着する』ってのが無かと？」

「……………」

いつのまにか九州弁になっている飛鳥^{ユリ}の言葉に、プレシアはうなだれる。

飛鳥^{ユリ}は鼻でため息をつく、後ろでぼかんとしている二人に、「帰ろっ」と告げ、とつと歩き出す。

「……………ばってんね、『娘たち』の為に必死に悩んでるあんたは、かつこよか親て思うよ？」

プレシアとのすれ違いざまに、咳く様にそう言った。
はっとして彼女が顔を上げたときには、もう三人は部屋の入り口に
いた。

桃香はどこか罪悪感のようなものを感じていたのだろうか？

プレシアと目が合うと、小さく会釈をした。

「あーそだ、ほれ、そこのお嬢ちゃんおいで」

．．．．．ふえ？あなた、見えるの？

「もち！ばつちり見えちるよ」ww

そっか．．．．．よかった．．．．．もう誰にも気づ
いてもらえないと思ったら、わたし．．．．．わたし．．．．．
！

「あはは、まあおねーさんは余裕で見えるからねえ．．．．．突

然だけどさ、おかーさんに会いたくない？」

え？それってどういう・・・・・・？

「んゝ、ほら、アメちゃんあげるから、とにかくおねーさんについておいで」

（・・・・・・完全に不審者の発言だぞマスター）

・・・・・・？

第二十二話VSおかーさん（後書き）

四苦八苦しながらもなんとか書き上げることができました。

今回登場したのは、サワノ様より設定をご提供いただいたものです。詳細に関しては、私としては無印が完結したところにだそうかなっと思ってます。

次回、フルボッコです。

第二十三話ぶっちゃんって聞くプリンを思い浮かべるよね？（前書き）

こちらではお久しぶりです。

やっとこさ完成しました・・・。

第二十三話ぶっちゃんって聞くとプリンを思い浮かべるよね？

「艦長！もうすぐで目的地に到着です！」

どこかの船の船橋と思われる空間に、オペレーターの声が響く。

「分かりました、到着次第、次元震の原因究明に当たりますので、各自準備をして置いてください」

「了解！」

オペレーターの報告を受けた、この船の長と思われる女性は慣れた様子でコンソールを叩きつつ、手早く指示した。

「クロノ執務官」

「はい、いつでも出撃できます」

女性の後ろに控えていた少年は、メタルカードを取り出して返事をする。

「よろしい、では指示があるまで待機して置いてください」
「了解しました」

「くろ助えええええ　　っ！！！！」

「うつわ！？おねーちゃん！？」

「いかなされましたか！主様！？」

何だかイラッ　とする気配を感じ取って、反射的に叫んでいた。

隣ではやてがびつくりして、ヒノコがすっ飛んできてるけど、気にしないっ

そこではっとして辺りを見渡す。

幸い家の中だったからよかったけど、近所迷惑よね、うん。

（うるさいマスターで申し訳ない、近所のご婦人方）

変わりに暗羅が謝ってくれたから、結果オーライかにはや？

さて、プレシアさんところから帰ってきた後、フェイトちゃんは治療もかねて高町家で保護することになりました。

アルフさんも雪斗くんもついでに療養してて、当然のごとくジュエルシード争奪戦は休戦。

今のところは、なーちゃんとフェイトちゃんの交互で集めるってことで、合意してるみたい。

聞いた話だと、雪斗くんは毎日のように恭也さんに挑まれてるから若干疲れ気味だとか。

でもその割には楽しそうだったさ。

そんなわけだから、あたしも傍観者休んではやてやヒノコと、ゆつづらーとしてる（あ、ちなみに『ゆつづらー』は九州北部の方言で『ゆつくり』って意味ね）。

まあ、それよりもだ。

「もう五月かあ、あとちよいではやての誕生日よね？」

「うん！」

「それは………なにかプレゼントを用意しなければいけません

ね

そういうことだから、ちゃちゃっと終わらせたい訳だけど。
.....上手くいくかねえ？

side 桃香

「出来た？」

「出来た！」

「た、多分.....」

「見せて.....うん、二人とも上手」

あれから一週間くらい。

フェイトちゃんは治療と休養を兼ねて、高町家で預かることになりました。

今日はフェイトちゃんがジュエルシードを探す番だったのですが、雪斗ちゃんとアルフさんと、あと意外にもユーノくんが引き受けてくれて、実質なのはちゃんもフェイトちゃんもお休みになっちゃって.....

だから、せっかくだしってことで、お裁縫を二人に教えてる。

.....うん？小6のお前に出来るのかって？

転生者舐めないで下さい、こちとら前世では毎日のようにやってましたから。

友達とか同級生に、『お母さん』とか、『おかん』ってあだ名をつけられたのはいいい思ひ出です。

二人が縫っていたのは、ちょっとした布製のバッジ。

サイズも小さいし、小学生に練習させるにはもってこいだろうつて思つて……。

予想どおり、なのかな？二人とも小学生にしてはとても上手に出来ていた。

ちよつと不恰好なのはご愛嬌だね。

「よし、じゃあ後はこのピンをつけて完成だね」

「はい」

また作業を始めた二人を見て、思わず笑みがこぼれる。

（今なら、この子達の為になんでも出来そう）

（主が取った行動に、二人が喜ぶかどうかは別ですけどね）

藍桜の皮肉に苦笑いしてから、私も作業を再開した。

side 雪斗

「今日はここが限界か……………」
「そうだね」

「むう……もうちょっと探していたかったんだけどねえ」

ビル街の上。

ジュエルシードの搜索をしていたが、日が大分暮れてきた。

いつもならここで搜索を続行するのだが、今は、まあ色々あつて居候の身だからな。

家主たちを心配させるわけにもいかん。

「それじゃあ、そろそろ……」

「ああ、帰ろう」

珍しく人間の姿に戻っているユーノの提案に乗り、居候先へ帰ることにした。

「フエイトゥー!!」

「アルフ!」

帰るなりフエイトに飛びつくアルフ。

犬形態なので、別になんら変わった点はない。

（いや、犬が喋ってる時点ですでに変わっていると思います）

そこは突っ込んだら負けだ、暗。

side 飛鳥^{コトリ}

「つか、気付いたんだが」

（何だ、マスター）

軒先でのんびりしてたら、ふと思い立った。

「管理局、そろそろ出てくるんじゃないかによ？」

（ああ、あいつらか）

今冷静になつて考えたらあの甘党な艦長さんの発言ってどーつか矛盾してるところがあるのよねー。

それに二年前の『アレ』とかあるからさー。

………もしかしてのまさかのアンチ管理局ですかそう
ですか。

とか自己完結しちゃったり。

「願わくば三提督あたりが味方になってくれるといいなーっ」と

（まあな）

どっちにせよ接触は必要よね？原作ブレイクするんだから。

side はやて

声が、聞こえる。

女の人が泣いてる声と、何か語り掛けてくる男っぽい声。

女の人は泣きながら謝って、男っぽい声は同位体がどの言ってる。

……ごめん、二人ともいつべんに話かけんといてくれますか？

うち聖徳太子やないから、聞き取れません。

というか、あんたら何者？

うちに、何の用事なん………？

side 桃香

「ここ数日、ジュエルシードの発動の頻度が長くなっているな」

休日。

お昼ごはんを食べ終わった後、雪斗くんがぽつ々と呟いた。

「確かに、大分減ってきたんかねえ？」

「けど、全部じゃないのは確かだし……………」

そうやって頭をひねって考え込む、フェイトちゃんとアルフさん。

「はやく見つけないと、また被害が出ちゃうかもしれない」

「そうだね、でもどこにあるんだろう……………」

なのはちゃんとユーノくんも唸り始めた。

「ちょっとでもいいから、何か情報があれば……………」

そういつて若干俯く雪斗くん。

情報……………情報……………あ。

「ね、みんな」

声を掛けて、その場の全員が反応したことを確認する。

「情報に関して宛があるんだけど、任せてくれないかな？」

side なのは

あの、桃香ちゃんが情報に宛があるっていった次の日。

わたしは桃香ちゃんと一緒に公園にきてるんですけど………
その………。

「じゃあ心あたりはないんだね？……そんな、いいよとりあえず仲間に気をつけるように伝えてもらえる？」

「にゃー」

桃香ちゃん……………。

「動物と話せたの？」

「うん、お陰で情報網はばっちりだよ、あ、カラスのみんなは特に気をつけてね？キラキラしたものを見るとすぐにとびつくんだから」

そういつて桃香ちゃんが見た先には確かにカラスがいます！

注意されたカラス達は、びくつとして体を小さくしていました。

一方の桃香ちゃんはふふつと笑って、

「とにかく、みんな協力お願いね？見つけても不用意に近づかないこと」

動物達が桃香ちゃんから離れて行きます。

どうやらお話は終わったみたいです。

「動物さん達、何だって？」

すると桃香ちゃんはやっと残念そうに笑って、

「何にも知らないって、けど見つけたらちゃんと教えてくれるって約束してくれた」

「そっか、何だか心強い味方が出来たね！」

「あははっ そうだね」

side 飛鳥^{コトリ}

今日ははやての病院もないし、便利屋の方にも依頼は来ていないので、家でのっほーんとしてる。

その上日差しもいい感じに暖かいから、このまま寝るって言つのも風情だねえ…………。

…………やることないからいいよね？

それじゃ、お休みなさ

．．．．．イイイイン．．．．．。

あーい．．．．．。

「主様！ジュエルシードが．．．．．っ!？」

．．．．．orz

「あ、主様!？」

「うんにゃ、なんでもないよ．．．．．行こうか．．．．．」

後でヒノコに聞いたけど、そんな時のあたし、滅茶苦茶へこんでいたらしい。

「ハーケンセイバー！」

フェイトが飛ばした刃を、暴走体は根で跳ね除ける。

「っの！食らえ！！」

次にアルフがストレートパンチをジュエルシードの暴走体に繰り出す、今度は障壁に阻まれた。

「生意気にバリアまで張るのかい！！」

舌打ちをしながら、アルフはバックステップで攻撃を避けた。

「……今度の暴走体は思ったよりやるな。」

ぱつと見て、樹木を素体に行っていると考えられるが、火を使おうにも障壁に阻まれるのがオチだな。
さて……どうしたものか。

「ユキ！なのは達には……！」

「もう連絡を入れてある、悔しいがこいつ、俺たちだけでは骨が折れるぞ！」

フェイトが若干焦った様子で俺に連絡したかどうかの確認をしていた。

もうとつくに済ませていたので、問いかけには肯定して、迫ってきた根っこを斬り飛ばす。

単独になるのは危険と判断し、フェイトとアルフに合図を送る。

二人は小さくうなづくと、俺の近くに来てくれた。

相手はアルフのスキル『バリアブレイク』をも跳ね返すような強固な障壁の持ち主だ。

なのは位の火力でなければ突破は不可能と思われる。
と、その時、

「そいつ！」

聞き覚えの有る掛け声がして、そいつは暴走体に一閃を繰り出した。
だが、一閃は障壁に防がれた。
一閃を撃った本人は苦笑いして、俺たちの隣に降り立つ。
隣にはその従者が控えている。

「やほ、大丈夫？」

「ユーリ！」

「お前は……！」

アルフがヒノコに牙を向ける。
だが、

「アルフ！今はそんな余裕ないでしょ……！」

「つぐ……覚えとけよ！」

「はて？何を？」

「……っ！」

ヒノコの挑発めいた発言に、アルフは青筋を浮かべていた。

「挑発は後で、今はあっちが相手」

そう注意するユーリの声を背にして、俺達は再び目の前の暴走体を見据えた。

改めてみると、部分的にはそんなに注意すべき点はない。
障壁以外で警戒すべきは地中から出てくる根程度だろうか？

先ほども思案したように、火さえ用いれば怖くない相手だ。
だがその前にはあの障壁をどうにかしてひっぺがさないといけない。
さて……………どうしたものか。

「《雪斗くん、ちよいとよろし?》」

「《ユーリ?何だ、近くにいるのだから直接……………》」

「《原作に関わることだからダメ》」

「《……………》」

突然、ドンつと派手な音がして、暴走体が怯んだ。

……………がらにも無くさまあみろ、と思ってしまったのはこ
こだけの話だ。

見覚えの有る桜色の光の出所に目をやる。

「大丈夫!? フェイトちゃん! アルフさん!」

「みんな無事!?」

「今治癒魔法かけるから……………!」

案の定、なのはと亜桜とユーノがそこにいた。

「《ああ、丁度いいや、原作に関わることでちょっとあるから、桃
香ちゃんもきいてちょ?》うし、ヒノコは前衛お願い! あたしが中
衛やるから、桃香ちゃんは後衛ね!」

「《……………?う、うん》り、了解!」

ユーリの指示を受けつつ、それぞれが配置につく。

俺たちには何も言わなかったことと、先ほどのユーノの発言内容か
ら、回復に専念しろと言うことなのだろう。

後退してユーノの元に向かいつつ、ユーリが話し出すのを待つ。

「《や、実はにや、今戦つてるこいつ、確かに障壁張るけど、強度はそんなに無いはずなんだ》」

「《え、え？》」

「《そうなのか？》」

原作を知っているユーリならではの発言に、思わず食いついてしまった。

一方のユーリは、こちらをちらつと見てうなづく。

「《ん、さつきあたしが撃った一閃・・・次元斬って技で障壁ごとスパーンいったつもりだったけど、防がれたのよね》」

「ま全力でやったわけでもないんだけどさ」と苦笑いした。

と、同時にユーノの治療も終わったので、手短に礼を述べてから戦闘に参加する。

「《ど、どうして・・・》」

「《さあ？シラネ》」

三人そろって、向かってきた根を切り飛ばした。

「《はい！お話お仕舞い！集中しましよ、このコ意外とやるわよーん？》」

「《分かってます！》」

「《言われなくても・・・！！》」

また奴を見てみると、障壁に若干のひびが見受けられる。これなら・・・。

「フェイト！なのは！でかいのを打ち込んでやれ！」

「ひびに容赦なくがポイントだよ！」

亜桜も気付いていたらしく、二人に向けて親指を立てていた。

ユーリは何も言わなかったが、にやつと口角を上げているのが分かる。

フェイトとなのははこちらを見て力強くうなづくと、それぞれチャージを始めた。

一方、こちらの意図に気付いたらしい暴走体は、阻止しようと二人を攻撃してきた。
だが、

「チェインバインド！」

「ストラグルバインド！」

「炎閃！」

ユーノとアルフが攻撃してきた枝や根を縛り上げ、そこへヒノコが炎を見舞う。

燃え尽きると同時に、二人のチャージが完了した。

「デイベイン……………」

「サンダー……………」

十分に魔力が込められた閃光が、暴走体を貫く。

暴走体は断末魔を上げながらジュエルシードを残して消えた。

アルフが封印処理を施し、一件落着。

……………かと思われたが、ちょっとした問題が発生。

「あの、この場合どっちが持つべきなのかな？」

一応今日は俺たちが集める日なんだが、途中からなのは達も参加し

てきたからな。

そろって悩み始めた時だ。

「・・・・・・・・・・っ！」

「え、ちょっユキ!?」

背後に転移反応、同時に敵意も感じたのでアルフに目配せし、フェイトを抱えてその場を飛び退く。

予想通り、さっきまで俺達がいた場所に魔力弾が落ちていた。

飛んできた方向を睨むと、黒い服をきた、フェイトと同年位の少年が立っている。

そいつはこちらに杖を向けて、

「時空管理局クロノ・ハラオウンだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

「な、管理局だって!?」

そして再び魔力弾を撃つ為にチャージを始める。

まずいな・・・・・・・・今の俺は飛び退いた勢いで倒れてしまっているし、何よりフェイトを抱えている。

防ぐしかないかと思ったその時になって気付いた。

ユーリと桃香の姿が見当たらない。

しかし、生憎と二人を探す余裕は無かったので、再び少年に目を向けた。

・・・・・・・・・・そこで見たのは、

「帰れえええええっ!!!!!!」

「空気読みなさいっ！！！」

女子らしからぬ絶叫と共に、少年の顔面にドロップキックを見舞う二人の姿だった。

f r e e s i d e

思わぬ一撃を顔面にもろにくらい、数瞬のタイムラグの後、ふつとばされる少年。

そんな少年を、どこか満足げに見つめているのは、飛鳥ユトリと桃香だ。二人して『やりきった！』とでも言いたげに、ため息をつくフェイトに向き合った。

「そついうわけだから、良い子はおうちに帰りなよ？」

「この間作ってたバッジ、次の機会にでも届けるから」

清清しすぎる笑顔で後ろに倒れている少年を無視し、フェイトの手を握って別れを惜しむ。

一方、突然のことに呆けていたフェイトは、はっと我に帰って、なのはを見た。

なのはも同じくぽかんとしていたが、すぐに再起動。

桃香と同じくフェイトの手を握って若干涙目になりながら別れを告げる。

アルフは状況が飲み込めず、ユーノとヒノコに助けを求める視線を送るが、流石のユーノも少々混乱している様子だった。

一方のヒノコは珍しくにこにこしながら我関せずといった状態である。

「あ、これしかないけどお土産ね！おかーさんによろしく」

ユーリはまるで帰郷する年下の子にお土産を渡すようなノリで、フェイトの手にジュエルシードを握らせた。

フェイトはかなり驚いた表情をしていたが、ユーリの背後で管理局を名乗った少年が立ち上がるのが見えてしまい、首を縦に振り、お辞儀をする。

「ふえ、フェイトちゃん！あの、気をつけてね！」

「う、うん、なのはも元気で」

注意があの子年に向かっていたからか、フェイトは見ってしまった。握った手をぶんぶんと振るなのはの肩越しに、起き上がった少年にハリセンで容赦ない一撃をくらわせているユーリの姿を……。その如何にも楽しそうな表情に、一瞬寒気を覚える。

「あの、色々ありがとうございました」

「ううん！また困ったことがあったら何でも言ってね！」

「はい！」

離れたところで殺伐とした光景が繰り広げられているにも関わらず、かなりアットホームな雰囲気です。フェイト達は送り出された。

「よし、それじゃああたしらも帰ろうか？」

「そうだね、士郎さん達に説明もしないと……」

「おい！君達！」

そのままの雰囲気で帰ろうとした時、あの少年が杖を向けて叫ぶ。

「自分のしたことが分かっているのか！？公務執行妨害だぞー！」

「公務？え、じゃあ警察官が何か？」

「さつきもいったらう！時空管理局だ！」

再び少年の口からでた単語に、ユーノ以外はきよとした。

何かを言いかけたユーノを、飛鳥は口を押さえて黙らせる。

つかの間拘束から逃れようとがくユーノだったが、ふと桃香と視線が合う。

彼女は、見たこともないような表情をしていた。

表面は笑っているのに、内側では相当な怒りを溜め込んでいる。

「《えっと、ユーノくん、今の桃香ちゃんには話しかけないほうがいいかも》」

「《な、なのは！？ど、どうして……》」

突然のなのはからの念話にびくつとなるものの、なぜかを問いかけた。

すると小さな苦笑いのような声が聞こえて、

「《だって桃香ちゃん、すごく怒ってるもん》」

さも当然のような返答に、ユーノは啞然としてしまった。
そんなやり取りを他所にして、飛鳥はおどけた態度を見せ、

「持久管理局……って、何？」

「な、馬鹿な！魔導師なら管理局を知っているはずだ！というか、『持久』じゃなくて『時空』だ！」

少年の台詞を終わつた途端、連続して舌打ちをする音が聞こえた。その音源である飛鳥^{ユリ}は、指を横に振っている。

「だめだねえ、まずはその固定観念からなんとかしないと」

「何！？」

「リンゴ園があるからといって、いつでもりんごが取れるわけでもないのと同じだよ？」

にこにこ笑いながら、桃香は目も笑っている笑顔で少年に睨みを聞かせる。

「っ、だが！君があの子に渡したあれはロストログアだ！何の目的で使うのか知っているのか！？」

「へえ、ジュエルシード以外にもそんな呼び方があったんですね？」

「目的は知らないけどさ、あんなに必死な目えされちゃ、断るのが野暮ってモンでしょ？」

売り言葉に買い言葉、きつい表情を崩さない少年と、余裕の雰囲気
を崩さない二人の攻防が続く。

だが、少年のほうは限界が訪れたらしい。
杖を構え、切っ先に魔力を集中させる。

「これ以上の言い合いはもういらない！こうなったら実力行使で……
……！！！」

すると二人は急にため息をつき視線を交えると小さく頷きあう。
そしてにやりと笑った。

三日目を九十度回転させたような笑みを浮かべて、くつくつと笑い出すと、

「ふふふふふふ、どうやら調教の必要があるみたいだねえ?」

「くすくすっそうですね、ちよっと痛い目にあわせましょうか?」

見るもの全てを恐怖に陥れるような、そんな笑顔を向けて、個々の武器を構えた。

「大丈夫、殺しはしないよ?」

「苦しむのは一瞬ですみます、ですがそれ相応の痛みは感じるでしょうね?」

次の瞬間、ヒノコは魔法陣を展開させなのはとユーノの視覚と、念話以外の聴覚を奪う。

慌てる二人に大丈夫だと念話で伝えたと、両脇に抱えてその場を去る。

最後にヒノコは見たのは、明らかに手加減した技で容赦なくじわじわと攻め立てる無邪気な二人の姿だった。

第二十三話ぶっちんって聞くとプリンを思い浮かべるよね？（後書き）

今回書きたかったのは、腹黒さとしつつ気が五割増の飛鳥と桃香でした。

一応言っておきますが、彼は生きてますよ？

あとさりげなく桃香の三つ目の能力を出してみたりww

さて、次回はおそらく管理局を接触ですw

第二十四話専門家より上手の一般人（前書き）

こちらではお久しぶりです。

お待たせしました、二十四話ですよww

4/7：一部修正。

第二十四話専門家より上手の一般人

side 飛鳥^{ユウリ}

「へえ、こんななつてんだ」

「けど外の景色は好ましくないですね、ちょっと怖いです」

ふっふー、ユーリ・ローウェルこと一条飛鳥です。

や、あの黒い坊やにとどめ刺そうかなつてしてた時に、お偉いさんからストップかかって。

とりあえずお話し（肉体言語じゃない方ね？）しようじゃないかってことになって、なのはちゃんたちも一緒に乗り込むことになったんよね。

まあ、察しがいい人はお偉いさんが誰で、あたしらがどこにいるのか分かってるだろうけどね。

………ちなみに坊やはあたしが治した。

癪に障ったとはいえ、母親に頭下げられたら、ねえ？

「そつだ君達、そろそろ武装を解除しても構わないよ、君も元に戻ったらどうだい？」

うっわ、やつぱ治すんじゃないかったか。

「何その上から目線」

「武装を解除？バカ言わないで下さい」

なのはちゃんとユーノくんは素直に従ってるけど、あたしらはそう簡単に解除しないもんね。

坊やがジト目でこっちを見てきた。

「だってあたしらからみたらここは得体の知れない場所よ？宇宙人のいる謎の戦艦だよ？」

「油断できない場所で武装解除とか、自殺行為でしょう」

なのはちゃん含むちびっ子はともかく、年上であるあたしがしっかりしてないかね？

ちなみにヒノコは帰らせた。

はやてを一人にさせるわけにはいかないからね。

「まあ流石に後ろからサクツはやらないから、大丈夫……多分」

「多分なのか！？」

坊やの突っ込みは全力でスルーね。

……おんや？そういうえば後ろが騒がしいねえ？

まあ予想付くけど。

桃香ちゃんと一緒に振り返ると、なのはちゃんの隣にクリーム色の髪の美少年が……って。

「なんだユーノくんか」

見事に桃香ちゃんとハモったwww

まあ、若干驚いてたっばいけど。

それとハモったりすると得した気分になるのはあたしだけ？

「ユーリさんと桃香ちゃん驚かないの！？」

「別に？」

「魔力を探れば」

何事も冷静って大事だよ？

なのはちゃんは感心したような、びっくりしたような顔でこっちを見てきている。

するとユーノくんが、

「ね、桃香、ぼく出会った時この姿だったよね？」

「何を言うの？最初っからフレットだったよ」

「ええっ・・・・・・・・・・うーん・・・・・・・・・・」

考えてる考えてる。

BGMは木魚、これ王道ね。

「ああ、そうそう！そうだった！ごめんなのは、忘れてた」

「だよね？だよね！？よかったあ・・・・・・・・・・」

隣であたふたしてたなのはちゃんは、ツインテールをピコピコ動かしてからはあーっとため息をついた。

うん、誤解が解けたみたいだね。

「それじゃあ、そろそろいいか？」

「おーらい、『一応』よろしく」

主に坊やに向けての嫌味をたっぷりこめて返事してやった。

坊やに案内されて、とある部屋の入口にやってきた。

文字が何となく英語に似てたから、多分ここは応接室だね。

「艦長、失礼します」

「どうぞ」

奥から女の人の声が聞こえてきて、みんなで入っていく。

「わっ」

「わぁ」

「・・・・・・・・」

「あらま」

何と言うか・・・・・・・・『和』が、たつぷり。

・・・・・・・・どうしよう、突っ込みどころが多すぎる。

その中に、正座で座っている女の人がいた。

「いらつしゃい、まずはそこに座ってくださいか？」

「あ、はい」

すげえ、四人分の座布団も用意してある・・・・・・・・じゃなくて！！

「なして座布団？」

「あら、そちらにあわせたつもりなのだけれど……」

うーん、お気遣いは嬉しいんですけどちょっと時代遅れっすね。

「初めまして、この次元航行艦アースラの艦長をやっています、リ
ンディ・ハラオウンです」

知ってますよww

「あ、高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「亜桜桃香といいます」

「ユーリ・ローウェル」

自己紹介されちゃったし、ここは返すのが礼儀でしょ。

終わってから、ジュエルシードに関してのことを話してくれと頼ま
れたので、出来る限りのことは話すことに。

と、

「《あの、ユーリさん、桃香ちゃん、フェイトちゃんたちのこと話
したほうがいいのかな?》」

「《……いーんでないの?》」

「《ただ、あの子等はいくまで被害者つてのを伝えたほうがいいのか
もね》」

なのはちゃんは小さく頷いて、話し始めた。

少女説明中……。

ほ、本当に入れおった…………砂糖とミルク!!

「では、ユーノさんはジュエルシードを回収しに来たのですね、なるほど…………立派なことだわ」

「けど同時に無謀でもある!」

感心するリンディさんとは対照に無謀と罵る坊や…………。
っは、いいおるわ、小僧が。

「次元震起こってからのこのこやってきたあんたらが吐く台詞じゃないでしょ?」

「っおまえ…………!」

「クロノ!」

リンディさんは、あたしに食って掛かってきたクロノを抑えてから、

「そういうばみなさん…………ユーノさんはともかく、あの世界出身のお三方がロストログアについて知っているのは何故ですか?」

ああ、そんなこと?

「あたしの入れ知恵っす」

「ユーリさんの?」

「はい、使い魔が出来てからどうも暇人になっちゃって、それで色んな世界を回ってて、気がついたらそんな知識がついてたって言う・・・」

「そ、そうなんですか・・・」

「もしかして、驚いてらっしゃる?」

「普通個人で世界への転移は難しいことなんだがな
「へえー」

ちなみに今の台詞は某泉を意識www
一通り話を聞き終えたのか、リンディさんが小さく頷いた。

「あなた方がやってきたことは評価されるべきですが、管理局として一般人を巻き込むわけにはいきません」

「そんな!」

その口から出てきた言葉に、なのはちゃんが身を乗り出した。
うーん、とりあえず落ち着こうぜ?
ほらほら、膝がお茶にあたったよ。

「まあ、いきなり言われても気持ちの整理がつかないでしょう」

「うわ、きた。」

あの名(迷?) 台詞!

「四人でゆっくり話し合ってそれから答えを・・・」

「一般人を巻き込めないなら、何故話し合っんですか?」

「え?」

そーだそーだ！言つたれ桃香ちゃん！！

「ぶつちゃけていいですか？胡散臭いんですよあなた方、後からのこのこやつてきたくせに主導権を握ろうとして、さらにはさりげなく私たちを利用しようとしたね？」

坊や、リンディさん親子の顔に、陰りがさしてきた。

「こんなんだつたら、ユーノくんやフェイトちゃんたちのほうがよっぽど優秀じゃないですか？そう思いませんか？」

「ちよ、ちよつと桃香ちゃん……」

なのはちゃんの目が、流石に言いすぎだと語っている。
けどね、

「あたしも桃香ちゃんの見解にさんせ」

「ユーリさんまで！？」

「よく考えてみなのはちゃん？ジュエルシード、本来はこいつらがなんとかしなきゃいけない代物なんだべよ？それなのにこいつら、あの地震もどきが起こつてからやってきた上にあたしらの努力を利用しようとしたのよ？」

あたしとしては『二年前』のこともあるから、余計に、ね？

「そんな奴等の言うこと、聞いてやる義理はない」

「ええ、頼みごとがあるなら素直に言ったらどうですか？」

応接室が、静まり返った。

沈黙が続いた後、突然リンディさんは目を閉じて、頭を下げる。

俗にいう土下座つてやつだ。

「か、母さん!？」

「確かに、わたしはあなた方を引き入れようと考えていました」

うろたえる坊やを他所に、顔を上げるリンディさん。

「遠まわしな言い方で勧誘、および到着の遅れに関して、深くお詫び申し上げます」

「ですが」と続けるリンディさんの目は、覚悟でいっぱいだった。

「ジュエルシードの暴走体と戦闘したことがあるあなた方だからこそ、頼んでいるんです、どうか事件の解決に協力をしてください」

「……まいったね、こりゃ本物だ。

こりゃ、断るのは野暮かな？

「やります!やらせてください!」

「僕からもお願いします!」

『目の前』で、なのはちゃんとユーノくんがリンディさんに負けないくらいの土下座を見せた。

二人の視線が、あたしと桃香ちゃんに向けられる。

答えは決まってる。

「それだけ言われて断るなんて、空気読めないことしませんよう?」

「こちらこそ、よろしく願います」

同盟もどき成立やね。

リンディさんの目には、若干涙が浮かんでいた。
それを拭ってから、

「それにしても、ユーリさんと桃香さんはすっかりしていますね、
うちの子ももういい年なんだからそれくらいになって欲しいわ」

アットホームな雰囲気がつと広がって、和気藹々とした空気に変わった。

そんな中で、リンディさんがそう話しかけてくる。

「否定はしないんですけど、坊や何歳ですよ？」

「……………一応和解したとはいえ、坊やはいじりがいがありそうだからね。」

「今年で14歳なんですよ」

「ふえっ!？」

つはつはっはーなのはちゃん驚いてるなあー（笑

「えっと……………どうしたんですか？」

さつきとは違う意味で沈黙が始まった。

とりあえず、故意にそれを破ることにする。

「っげ、年上かよ」

f r e e s i d e

「それでは、詳しいことはまた後日と言うことで」

「はい、さよなら！」

リンディさんと目に見えてへこんでいるクロノに見送られて、
『桃
香達は』出て行く。

『彼女』はその様子を、部屋の隅でじっとみていた。

「それじゃクロノ、あなたは反省文と報告書を仕上げてね」

「・・・・・・はい、艦長は？」

「ここの片付けをやっておくわ」

「そんな！それは僕たちが・・・・・・」

リンディはふふつと笑って、

「いいのよ、道具の片付けくらい自分でやるわ」

「・・・・・・分かりました」

しぶしぶ、クロノが出て行った。

先ほどの騒がしさが嘘のように静まり返る。
その中でリンディはため息をついてから、

「人払い用の結界は張りました、もう出てきてもいいんじゃないですか？」

何もない、壁に語りかけた。

普通そんな所に話しかければ、何があったと疑われるだろう。
返事が来るわけがない。
が、

「ははっ、さすが艦長を務めるだけありますね、気付いてたっすか」

バリバリとパズルピースのようにして、空間が剥がれていく。
そこから現れたのは、今しがた桃香達と出て行ったはずの。

「ども、リンディさん」

一条飛鳥

ユーリ・ローウェルだった。

ユーリはへらへら笑いながら、リンディに向かい合うようにして座布団に座る。

「気付いたのはこの部屋に入ってから、ですが……いつから？」

「あんたから連絡入って、こっちに来るよう言われてから」

しれっと返された返事に、リンディはまた驚愕する。

数多の世界への個人転移といい、今見せた高度な幻術といい……
。。。

「バケモノ、と呼ばれても仕方ないと思うのですが？」
「同感です」

リンディが入れたお茶を一口飲んでから、ユーリは姿勢を正す。
射抜くような視線を向けながら、

「誘導尋問とかどうも苦手だね、率直に聞こう、あんたは『白組』
？それとも『黒組』？」

「・・・・・・そこまで知っているんですね」
「言っただしょ？暇人だつて」

何の悪びれた様子も見せず、再び茶を啜る。
リンディは一呼吸おいてから、

「白組、と言つて信じてもらえるでしょうか？」

恐る恐る、たずねてみた。

ユーリは束の間黙り込んだ後、

「・・・・・・あたし、親がいなくてね、妹と使い魔の三人暮
らしなんですよ」

「はい？」

苦笑いしつつ、ユーリは続ける。

「幼い頃なんかは、時折両親の遺産目当てに言い寄ってくる大人も
いた、だからそいつが嘘ついてるかどうかが、一目で分かる」

リンディの表情が引き締まった。

ユーリは仕上げににやつと笑ってから、

「大丈夫、信じますよ」

それを聴いた瞬間、リンディの肺から一気に空気が抜けた。
ユーリはまた苦笑いしてから、

「あたしの用事はそれだけです、ああ、あと……………」

おもむろに、リンディの手にある砂糖のポットを指差した。

「砂糖もミルクも入れずに、緑茶本来の苦味と旨味を楽しむのが日本人のお茶の楽しみ方です、一度やってみることをおススメしますよ？」

「あらそうなの？、それはありがとう、今度やってみるわ」

ユーリは満足そうに頷いてから、転移魔法でその場を去った。
一人残されたリンディはまたため息をつく。

「敵に回らなくてよかったわ……………あの子、家族の為なら何でもやりそうだったもの」

第二十四話専門家より上手の一般人（後書き）

お茶の楽しみ方に関しては適當です（ ）

とりあえずまたフラグっぽいものをたてておきました。

第二十五話お久しぶりです（前書き）

お待たせしました、二十五話です。

第二十五話お久しぶりです

side クロノ

ユーリたちが帰った後、僕、クロノ・ハラウンとその相棒、エイミィ・リミエッタは先ほどの戦闘のデータを見ていた。

「……………改めて見てみるとほんとに情けないな、僕は。」

あー、そこは右に撃てばよかったのに……………！

「すごいすごい！四人とも魔力だけ見ればクロノ君以上！さらにユーリちゃんと桃香ちゃんの二人は実力もあるんだから、こりゃクロノ君がやられてとーぜんだわ！」

「……………エイミィ本人は心から感心しているようだが、聞いてると嫌味に聞こえなくも無いぞ。」

「それにしても……………なのはちゃんたちもフェイトちゃんたちも、ジュエルシード集めてる理由は分かってるけど、ユーリちゃんはなんでだろうね？」

「それはさっき聞いてきた、ユーリとしてはジュエルシードがなくなるならどちらにも味方するみたいだ」

「そうなの？」

「ああ、近所の平穏を脅かすものが無くなればなんでもいいとぶっちゃけていたが……………」

それ以外に何か隠している感じだったんだよな。

エイミィはふうんと、再びモニターに目をやってから、

「それと、二人……………特にユーリちゃん、身長高いよねー？十二

歳だっけ？クロノ君より年下じゃん」

「それは言っただけじゃない……」

ちくしょう……毎日牛乳飲んでるのに何で……

「そのユースさんから、クロノにアドバイスよ」

「あ、艦長！」

そこへ母さ……艦長が入ってくる。

というか、ユースからアドバイスだって？

一体……

「身長を伸ばしたいなら、牛乳だけじゃダメだそうよ？カルシウムは骨を丈夫にするだけで、身長は伸ばさなからしいから」

「なっ！？」

牛乳じゃ伸びないっていうのか！？

「え、じゃあ何をとればいいんですか？」

「タンパク質ですって、むしろこっちの方が身長を伸ばすのに適しているらしいわ」

「へえー！博識なんですね、ユースちゃん！」

タンパク質か……

……なんだろう、大切なものをなくした気がする。

「それよりも、わたしが気になるのは……」

「彼のこと、ですか？」

「ええ」

ちょうどモニターに、フェイトと行動しているという少年が写っている。

母さんも僕も、思わず苦い顔をした。

「何故、彼からロストログアの反応が………?」

side 飛鳥^{コトリ}

「いつくしゅ!」

ありや? 風邪でもないのにくしゃみが………。
あ、掃除してるからか。

「飛鳥! こっちの棚動かすよ! ?」

「はいはい!」

今日は久々に剣道場に顔を出してます。

ほら、ジュエルシードとか便利屋とかでバタバタしてたからね?

その便利屋のほうが起動にのってきたんで、余裕が出てきたんだよ。

「よ………っと、お疲れ」

「お疲れです」

一緒に棚を動かしたお姉さんに声を掛けてから、また箒を手にとった。

ここの掃除も前はかなり慌しかったけど、今じゃ門下生も増えて、余裕が出てきてるみたいだね。

でも、こうものんびりしていると、あの忙しさが懐かしくなるわー。

「一条、きていたのか」

「ん？あー辻じゃん、おひさ〜ww」

うわ、久々にこいつの顔見た。

つかイケメンになってないか？

だからといって惚れたりはせんが。

「最近来てなかったみたいだな？」

「ん、ちよつと便利屋始めてさ、他にも色々立て込んだのよ」

一緒に床をはきながらヘラヘラ笑っておいた。

辻は興味なさそうに、『ほう？』と言って、黙々と掃除に取り掛かる。

「……………んー、前々から思ってたんだけどさ、辻ってどこか老けてるよね？」

これであたしと同年だぜ？信じられるか？

「……………大変そうだな、体は無事か？」

「……………なん……………だどつ……………！？

「……………？どうした一条？」

「今日は雨でも降るか？天変地異でも起きるか？」

「は？」

呆ける辻を無視して、みんなに向かって叫ぶ。

「ちょっとみなさん聞きまして！？『あの』辻さんから人を気遣うような発言がとびだしましたよ！！？」

《な、なんだってー！？》

「ちよっ、おい！」

だって、あの辻だぜ！？

くそ真面目で、稽古馬鹿で、困ってる誰かに相談されても『お前の問題だ』とかいって突き放すような野郎だぜ！？

「変なものでも食ったか！？」

「熱でもあるんじゃないか！？」

「あたし、体温計もってくる！！」

一気に道場の中がざわめきだして、騒がしくなってきた。
みんなの中心で、辻がもみくちゃにされている。

・・・・・・うん、面白いwww

「おい一条！た、助けてくれ！」

「・・・・・・むふっ」

「何だその笑いはーっ！？」

「あー面白かったwww」
「お前……」

真面目キャラがもみくちゃにされてあわあわしてるのを見ると、にやつとしちゃうのはあたしだけ？

騒ぎが一段落して、みんな稽古に打ち込み始めた。

今日は練習試合みたいだね。

つか、

「ほんとに珍しいじゃん？ 辻が人を気遣うなんてさ、何かあったん？」

「……そういつときもあるさ」

「いや、あんたの場合それが異常だからみんな騒いだわけなんだけど」

「むう……」

「……何かあったな？」

別に聞かない理由もないので、聞いてみることにした。

「な、今までに何かあったん？」

「……あったといえばあったな」

あらま？

じゃあ根掘り葉掘り聞いちゃいましてwwww

「何々？おねーさんに教えてみんしゃい？」

「何故だ？あとなんだその九州弁は？」

「べつに？それよりもほら、お話してみーよー？辻きゅーん？」
「むう……」

辻は少し渋ってから、ゆっくり話し始めた。

side 辻

今から三日ほど前のことだ。

いつも通り稽古に行って帰っている途中、カツアゲの現場に出くわした。

制服が聖祥付属のものだったから、狙われたんだろう。

その時は『そいつの問題だから』と無視したんだが……。

「何ガンつけとんじゃ我え！！」

「……は？」

とばっちりを受けてしまっただけ。

カツアゲされていた奴と一緒に不良に絡まれてしまった。
俺の問題となれば、自分で対処しないわけには行かないから、竹刀
に手をかける。

「お、やるかあ？」

「やめておけよお、お兄さんたち、もっと怖いものもってんだから・
・・・・」

二人同時に動きがあった。

それなりに速い速度で、俺達二人にナイフを振ってくる。

これは・・・・無傷では帰れな・・・・っ！？

「・・・・・」

「なっなんだてめえ！？」

「おまえは・・・・っ！」

目の前に、突然女の子が現れた。

金髪であることから、日本人じゃないことが分かる。

それだけならまだいい。

俺たちが驚いたのは、彼女が指でナイフを止めていることだった。

「あ、あの君は・・・・」

「大丈夫、下がって」

俺の後ろにいた聖祥付属生が、そいつに声をかけた。

そいつはこっちに微笑んでから、不良と向き合う。

そして、

「・・・・・」

「はっ？」

「ぐえっ！」

「・・・・・・・・・・信じられるか？」

明らかに年下の子が、一瞬で何倍も大きい不良をのしたんだぞ？
しかも確実に人体の弱点を付いている。

こいつ、やるようだな・・・・・・・・。。

「あの！ごめん、助かったよ！」

「いいの、無事でよかった」

少女は聖祥付属生に向けて微笑んでから、こつちを見た。
そして同じように笑って、

「あなたも、怪我はない？」

「あ、ああ、お陰でな」

「うん、よかった」

そのときの笑顔を見て、何と云うか、顔が火照ったというか・・・・・・・・

それまでの自分を変えてみたくなってな。

今でも時折、彼女の顔を思い出す・・・・・・・・・・・・？

「おい、どうした？一条？」

ぽかんとしている一条。

ために目の前で手を振ってみるが、なんの反応もしめさない。
・・・・・・・・・・どうしたんだ？

「・・・・・・・・・・っ」

・・・？

一体何が

「みんな大変だーっ！！辻に春がキタ

ッ！！！！」

side ???

「ふつくしゅ！」

「風邪か？」

「かなあ？」

ハンカチで口元をふいてから、一息ついた。

直後に視線を感じたので、なんとなく夜一さんを見つめる。
ちよつと怖い顔・・・ってまさか。

「お主、この間街に出たじゃろ？」

「なっなんの話かな！？」

「動揺しておる時点でバレバレじゃ、まったく、あやつに出ないよ

う口すっぱく言われておるじゃろっ」

「だ、だってひまなんだもん！」

一日中お部屋の中じゃつまんないよ！

「あと少しばかり我慢すればいいじゃろっに、体に魂魄が定着するまで、最低半年はかかるんじゃないぞ？」

「ううっー……………」

……………半年、かぁ。

今の内からやること考えとかないと。

まぁ、いくつかは決まってるんだけどね。

「ふっふー！こーんにーちはー！」

あ、アスカさんだ！

「こんにちはー！」

「おっす！おひさし〜」

アスカさんの手になにか袋が握られている。
何だろう？

「ん？ああ、気付いた？」

そっいつて、アスカさんが出してくれたのは……………アイ
ス？

「ブックモ ブラ、九州地方某県のご当地アイス、食べる？つ
ていうかそれ目的で持ってきたんだがなwww」

「食べる食べるー！」

「夜一さんもどうぞ」

「む？ああ、いただく」

みんなで、そのアイスを食べることになった。

山がプリントしてある青い袋を開けると、チョコとコーンがトッピングしてあるアイスが出てくる。

んー、おいしい！

アイスに舌鼓を打っていると、アスカさんがこっちを見て、

「あんた、こないだ街に出たでしょ？」

「つむぐー！」

「わしはともかく、おぬしが何故その事をしている？」

「ごほごほっ……………」

「いや、うちの知り合いがあんたを見たっていつてるから」

知り合いって……………えっと、この間出た時は……………あ。

「あの時助けた剣道の人かな？」

「多分、っつーか間違いなくそれ」

偶然だね、アスカさんの知り合いだったなんて。

するとアスカさんはため息をついて、「それよりも……………」と、

「暇だつても分からなくも無いけど、退くべきところは退いてちよーよ？」

「むう……………はい」

「ま、そこまで暇してるんならちようどいいかな？あんたの武装の試し斬りがてら、ちょっと連行しようかなっと思ってたから」

・・・・・・・・・・！？

それって・・・・・・・・・・こそそしないで外にでられるってこと！？

「ホント!？」

「ほんとほんとぉ、つつてもおねーさんがよく行ってる世界だけどにゃ」

「わあい！」

楽しみだなあ！

side 桃香

「じゃあ、連絡してくれたんだね？」

「うん、近い内に向こうと合流するって」

「了解」

今ユーノくと話していたのは、管理局からきていた協力要請に関して。

元々断る理由も無かったのですが、士郎さんや桃子さん達に説明する必要があったので、そのための時間をリンディさんからいただいていた。

それで、無事で帰ってくることを条件に、承諾してもらえました。けど、ちよつとした心配が。

家族に許可をもらえたのはよかったけど、リンディさんになんて話そうかってこと。

……え？言葉は通じるだろうに、何言ってるんだって？いや、だって、こっちと向こうで文化が違うのは一目瞭然。

こっちでよしとされていることが、向こうではタブーだったらどうするの？

それに向こうは提督なんだから、失礼があつたら大変でしょ？

そういうことで、連絡はユーノくん任せました。

協力する旨はちゃんと伝わったようで、一安心です。

あ、ちなみにユーノくんは人間形態だよ？

この間の一件で、人間形態に戻るくらいに回復しているってことが分かったので。

「……で、何日くらい向こうにいるんだ？」

たまたま隣にきた恭也さんがそう聞くと、

「だいたい十日くらい、桃香達の学校はエスカレーター式だから一応進学に差し支えは無いと思うけど……」

そうユーノくんが説明する。

「そっか、じゃあ大分けっこう長い間空けるんだね」
「うん」

そんな美由紀さんとなのはちゃんの会話を聞きながら、恭也さんは少し名残惜しそうな顔をして、

「それじゃあ、久しぶりに模擬戦やるか？動かしておかないと、鈍ってしまっぞ？」

「あはは、はい」

side 雪斗

「《とゆーわけで、そっちは簡単につかまらないように気をつけて？ジュールシード見つけたら、最優先でそっちに流すから》」

「《分かった、すまないな》」

「《いんや、別にw？あたしはあくまで中立だかねww》」

あれから数日。

ついさきほどもで、ユーリに管理局での方針を教えてもらっていた。本当はいけないことなんだろうが、今はそれありがたい。

（自分の身はともかく、フェイトお嬢様がいらっしやいますものね）

(悪く言やあ、お荷物だなww)

オーナー二人の呟きにため息で返してから、フェイト達のほうを見た。

どうやら、アルフに逃げようと説得されているようだったが、フェイトは首を横に振って拒否しているようだ。

その後何度も提案し続けるが、平行線をいくばかりだ。

「もう！雪斗から何か言ってくれよ！このままじゃフェイトが……！」

「俺はフェイトの意見を尊重するな」

「ちよっ！」

今にも噛み付きそうなアルフを抑えてから、

「逃げたところでどうなる？今度は管理局と、プレシアの両方から負われるに決まっているさ」

「プレシアにとって貴重な駒だし」と、フェイトには聞き取りにくい声で、アルフにそう告げる。

アルフはやりきれないような顔で押し黙っていたが、そのまま立ち上がり、その場を去っていった。

「ユキ、ちよつと言いすぎじゃ……」

「まあ、そうかもしれない……けど、アルフなりにお前を氣遣った結果なんだから、頭ごなしに否定するなよ？」

「……ん」

side 刀護

「でやあああああっ!!」

「っ!!!!」

俺が繰り出した一閃で、目の前の虚が倒れる。
ため息をついて、斬魄刀を納めた。

閑話休題。

「お茶、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

場所は変わって浦原商店。

居間で寛がせてもらっていると、雨さんがお茶を出してくれた。
お礼をいつてから、早速一口。

んー、この人が入れるお茶って、おいしいんだよねあー。

「はあ………」

ため息を一つ、ついた時だった。

「こんにちはー!」

「……っ!」

この声は・・・・・・・・！！

「こんにちははやてサン、おや？こちらの方は？」

「あ、最近うちに住み始めた子です！」

やっぱりか・・・・・・・・。。

・・・・・・・・何か知らないけど、最近はやてと顔合わせるのが照れくさく感じている。

表からは、はやてと浦原さんの会話が聞こえていて。

どうも今日ははやて一人じゃないらしい。

一体・・・・・・・・？

「ヒノコ、とお呼び下さい」

「ヒノコサンですね、了解っす」

ヒノコていうのか、声の感じからして、高校生とか、そのくらい・・・・・・・・？

「いつもどおり、五百円分ですね？」

「はい！」

「あ、それと、刀護さん来てますよ？」

ちよっ、浦原さん！？

「ほんまですか！？」

「はい、ちょうど居間にいらっしやいます」

何で教えるのかなあ！？

俺は隠れているから、はやて達の声しか聞こえないけど、嬉しそうにしているのが手に取るように分かる。

「お嬢様、会計はわたしが済ませておきますから、どうぞお友達のところへ」

「あ、ごめんな、お願いや」

「はい」

ガラガラと車椅子の音がこっちに近づいてきて……………。

「とーごくーん！」

「おわあっ!？」

抱きつかれ……………って!!!

「ちょっとはやてさん!？なにしたらっしやるんで!？」

「あー、ごめんなー、久しぶりに会ったから、つい……………」

ついで、この子は……………。

「あの、あかんかった？」

「っ、いや、別に!ただびくりしただけだから!」

「ほ、ほんまに?迷惑やなかった？」

「大丈夫!大丈夫!」

するとはやてが、へにやっと笑った。

「よかったわあ、嫌われたかと思うた」

「あ、ははっ……………」

もう、乾いた笑いしか出てこない、うん。
でもまあ、こういうのもいいかもな。

と、そこへ、

「お嬢様、お待たせしました」

「あ、ご苦労さんや」

はやてと一緒に来たらしい女の人が入ってきた。
銀色の長い髪で、毛先は桜色になっている。
つていうか、

「お嬢様？」

「えっと、何というか……一応関係としては、おねーちゃん、従者さん？けど、こちらはそんなん気にせんよ？」

「初めましてヒノコと申します、お見知りおきを」

「あ、こ、こちらこそ、黒崎刀護です」

正座して、深くお辞儀をされたので、思わずこっちも返してしまった。

何というか、丁寧な人なんだな。

「もう、もうちょっと碎けた感じでもええって、いつもゆるーとるやん」

「お言葉ですが、他人であるからこそ、礼儀を重んじなければ」

帰ってきた言葉に、はやては苦笑いしていた。

side なのは

「それじゃあ、しばらく会えないんだな？」
「……………」

わたしは鬨夜くんに、しばらくの間用事で合えないことをお話して
いました。

さすがに、魔法のことは話せないから……………。

「それは、寂しくなるな」

「……………ごめんなさい」

「別に、お前が謝ることじゃないだろ？」

わたしが謝ると、鬨夜くんは少し笑って、頭を撫でてくれた。
ちなみに右腕の包帯は無くなっているから、怪我はすっかり治った
みたい。

ここ最近、夕方になってから、鬨夜くんと一緒にいるのがわたしの
日課になっています。

さすがに始めは練習の邪魔になっていないか不安だったけど、本人
が、

『誰かに見てもらってたほうが、癖とか直し易いだろうから』
って言うてくれて……………。

それ以来、ここにずっと来ています。

「……………ありがとう」

「どういたしまして」

いつも笑うときは控えめに、少しだけでも、暖かくて。
家族といるときとはまた違った暖かさを感じる。

「……………ふにゅ」

「む？すまん、何か妙な所を触ったか？」

「あ、だ、大丈夫！どこも触ってないよ！？」

「そうか、それはよかった」

そう言つて、撫でるのを続ける鬨夜くん。

……………わたしは人殺し、だけど、こう言つ時間を過ごすくらい、いいよね？

第二十五話お久しぶりです（後書き）

今まで影が薄くなっていた人々を出してみたり。

辻くんは元からレギュラーに決まっていたw w

本編で出てきたアイスは実在します。

だから伏字にしてあるんですw w w

所々で桃色空間になっているのは、その通りと言っことのでーつ。
誤字脱字があれば、ご指摘お願いします。

27万hit記念！『遠い世界で』（前書き）

活動報告でも言ったと思いますが、アクセス数が27万行きましたあゝ！（はいはい拍手ー！！）
というわけで、記念小説！どうぞ！

27万hit記念！『遠い世界で』

森の中、誰も訪れないような深い場所。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

古ぼけた建物の前に突っ立って、それを見つめる人物が一人。やけに緊張した面持ちで、その中へと入っていった。

扉を開けると、生暖かい風と共に、かび臭い臭いが鼻をつく。完全に開ききり、息を吞んで、一步一步、慎重に進み始めた。

ことの始まりは、数日前に届いた任務だった。

最近になって発見されたいしいこの建物の内部に入った調査員が、必ず怪我をして帰ってくるという。

その特徴は、ダークグレーの髪に空色の瞳だと言うのだ。

人物　少女は、その特徴に心当たりしかない。

故に、調査員を襲撃している『者』の正体を自身の目で確かめに来たのだ。

時折遺跡の特徴をレポートに纏めながら、仕掛けやトラップを掻い潜り、前に進む。

突然、開けた場所に出た。

位の高い者が使用していたであろう部屋。

奥の方、玉座と思われるイスに、そいつは座っていた。

イスが薄汚れているからか、後ろから日の光が当たっているからなのか。

その姿は、圧倒的な威厳とプレッシャーを纏っていた。

「・・・・・・・・・・へえ、あたしを見て驚かないか」

頬杖をつきながら、彼女は口を開く。

相手をおちよくするような、余裕たつぷりの口調だ。

少女は思わず刀を投影し構えて、彼女を見据える。

「くすくすつ、あたしと戦うってか？ いいじゃん、おもしろそーじやん」

言っていると彼女は立ち上がり、少女と同じく刀を投影した。

少女は、彼女が自分と同じ技術を使ったことに驚愕しながらも、納得したような、信じがたいような表情をする。

するとまた彼女はくすくす笑った。

「ぶつちやけた話、あたしだって信じがたいよ？ けど、どうやら現実っぽいしね」

空気が引き締まり、両者ともに、腕をだらりと下ろす。

これが彼らの構え、隙が大きいように見えて、幅広い範囲で応用が利く形のそれを取ることで、ピアノ線が伸びきるような感覚を覚えた。

数秒だけ、世界の音が消える。

どれほどの時間が経ったのだろうか？

やがて建物の外で、木の葉が揺れる音が聞こえたとき。

空間いっぱい、金属が打ち合う音が鳴った。

「見せてごらん？ ご先祖様がきつちり指導してあげるー！」

先ほどより高い金属音が続けて三回、まるで合わせ鏡のような動きで、二人は刀を打ち合う。

同じ色合いのダークグレーが宙に舞い、同じ色合いの空の瞳が相手

を捕らえ続ける。

彼女の横一闪、少女は屈んで避ける。

少女の縦一闪、彼女は受け止めて弾き返す。

大道芸のようにも見えるそれは、見るものを魅了すること間違いなかった。

止まない打ち合いの中、彼女は罅迫り合いを突然切り上げて後退する。

「なるほど、刀は合格レベルだね？じゃ、次いこうか！！」

「………っ」

トレス・オン
具象・開始

刀を破棄し、次に両者が出したのは白黒の双剣。

息つくまもなく、再びぶつかった。

今度は斬り合い、互いに斬撃の嵐を浴びせかけ、相手の攻撃を防ぎ、避けて、受け流す。

鶴翼三連っ！！

「おっと」

「………っ」

すれ違いざまに斬。

両者の体に傷がついた。

だが共に怯まず、次に投影したのは弓。

黒く無骨な形をしたそれを、華奢な腕で支えて引き絞った。

フルンディング
「赤原獵犬！」

放たれた矢同時がぶつかり、爆ぜる。

発生した爆煙をかき分けるように、飛び出して、再び投影した双剣を投げ飛ばす。

今度は違う場所から出血、顔をしかめる少女に対し、彼女は笑っていた。

まるで、子どもの成長を喜ぶ親である。

「はっはあ！お嬢ちゃんやるねえ！」

互いに双剣を破棄。

一定の距離を取った両者は、足元に魔方陣を展開させる。

「熱く滾りし炎、聖なる獣となり不道を喰らい尽くせ！」

「集え暗き炎よ、宴の客を戦慄の歌で迎え、もて成せ！」

フレイムドラゴン！

ブラッディハウリング！

湧き上がる瘴気と、炎の龍が激突。

室内の温度が急上昇し、一瞬で汗が大量に湧き出す。

少女は怯まず、次の言の葉を紡いだ。

「ナイン・テール・フォック！真実知る精霊の導き！己の耳で、足で、目で、しかと確かめよ！ナウマクサンマン・ダバサラダンカン！受けよ、明王のいかづち！」

「っ我を取り巻く六つの星よ、万物を阻む光の盾となれ！」

とっさの判断で、彼女は防御魔法を唱える。

刹那、轟音と共に光の斬撃が結界を攻撃。

彼女はなんとか耐え切るも、大破した結界は存在しきれなくなり、自壊する。

「I am the bone of my world!」

しかし彼女は再び防御を展開、今度は大輪の花を構えた。直後、空気を引き裂く音をたてて、稲妻が襲い掛かった。

「じゃあこっちの番だ!」

攻撃が止むと同時に、彼女は詠唱を開始する。

「オン・アラ・ハシャノウ! 文殊の名において、その闇今ここで被おうぞ!」

パキンッと、指を鳴らすと同時に少女の頭上に現れたそれは、聖水を滝のように落とした。

一方の少女は、若干湿りはしたものの、防御には成功したようだ。使った札が力を失い、ただの紙になるのをみながら、少女は彼女を見据えた。

彼女は少し考えるような、何かを思い出しているような素振りを見せている。

そして、満足そうに頷いた。

「ん、オールおっけー! いやー、事故ってたまたまここに来たとはいえ、面白かったわー!」

詠唱破棄、ナイチンゲール

ふわっと、彼女が発動させた術が、傷を治癒させる。

まるで始めから傷など無かったような、その精錬度に、少女は感嘆の声を漏らしていた。

その様子を見ていた彼女は、やがてブツブツと音を立て、なかなか

写らないテレビのようにその姿をぶれされる。

彼女は自分の手を見て、苦笑いした後、少女を見つめた。

「こんなに強いのがあたしの子孫なら、大丈夫か……いや、未来にこれるなんてなかなかない体験だからね！悪いとは思っただ、ちょーっ試さしてもらったよ？」

へらへらと笑う彼女はなおも続ける。

「っーか、まさかの西洋魔術まで使う系？うは、下手したらあたしよりチート？え、何コレ、あたし心配するだけ無駄ってか？」

彼女の下半身はほとんど消えていて、さしずめ、幽霊を思わせた。顔を七変化させながら、また最後に笑って、

「んじゃ、おねーさんはこの辺で、まったにやゝww」

元々会うことなどありえない。

それを分かっているはずだったが、それでも口にしたのは『また』という言葉。

少女も照れくさそうに笑いながら、手を振り返す。

「……………あ」

顔まで消えかかったところで、彼女は思い出したように声をあげ、少女を見た。

「お嬢ちゃん、お名前は？」

「……………わたしは」

ブツンツと、音が遮断される。
だが唇の動きは見えた。
彼女はまた笑って、

「いい名前だ」

27万hit記念！『遠い世界で』（後書き）

そこ、思ったより短いとか言わないの！

いや、はい、これ書く前に、ポケ ン金銀のレッド戦の曲聞いてたら、思い浮かんだっす。

あと、同じ動画にあったキャッチフレーズの『原点にして、頂点』
つてのにビビッと来まして……。

今回登場人物は二人だけですが、二人が何者かはみなさんのご想像にお任せしました。

最後に、なかなか更新できないにも関わらず、27万になるまで読んでいただいた皆様に、感謝を！

ありがとうございます、これからもしろしくお願いします！

第二十六話選択と秩序

free side

アースラ、会議室。

「というわけで……本日0時を以って、本艦全クルーの任務は、ロストログア『ジュエルシード』の搜索と回収に変更されます」

スタッフ達は少し変わった形のテーブルを囲み、真剣な面持ちでそう宣言したリンディの次の言葉を待つ。

「また本件においては、特例として、問題のロストログア発見者で、結界魔導師でもある……」

「はい、ユーノ・スクライアです」

緊張しているのか、ユーノの声は少し上ずっている。

「それから、彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

「た、高町なのはです!」

「亜桜桃香です」

立ち上がり自己紹介した三人を見て、リンディは少し頷いて、

「以上三名が、臨時局員として事態に当たってくれます」

「不束者ですが……」

「よろしく願います」

三人そろって、お辞儀をした。

その時、たまたまクロノとなのはの目が合う。

なのはが人懐っこく笑って見せると、クロノは顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

何があったのかと、ぽかんとするなのには対し、ユーノは何処か不満そうにしている。

(…………ここにユーリさんがいたら、絶対からかうでしょうね)

(あの人ならやりかねないよ…………)

アースラ、船橋。

「ここからは、ジュエルシードの位置特定はこちらでやります、場所が分かったら現地に向かってくださいね？」

「はい！」

リンディに力強く返事するのはとユーノ。

桃香は声にこそださないものの、黙って頷いてこたえた。
と、そこへ、

「艦長、お茶です」

「ありがとう」

リンディはエイミイが持ってきた湯のみ（日本を意識しているのか、でかかと『湯』の一字が書かれている）を受け取り、一口。その様子を見ていたなのは少し考え込んでいるような表情をしていた。

「？どうかしたの？なのはちゃん」

「ああ、いや、その……」

わたたと慌てるのはを見た桃香は、苦笑いしてから、変わりに指摘することにした。

「今日は砂糖とミルク、入れないんですか？」

「ああ、実はこの間、ユーリさんに日本のお茶の楽しみ方を教えてもらったの、お砂糖もミルクも入れないのが日本流でしょ？」

「ええ、まあ、そうですね……」

「というか、いつの間？」

またぽかんとするのには対し、リンディは微笑んで答えてから、思い出したように、

「そう言えばなのはさん、桃香さん、学校の方は……」

「あ、はい、家族と友達には説明してありますので……」

一方その頃、聖祥大学付属小学校。

「というわけで、高町さんはご家庭の事情で、しばらく学校をお休みします」

「だが、病気や怪我や、不幸なことがあって休むわけでもないそうだから、心配はするな」

なのはと桃香の教室で、二人の欠席が担任から告げられていた。

「高町さんがお休みの間、ノートとプリントは………」
「はい！わたしが！」

なのはのクラスで、そう手を上げたのはアリサだ。

「それではアリサさん、よろしく願いしますね」
「はい！」

担任は頷いてから、

「さて、それではホームルームを始めましょう」
「きりーっ」

号令がかかり、クラス全員が立ち上がる。
そんな中、すずかは一人外を見て、思う。

（なのはちゃんと桃香さん、元気でいるかなあ）

某所。

桃香達の目の前にある結界の中で、鳥型の暴走体が暴れている。美しさゆえにおぞましいそれに、なのはとユーノは少し怯んでいるようだったが、桃香は違った。自らの傍ら、半透明となつて出てきている『者』に声を掛ける。

「いけるね？シルフ、セルシウス」

誰の使役精霊だと思っている？

任せてください。

桃香は二人に微笑んでから、なのは達と向き合つた。

「二人とも、いつも通りにいけば大丈夫、ただ、油断も無理も禁物だからね？」

「はい！」

「もちろん！」

三人で頷きあつてから、結果内に飛び込んだ。

「なのはちゃんはシューターで翻弄！ユーノくんは隙を見て捕獲して！セルシウスは二人のフォロー！シルフは槍と融合！」

「わかつた！」

「まかせて！」

承知！

御意！

素早く指示を飛ばし、シルフの宿った槍を構える。

なのはがシューターで追い込み、鳥が攻撃した際に発生する流れ弾をセルシウスが処理。

そのお陰で集中できていたユーノは、捕縛の準備が整う。

それを確認した桃香が鳥の背後に回った。

シルフの加護もあり、移動速度はフェイトに勝るとも劣らない。

一閃が鳥の翼を両断し、飛行不能にする。

それでも片方の翼で飛び回る鳥を、ユーノが鎖で捕縛した。

「つかまえた！なのは！」

「うん！」

なのははレイジングハートを封印形態に変形させ、帯状の魔力を鳥に向かわせる。

帯は鎖と共に鳥に絡みつき、その顎にシリアルナンバーを浮かび上がらせた。

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル8！封印！！」

号令と共に宙で待機していた残りの帯が、突き刺さる。

鳥は断末魔の悲鳴を上げて、消えていった。

「状況終了です、ジュエルシードナンバー8、無事確保！お疲れ様、なのはちゃん、ユーノくん、桃香ちゃん」

「はい！」

「お疲れ様です」

船橋にいたスタッフは、三人がそろっていることをモニターで確認してから、

「ゲートを送るね、そこで待ってて！」

成り行きを見守っていたリンディは、満足そうに唸ってから、

「三人ともすごい資質だわ、このままうちに欲しいくらいかも」

閑話休題。

船橋とは別室で、エイミィはフェイト一味について、調査を進めていた。

「フェイトちゃんって言ったっけ？この子」

「ああ、それにかつての大魔導師と同じファミリーネーム……」

・

「へえ、そうなの？」

「大分前の話だが、ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして、追放されてしまった大魔導師」

クロノの話に、エイミィは感心したような声を漏らしてから、

「じゃあフェイトちゃんはその関係者？」

「そうとは限らない……が、なのは達が言っていたことが本当なら、彼女は少なからず虐待を受けていることになる」

エイミイは納得しながら、フェイトに関する身辺関係を検索にかける。

しかし出てきたのはデータが無いことを表す赤い文字だった。

「あー、やっぱりだめだぁ・・・フェイトちゃん、よっぽど高性能なジャマー結界使ってるみたい」

「使い魔の犬・・・多分こいつがサポートしているんだ、それと・・・」

「雪斗くんもだね」

次にモニターに表示されたのは、アルフと雪斗。アルフは狼形態で写っている。

「おかげで、もう2個もこっちが発見したジュエルシード奪われちゃってる！」

「いや、それはフェイトたちだけじゃないだろう」

そういつてクロノがパネルを操作。

出てきたのは、ダークグレーの短髪を揺らす少女。

「ユーリ・ローウェルちゃん、だっけ？」

「ああ、奪われたうちの一つは、ユーリが先に回収して、それを譲渡しているみたいだ」

「ほんとにジュエルシードが無くなれば何でもいいんだ・・・」

呆れるエイミイを他所に、そこまで話し終えたクロノは一息ついてから、

「しっかり探してくれ、頼りにしてるんだから」

「はぁ、はいはい・・・」

アースラ廊下。

三人が割り当てられた部屋に向かっていると、なのはが突然立ち止まった。

桃香とユーノも、吊られて立ち止まる。

「どうしたの？」

「……フェイトちゃん、現れないね」

「ああ、こつちとは別にジュエルシードを集めているみたいだけど・

……」

「うーん……」

静かな湖畔。

その岩の一つに、フェイトはたたずんでいた。

そこへ、ひとしきり搜索を終えたらしい雪斗とアルフが戻ってくる。

「だめだ、ここも空振りだよ」

「どうやら先を越されたらしい」

「……そう」

どーも、ユーリ・ローウェルこと、一条飛鳥です。

今何やってるかって？怪物狩人の醍醐味、肉焼きだよ！！

ジュエルシード探索は、現在はフェイトちゃんらに加勢してるわけだけでも、管理局に本腰入れられるのも怖いので今はなりを潜めています。

……いやね、組織は胡散臭い部分もあるから信用できないけど、個人に比べたら力はその倍以上。

ぶっちゃけ、この世で一番やっかいなものだと個人的に思っている。さらに相手が次元世界を股にかける時空管理局だぜ！？

逃げ切れるとしても、次第にこっちが手詰まりになつてはいゲームオーバーってなるのは、洒落にならん、まじで笑えん。

というわけで、こないだフェイトちゃんたちにジュエルシード渡したとき以来、ずっとなりを潜めてますです、はい。

そんなこんなで暇だったので、はやてと一緒にプチバーベキューやったり……。

「いただきます！」

手を合わせて、肉にかぶりついた。

作法？むしろそんなやってる方がおかしいって！

こういう肉はかぶりつくのが作法！

……すみません、なんか壊れたね、うん。

それにしても、『あの子』の復活とか、装備とかも無事決まったし、いい感じに原作破壊できてるわ。

あとはプレシアさんと祝福ちゃんだけかな？

よーし、おねーさんがんばっちゃうぞー。

「おねーちゃん、お野菜いる？」

「ピーマンとにんじんくれ」

「はいな！」

とりあえず今は腹ごしらえね。

………うん？ヒノコ？

あの子は故郷で『あの子』のお守りやつてる。

つつても聞き分けのいい子だから、そんなに苦労はしないと思うけどね。

「《ユーリさん》」

「《ん？桃香ちゃんか、どしたん？》」

「《いえ、ただ………》」

念話を飛ばしてきた桃香ちゃんは、少し黙ってから、

「《残りのジュエルシードが、六個になりました、けど、場所が分からなくて………ユーリさんなら、分かりますよね？》」

「《なるほど、それで『原作』しってるあたしを頼ってきたわけか

《》

「《ええ》」

残り六個………っていうことは、『あれ』か。

フェイトちゃんが無茶やつて、リンディさんが見捨てようとする『

アレ』。

したら………海の中ってことになるな。

でもそのまま教えるのは面白みがかけるし………ん。

「《あんまり原作壊すのも何かって思うから、ヒントだけでいい？

《》

「《お願いします》」

「《んじゃ、一回しか言わないからよく聞いてよ？》」

桃香ちゃんの返事を確認してから、

「《灯台下暗し》」

side なのは

《エマージェンシー！ 搜索範囲の海域にて、大型の魔力反応を感知！》

ユーノくんたちとお話していたら、艦内で警報が響いて。

《なんてことしてんの！？ あの子達！！》

急いでリンディさんのところに行くと、そうエイミーさんが叫んでいるのが聞こえた。

みんなと一緒にモニターを見て、

「……………フェイトちゃん」

side 桃香

モニターの向こうで、大きな儀式魔法を発動させているフェイトちゃん。

まさか、あそこに残りのジュエルシードが……………？

灯台下暗し

さっきユーリさんに教えてもらったヒントが、頭をよぎる。

もう、なんでもっと早くユーリさんに聞かなかったの……………！！？

「何とも呆れた無茶をする子だわ！」

隣で、リンディさんが呆れ半分、心配半分の声でそう言う。

確かにあれは無茶だ、魔力が大きいとはいえ、所詮九歳の体。

今ので絶対に限界を迎えたはず。

雪斗くんやアルフさんもいるんだろうけど、放っておいたら確実に……………。

「あの、リンディさん！わたし急いで現場に……………！」

「その必要はないよ」

抑えられなくなったのか、なのはちゃんが転送ゲートに向かうけど、クロノくんはそれを止めた。

「放っておけば自滅する、仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい」

「そんな！」

「今の内に捕獲の準備を！」

「了解！」

呆然とするなのはちゃんを他所に、クロノくんはクルーに指示を飛ばした。

モニターの向こうで、ジュエルシードと戦うフェイトちゃん達。

雪斗くんやアルフさんが必死にサポートしているけど、正直いっぱいいっぱいみたい。

そんな光景を、なのはちゃんは心配そうに見つめていた。

「わたしたちは、常に最善の選択をしないとイケないわ、残酷に見えるかもしれないけど、これが現実……」

確かに、秩序を守るためには、時に残酷な選択をしなければいけない。

「……けど、それは『組織』で考えた場合。個人としては、納得できない……！」

「……シャドウ」

ここに

ゆらっと、わたしの影から闇精霊『シャドウ』を呼び出す。それからはちゃんに念話を飛ばした。

「《なのはちゃん、こっち》」

こっちを振り返ったなのはちゃんは、シャドウを見て驚いていたけ

ど、味方だつて理解したみたい。

叫びそうになつた口を、なんとか塞いでいた。
続けてユーノくん目配せして、頷きあう。

それからまたなのはちゃんを見て、また念話を飛ばした。

side なのは

「《これからシャドウの能力を使って、フェイトちゃんのところ
道をつなぐ、けど、それをしたらわたしたちは命令違反ってことで
処罰されることになる………それでも、いく?》」

そう、桃香ちゃんは真剣な顔で、聞いてくる。

………確かに、怒られるかもしれない、でも………。
もう一回、モニターを見る。

フェイトちゃんが、一人で必死に戦っていて、雪斗さんやアルフさ
んが必死に護っていて。

………うん、やっぱり。

「《行く! 見てるだけなんて、いや!》」

桃香ちゃんは笑つて、シャドウさんに合図、隣に真つ黒な穴をあけ
た。

息を吞んでから、そこに向かって駆け出す。

「あ、おい!」

「どこに行くの!?」

一歩手前で、リンディさんやクロノくんが止めようとして来た。けど……ここで止まるわけには、いかない！

「っやあ！」

正直、真っ黒な穴は怖かった。

でも、フェイトちゃんだって、怖いはずだから。だから………！

side 桃香

「貴様！なぜ行かせた？」

そういつて胸倉をつかんでくるクロノくん。

全く、思考回路がいくつか麻痺してるんじゃないですか？この子。

「わたしなりに被害を出さないように考えた結果です」

「君のやり方はむしろ被害が増えるぞ！」

「おやおや、じゃああなたは考えなかったんですか？あの子が自滅せず、かつ、暴走したジュエルシードが結界を越えて、市街地に及ぶという可能性を」

「それはっ………！」

クロノくんが怯んだ隙に手を叩き落として、ユーノくんに合図。先にユーノくんを穴にくぐらせて、現場に向かわせる。

主は如何する？

「ちよつと話してから、すぐに行く……ウンディーネ、ボルト、現場に先行してみんなを守って」

%&,'@* \$ #”！

御意

二人が行ったのを見送ってから、もう一度船橋を見渡してみる。クロノくんが睨んで、リンディさんは複雑そうにしていた。流石にオペレーターは対応に追われているから、こつちを見ていなかったけど。

「……確かに組織として考えれば、あなたの考えは正しいですが、個人として考えれば、納得できない選択です」

「だが、そうしなきゃ秩序は……！！！」

「……秩序、ねえ」

くすつと、笑顔がこぼれた。

「女の子一人救えない秩序なんていりません、くそくらえです」

呆然とするハラウン親子。

言いたい事は言ったので、無視して、シャドウのゲートを潜る。

第二十六話選択と秩序（後書き）

そんなこんなの二十六話。

個人的に桃香の精霊をいくつか出せて満足。

第二十七話海上で（前書き）

二ヶ月ぶりですね…………。

8/4：ルビに変換されていない部分を発見、とりあえず修正

第二十七話海上で

side フェイト

六つそろったジュエルシードの力は、わたしの想像を超えていた。結界を張っているから、市街地にいくことはまず無いと思うけど、わたしだけで封印できるかどうか……。

「っフェイト！」

「ユキ!?……………っぐあ！」

後ろから、一撃。

背中が焼けるように熱くなって、体が動かしづらくなる。

でも、母さんを待たせるわけには……………それに……………。

思い出すのは、ユリー達に助けられてから、あの白い子　なのは
の家で過ごした時間。

他人の家なのに、とても暖かくて、優しくて。

ユキやアルフも、いつもと比べて笑っていた。

ジュエルシードさえ、ジュエルシードさえそろえば、母さんと、あんな時間を過ごせるはずなんだ……………。

だから……………！

「っああああああああっ!!」

体に鞭打って、バルディッシュを掲げる。

その時、上空から魔力反応。

転移系のそれが放出したのは……………なのは？

続けてユリー、少し遅れて桃香がやってきたのがわかった。

「……あの思い出があるからなのか、三人がやってきたことにほっとした。」

「フェイトちゃん!」

なのはは真っ先に駆けつけてくれて、わたしに抱きついた。
「……って、ええ!？」

「ちょ、なの……」

「大丈夫!？どこも怪我してない!？」

「あ、あの……」

なのはの顔は、本気で心配しているそれで。

わたしの魔力が限界だつて知ると、躊躇い無く分け与えてくれた。
なんというか、胸の辺りが暖かい……。

「フェイト!」

「フェイトちゃん、大丈夫!？」

ジュエルシードに攻撃を加えていたユーノと桃香も合流。

さつき怪我した背中を治してくれた。

ほっと安心したけど、まだユキとアルフが……!!

「あ、フェイトちゃん!」

後ろでなのはが叫んでいる。

でも悪いけど、今は構ってられない!

「アルフ!ユキ!」

「フェイト!」

「フェイト、ダメだ！後ろ！」

二人に急かされて、反射的に振り返ると、ジュエルシードの攻撃が来ていた。

しかも、回避も防御も間に合わないというおまけつきで。頭が真っ白になって、動きを止めてしまう。

・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、もう終わりかも・・・・・・・・。。

side なのは

「フェイトちゃん！」

そんな、せっかくここに来れたのに・・・・・・・・！！

フェイトちゃんが危ないよ！！

ユーノちゃんと桃香ちゃんが止めるのを振り切って、フェイトちゃんと攻撃の間になんとか入り込む。

そこまで来て、自分も危ないことに気付いたけど、それでもいいかなと思っていた。

ただ、フェイトちゃんが無事かどうかが気になっていて・・・・・・・・。。

side 桃香

この時ほど、自分の判断を呪ったことは無い。

ウンディーネもボルトも、ジュエルシードを抑えるのに手一杯で向かわせることも出来ない。

かといって、今更わたしが向かおうとしても、間に合わないのがオチ。

「……………どうしよう、どうしようぶつしようぶつしようぶつしようぶつ！」

「考えなきゃ、考えなきゃ、考えなきゃ……！」

side ???

「んで大将、暴れるわけにはいかなえのかい？」

「そそ、あんまり手の内は見せたくないしね」

「なるほどな」

ヒノコとの交代で大将の元に来ていた俺は、雲の合間から現場を見下ろしていた。

目の前には暴れているジュエルシードが六つ。

あれを相手に戦えないのはつまらねえが、外の世界に來ただけでもありがたいと思わなきゃな。

「つーわけで、景気良くやっちゃって！」

「おうよお！任せな、大将おおおおっ……！」

side 雪斗

目の前で、なのはとフェイトが、とりかえしの付かないようなダメージを受けかけた途端。

ッ！！！！！！

「っぐお！？」

「うわぁっ！？」

「にゃああああぁっ！？」

「~~~~~っ！！」

文字通り鼓膜を突き破りそうな咆哮が聞こえて、その場にいた全員が、思わず耳を塞ぐ。

獣形態になっていたアルフは防ぎようがなかったらしく、一人悶えていた。

何とか辺りを見回して発信源を探すが、見当たらない。

おそらくかなり離れたところにいるんだろうが………だとしてもどんなボリウムだ！？

近くで聞いたときの事を考えると、苦虫をつぶした顔になってしま

う。

だが、一応味方ではあるようだ。

証拠に、すぐに復活した俺達と違って、ジュエルシードの勢いは弱まったまま。

フェイトとなのははぼんやりしている。

が、先に再起動したのはなのはの方だった。

「フェイトちゃん、手伝って！残りのジュエルシード、一緒に止めよう！」

「・・・・・・・・つ」

表情が引き締まって、ジュエルシードと向き合う。

「アルフ、大丈夫か？」

アルフは意識をはっきりさせる為に、頭を振っていた。

「何とか・・・・・・・・さーて、反撃開始かい！？」

「ああ」

さて、もう少し粘るとするか・・・・・・・・！！

f r e e s i d e

ジュエルシールドが発生させた雷の合間を縫うように飛ぶ。

襲ってくる波飛沫をもともせず切り裂き、攻撃をする。

臆することなくバインドで固定し、そのバインドの発動者を護る為に相手を斬る。

人ならぬ、しかし心通わせた者達を使役して、全体の援護を行う。

そこにあつたのは、高度な連係プレーだった。

なのはが撃ち、フェイトが斬る。

ユーノとアルフがそれを補助し、雪斗はジュエルシールドの妨害をここごとく斬り伏せる。

桃香はウンディーネとボルトに加え、イフリートも呼び出して、全体の援護を行っていた。

その時、ジュエルシールドの一つが市街地に向かった。

「I am the bone of my world（我が骨子は捻じれ狂う）……カラド・ボルク偽・螺旋剣！」
「ステインガースナイプ！」

しかし、途中から参戦したクロノにより阻止。

さらに弓から放たれた螺旋した剣が突き刺さり、妨害された。

弓を撃った本人の姿を見ることはできなかったが、全員予測は付いていたのでスルーすることにした。

そんな中、強化魔法や治癒術を駆使していた桃香は、自身の精霊を見渡して、少し物騒な考えを思いつく。

すぐ全員に退却の合図を送り、続けてボルトに指令。

ボルトはありったけの電流を流して、ジュエルシールドが纏っていた海水を打ち消した。

さらにそこへイフリートが火炎を撃ちこんだ。

「……あれ？まさか……」

その場にいた全員、彼女が何をやらかそうとしているのか悟り、咄嗟に障壁を展開。

直後、轟音と共に炎上。

海の上なので炎は一瞬で収まったが、彼女の容赦の無さに冷や汗をかいてしまう。

だが、ジュエルシールドは今無防備な状態。封印するには持って来いのタイミングだ。

「フェイトちゃん！二人で、せーので！！」
「・・・・・・・・ん！」

全員が見守る中、なのはとフェイトは陣を展開。封印の術式を構築し始める。
狙いは、ジュエルシールド。

「リリカルマジカル！封印すべきは忌まわしき器！」
「ジュエルシールド！封印！！」

s i d e 飛鳥^{ユリ}

ふっふー、だいぶ息があつてねあの二人。
まあ、後に友達になるんだし、当たり前っちゃ当たり前なのかにや

「？」

弓を破棄して、見下ろす。

うん、あの様子なら大丈夫だね。

「んー・・・・・・・・・・」

「ん？どした？」

使い魔が悩んでるね。

聞いてみると、

「いや、俺あんまり出番なかったなって」

「あー、まあ、手札は今あまり見せたくないし、それにさっき二人も助けたじゃん、十分活躍したって」

「まあ、そうだけど・・・・・・・・・・」

「大丈夫だって！そのうち暴れる機会あるから、活躍期待してるよ」
「？」

「ああ！任せな！！」

つぶふ、さーて、あっちの方は何か進展あったかなー？

side フェイト

「やった！やったねフェイトちゃん！！」

「あ、わわっ……………うん」

なのはは嬉しそうに笑って、わたしの手を握ってくれた。
伝わる温かさに、思わず笑顔がこぼれる。

周りを見ると、アルフやユキ、桃香とユーノも笑ってて。
管理局の男の子も、離れたところで安心したため息をついている。
……………母さんもきつと見てくれるんだろう。

甘えはいけないと思うけど、でも。

今は、この温もりが心地いい。

side プレシア

「……………」

モニターの向こうで、笑っているフェイト。

控えめだけど、私の前では絶対に見せないもので。

同じくジュエルシードを求めているという白い子に、抱きつかれて

いた。

「……唐突に、あの時ユキトという少年と一緒にいた少女のことを思い出す。」

アリシアやフェイトのことで葛藤するわたしを、「かっこいい」と評してくれた、ダークグレーの短髪の少女。

モニターでは確認できないけど、きっと私と同じようにこの光景を見ていることでしょう。

「……………」

もう一度、フェイトを見つめる。

始めは、アリシアさえいればよかった。

寂しい思いをさせた分、うんと我が俤をさせるつもりだった。

……………だけど。

あの少女に言われてから、在りし日のあの子が私に言った願いを思い出す。

妹が欲しい！だってそうすれば、お留守番だって寂しくないし、ママのお手伝いもできるでしょ？

優しい、あの子なりの願い。

きっとあの子は、私の今までの行動を見て、絶望していることだろう。

だったら、今からでも。

「……………フェイト」

フェイトのことを、愛しましょう。

護りましょう。
その為に、

「・・・・・・・・私は、悪役を演じましょう」

第二十七話海上で（後書き）

こっちの方で思いつきりスランプしちゃって、しばらく執筆進まなかった自分です、はい。

とりあえず、A、sまでがんばりたい・・・！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8172l/>

とある姉の原作破壊

2011年8月4日19時43分発行